
三兄弟の事件簿 2 ~ あの世からのメール ~

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三兄弟の事件簿2 ～あの世からのメール～

【Nコード】

N8738K

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

高橋空。紫藤海。春名光は三つ子の兄弟。早くに親を亡くして、それぞれ別の家に引き取られている。

同じ高校に入学した彼らに、夏休みが訪れた。『宿題を早く終わらせて遊びまわろう計画』を実行しているさなか。

海が、妙な相談を持ちかけられる。それは『死人からメールがくる』という内容で?!**完結しました**

プロローグ

なぜ？

どうして？

そんな言葉が頭を過ぎる。

いつも、いつも。

繰り返される問い。

なぜ、あなたは死んでしまったのだろう。
なぜ、未来を見ようとしなかったのだろう。

あなたが大切だったのに。

あなたのことをこんなに思っているのに。

そんな人間がいることを。

どうして、あなたは忘れてしまったのだろう。
どうして、気づかなかったのだろう。

例え、離れ離れでも。

あなたが生きている。

それだけで、よかったのに……。

そう思う人間が、ここにいるのに。

第一章 暑くて、熱い

彼の前で揺れる足。

力なく垂れた腕。

開いた口、虚ろな目。

生気のない彼女に触れると、彼女の体は、ふりこのように揺れた。

夏である。

二週間ほど前に梅雨があけると、途端に蝉の鳴く声が聞こえてくるようになった。日中、ひっきりなしに響くその鳴き声は、暑さをより一層増徴させているような気がしてならない。

昼の十一時を過ぎた。まだまだ、気温は上がるだろう。

そう思い、高橋空^{たかはしそら}はテーブルの上に開いたまま、まだ一行も目を通していない数学の教科書を閉じる。そして、大声を上げた。

「だめだー。暑い。暑くて死ぬ。溶けそう」

そう言って、持っていたシャーペンを机の上に乱暴に放り投げた。そのまま机に突っ伏す。額の汗が、流れた。

「暑い暑いって言うなやー。よけい暑くなるっちゅうねん」

関西弁でそう空に話しかけたのは、最近血の繋がった兄弟であると分かった紫藤海^{むらさきとうみ}だ。海は空の机を挟んだ向かい側で、胡坐をかいて座っている。彼の前にも、教科書とノートが広げられていた。

海の顔立ちは空と余り似ていない。下手をすると少女にしか見えない可愛らしい顔の空に比べ、海はどこからどうみても男だ。秀麗な顔立ちといってもいいが、顔立ちよりも、いたずらっ子のような雰囲気^{きふき}が際立っていた。似ているところといえば、髪と目の色が、茶色味^{ちしほ}がかっていることくらいだろうか。

「あー、こんな暑くっちゃ、勉強なんてはかどらへんわー」

そう言いながら、二人の横で首振り運動を続けている扇風機を掴んだ。そのまま扇風機を抱き込んでしまう。首振り運動を阻止された扇風機は、抗議するかのように妙な音をたてた。

「あ、バカ。何やってんだよ。壊れるだろう」

扇風機の抗議の声を聞きつけて顔をあげた空は、慌てて海の頭を叩いて扇風機から引き剥がした。そんな空を上目づかいで見上げて、海は唇を尖らせた。

「だって、暑いねんもん」

「悪かったな。クーラーなくて。おまえがバカなことするから、よけい暑くなっただろ」

「うっわ。人のせいにしたらあかんで空ー。って、そんなことより、暑い。あー無理。マジ無理。もうあかん」

言いながら、海は畳の上に寝転んだ。空も机を避けて、同じように寝転ぶ。畳の上は少し冷たくて、気持ちがいい。

空の家は商店街の真ん中辺りにある。高橋ブック店という名の本屋で、一階のほとんどが店舗になっている。裏庭に面した二階のこの部屋が、空の部屋としてあてがわれていた。窓から、蝉の声と、遠く商店街の喧騒が入ってくる。

その他に入ってくるものといえば、たまに吹く熱気をおびた風だけだ。とてもその風で、涼をとることはできない。

「どうする？ 図書館行く？」

空は天井を見ながら、聞いてみた。図書館は静で、何より空調がきいていて勉強にはもってこいだ。だが、言った本人が乗り気ではないせいか、相手の反応もいまいちだった。

「でも、動くの暑いし」

「だよな」

空は緩慢な動作で、身体の向きを変え、海を見た。

「なあ、あいつと最近連絡取った？」

その言葉に、海が寝転んだまま、顔を空の方へ向けた。

「あいつって、光のことか？」

空は無言で頷いた。光も海と同じで最近血の繋がった兄弟だと判明した人物だ。三人は同じ高校に通っている。

海は腕を使つて半身を起こした。

「連絡取つてへんっていうか。取られへん」

「やっぱり？ ケータイにかけても留守電なんだよ。家にかけても家政婦さんに、出かけてますって言われるし」

空は言いながら、海と同じように半身を起こす。空は、可愛らしく整った顔を思いつきりよく顰めた。

そんな空に、海は苦笑いをして見せる。

「俺もだいたい同じや。あれは、確実に居留守やろ」

「でも、何でそんなことすんのか分かんねーんだよな。俺たちに会いたくないってことか？」

空は言いながら、悲しくなってくる。

高校に入学して、光や海と知り合つてから、色々とあつた。互いが兄弟だということが分かつた事も然り、それ以外にも。心に痛いことがたくさん。たくさんあつた。でも、それを三人で乗り越えてきたのだ。少なくとも、空はそう思っている。

先日。三人の本当の両親の墓参りに行った時。光は自分の内にある思いを空たちにぶつけた。あの時、空は光に近づけたと思った。ずっと、壁を作っていた光に近づけたと。だが、そう思ったのは間違いだつたのだろうか。

「確かめよう」

不意に、海の言葉が耳に入つて、空はいつの間にか俯けていた顔を上げた。自分の思考に没頭してしまっていたようだ。

「こうなつたら、直接会いに行こうや。電話やなくて」

そう言うのが早いが、海は立ち上がる。

「えっ、でも。動くの暑いつて言つたくせに」

「動かんでも暑いやん。ここで、手付かずの宿題を前に暑い暑いつ

て言うてても仕方ないし。それやったら実のあることをせな」

言いながら、海は教科書を鞆にしまうと、さっさと部屋を出て行くこととする。

空は慌てて立ち上がり、足の親指をつかって扇風機の切ボタンを押すと、テーブルに置いた教科書などはそのままに、海を追って部屋を出た。

外はこれでもかというほど日が照りつけ、アスファルトの熱を上げていた。遠く道の先を見れば、空気がゆらゆらと揺れているように見える。陽炎だ。

商店街を抜けて五分ほど歩いた所にある駅についた。空は、駅構内で携帯電話を耳にあて通話をしている海の横に立って、電話が終わるのを待っていた。

「やっぱり、家にはおらんって。今日は病院に行つとるらしい」

海が通話を終えた折りたたみ式の携帯電話を折り、持っていた鞆にしまう。それを目で追ってから、空は口を開いた。

「病院、行ってみる？ 家に押しかけても会ってくれるか分かんねーし」

その言葉に、海は同意を示した。

海が抜かりなく電話にでた家政婦に病院の場所を聞いていたおかげで、さして迷うことなく、病院に着いた。

病院の入り口が見えるところで、立ち止まって、二人は顔を見合わせる。

お互い汗だくだ。

空は、襟元を掴んで前後に動かし服の中に風をおくってみる。し

かし、たいして涼しくはならなかった。

「さて、どうする？」

「とりあえず、中入ろうや。暑うて死にそうや」

海が病院の入り口を指差すので、空は何も言わず頷いた。

ここまで来たは良いが、この後どうするかを考えていなかった。

光がどこの課を受診しているのか分からない。しらみつぶしに探すことも考えたが、行き違いになる可能性も高い。

入り口を見張るのが一番いい方法かもしれないが、いかんせん暑い。とにかく、暑い。日射病にでもなりそうだ。

自動ドアの向こうには涼しい空間が待っている。そう思うと、自然と足の運びも速まる。

「あ、光」

海が突如立ち止まって声を上げた。驚いて、空も立ち止まる。海はまっすぐ先を指差した。

海が指し示す方を目で追うと、空たちが捜そうとしていた人物、はるな春名光がいた。

光は、眼鏡の奥の瞳を見開いた。確実に目が合った。

だが、光は踵を返すと、足を引きずるようにしながら、病院内へ入って行くのだ。

その、どこか慌てたような素振りに、空と海は顔を見合わせる。お互いの顔に、不満の色を見て取った二人は、歪んだ笑みを浮かべた。

「今、明らかに俺たちを避けたよな。あいつ」

「ああ、同感や。空、追うで」

海の声を含図に、二人は暑さも忘れて走り出した。自動ドアが開くのもどかしく、空たちは病院内に入る。院内を見回して、廊下の角を曲がる光の背を見つけた。

二人は再び走り出す。

廊下の角を曲がった光が、トイレに入ろうとした時、空が光の肩を掴んだ。

その瞬間、震えが手に伝わった。きつと、急に肩を掴まれ驚いたのだ。だが、そんなことは構わない。空は肩を掴んだまま、光をトイレへ押し込んだ。

幸いともいいうべきか、トイレには誰もいなかった。個室のドアも全て開いている。

「痛いな、離せよ」

光は、荒々しい口調でそう言って、肩を掴んでいた空の手を払った。

空は払われた手をさすりながら、光を睨みつける。

一週間ぶりに見る光の顔は、一週間前と変わらない。王子様然とした綺麗な顔立ち。その表情は、いつものポーカーフェイスだった。「何でこんなところにいるんだ。おまえら」

光が吐き捨てるようにそう言った。視線は、トイレの床に向いている。

空はそんな光の様子を、目を細めて見ながら、口を開く。

「いちや悪いのかよ。ここは病院だぜ？」

わざと語尾を上げて言ってる。

「そうや、それとも、ここに俺らが来たらまずいことでもあるんか？ 光」

海が追従するようにそう言うが、光は答えなかった。相変わらず、空たちと目を合わせようとしない。

「何で逃げたんだよ」

ずばりと聞いてやると、光がちなりとこちらに目を向けた。

「別に、逃げてないよ」

光の突き放すような言葉に、空は切れた。

「てつめー、嘘ついてんじゃねえよ。明らか、俺らの顔見て逃げたじゃねーかよ」

空は、光のシャツの胸倉を掴んで激しく揺さぶる。

海はそんな空を慌てて後から羽交い絞めにして、光から引き剥がした。

「どうどう、空。ちょっと落ち着こうや」

「どうどうっておまえ。俺は馬じゃねえ」

切れた勢いのまま、空は海に怒鳴った。

「……かしかったんだよ」

光の声が聞こえた気がして、空と海は顔を光に向けた。

「今何て？」

二人の声が重なった。

「だから」

光は言いよどむ。

「だから？」

また、二人の声が重なった。

「だから、恥ずかしかったんだよ」

半ば怒鳴るようにそう言った光の顔が、目に見えるほど赤くなった。光は慌てた様に、二人から顔を背ける。

そんな光に、空と海はしばらく呆然と見入った。

どれ位時間がたっただろう。海が羽交い絞めにしていた空を離しながら口を開く。

「えっと、何が恥ずかしいねん」

「そんな、恥ずかしがることなんてないだろ」

何かあったつけど、空は記憶を辿るが何も思いつかない。光の恥ずかしいことって何だろう。

「あ、もしかしておまえ、俺と空のどっちかに惚れたんか」

大声を上げた海の言葉で、空は力が抜けた。きっとそれはありえない。そう思ったら、案の定、光が否定した。

「何で、そんな発想になるんだ」

ようやく常に近い顔色にもどった光は、観念したように口を開いた。

「泣いただろ。この間」

言いながら、また顔を背ける。うつすらと背けた頬がまた赤くなっている。

「大泣きしたから、おまえらに合わせる顔がなかったんだよ」

言われてやっと理解できた。先日、墓参りに行った時のことを言っているのか。空はそう思っ、海の顔を見た。海も空の顔を見る。そして、二人して噴出した。

「あははは。バツカじゃねーの」

「おま、何それ。俺おまえが照れるとこ初めて見たわ。めっさおもしろいじゃん」

海は笑いを堪えながら、そう言ったあと、また笑い出す。大声で笑いながら、手まで叩いている。

「何だよ。笑いすぎだよ。おまえら」

怒鳴る気力もないのか、光は疲れたようにそうもらす。空と海は、光が本気で怒り出す前に、笑いをひっこめるよう、努力しなければならなかった。

第二章 はじまりはメール

メール着信音が鳴った。

風呂上り、部屋のドアを開けた瞬間だったので、そのタイミングに少し驚いた。

理沙だろうか？ それとも、この間理沙に紹介してもらった男子校の彼だろうか。

そう思っ、由香は勉強机の上に置いていた携帯電話を手取る。そして、新着メールを開いた。

息を飲む。

驚きに声も出なかった。手が、震えた。ありえない。こんなことあるはずがない。

由香の目に映る携帯電話のディスプレイには、くるはずのない相手からのメールが映し出されていた。

『ユカ、元気になっていた？ 私帰ってきたよ』

由香の足元に、携帯電話が落ちて転がった。由香の手から滑り落ちたのだ。

しかし、由香はそれすら気づかないように、ただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

クーラーのきいた涼しい光の部屋で、高橋空は満足気な溜息をついた。

「はー。美味かった」

それはもう、幸せそうな笑顔をつくる空に、隣にいた光が眼鏡の奥から呆れた目を向けた。

「おまえら、コレが目的で家に來てるだろう」

光は空の前から、つい先ほどまでケーキがのっていた皿を取ってお盆に乗せる。

「つて、俺まで入れんといてや。ケーキが目的なんは空だけやで。俺は純粹にやな、光に数学教えてもらおうと思つて、お前の家に來てるんや」

海が抗議の声を上げた。そう言つた彼の前にも数学の教科書ではなく、少しケーキの残つた皿が置いてある。

「おい、海。俺だつて、ちゃんと勉強しようと思つて來てるぜ。ただ、光の家に來るとクーラーきいてるし、必ずケーキくれるから楽しみだけだ」

嘘のつけない空であつた。

光は呆れたように溜息をつく、からになつた海の皿を盆にのせて、立ち上がった。

「じゃあ、僕が歸つてくるまでに、三問終わらせとけよ」

そう言つて、光はドアを開けて部屋を出て行く。その背に、空と海のブーイングの聲がかつたが、光は無反応を決め込んでいた。

「ちえっ何だよ。先生みたいなこと言いやがつて」

「ま、宿題さつさと終わらせて、後半遊びまкруう計画のためや。それもしかあないんちゃう」

「うー」

空が唸つたとき、大きなメロディーが部屋に響いた。

それが携帯電話の着信音だと気づいたのは、その携帯電話の持ち主だつた。

「はいはい。誰やー」

気の抜けるような声で電話に出た海は、相手の言葉に目を見張つた。

空は、そちらが氣になつて問題集から、海に目を移した。海はそんな空の様子を氣にした風もなく、会話を続ける。

「えつ。風見？ ひっさしぶりやん。どないしたん？ うん。うん。

分かった。じゃあ、明後日な」

通話を切った海にすかさず空が話し掛ける。

「なあ、なあ。誰？ 女？」

空の表情は興味津々といった感じである。海はそんな空に意味深な笑みを見せた。

「当たり前。女や」

空は海の答えに驚いた顔を向ける。

「な、な、な。か、か、彼女か！」

かなりどもりながらの空の問いに、海は笑顔を持続させながらしばらく黙り込んだ。

空が焦れてきたところで、ようやく口を開く。

「違う。去年のクラスメートや。中学んときのダチ」

その答えに、空はあからさまに安堵の息をついた。

「やつぱりなー。そうだと思った。おまえに俺より早く彼女ができるわけないしな。海はお友達タイプだもんな」

嬉しそうに言う空に、海は恨めしげな目を向ける。

「おまえ、それなんや酷ないか？」

空は、少し言いすぎたかと、失言を笑顔でごまかした。

「で、問題は解けたのか？」

空の背後にあるドアの方から、声が聞こえて、空は慌てて振り返った。

「あははー」

空はペンを持ったままの手を、頭の後にやり、笑ってごまかした。

光の眼鏡の奥の瞳が、冷たくひかったように空には見えた。

空と海は慌てたように、光の冷たい視線を避け、問題集に目を落とす。

そんな二人の耳に光の溜息が聞こえた。

「今更、やっているふりしても遅いだろ……」

疲れたような声だった。

あらかた問題集を片付けた空たちは、この家のお手伝いさんが一服するためにと入れてくれたアイステイーを飲んでいた。そんなとき、空が思いついたように口を開いた。

「そっぴやさ、さっきの電話なんだったの？」

空の問いに、光は眉を軽く上げる。何のことだと思ったのだろう。空は、さっき海の携帯電話に電話があったことを伝えた。

「ああ、あれや。クラス会の会場が急に変わったからそのお知らせや。明後日にあんねん」

海の言葉に、空は目を見張る。

「えっ。大阪帰るの？」

「えっ、何で大阪やねん」

空の大声に合わせたのか、海の声も大きかった。

「だって、中学まで大阪に住んでたんだろ」

空が言うと、海は手を横に振った。

「ちやうちやう。俺、関西言つても住んでたん大阪とちやうし、中三にこつち引っ越してきたから、今回のクラス会はこつちであんねん。ほんま、関東の人間は、関西っていうと大阪やって思うんやからな」

少々機嫌を損ねたような声を出す海に、冷静な声音で光が話しかける。

「中三のときのクラス会か」

「そっぴやねん。中三のときのクラスは皆仲よかったからな。久しぶりに全員集合やって盛り上がったみたいや」

海は嬉しそうに言った。空は羨ましそうな顔を海に向ける。

「いいなー。俺んところなんて、そんな話全くないぜ。明後日は家の手伝いだし」

「家の手伝いつて何するんだ？」

光が少し興味を惹かれたように空を見た。空は片手の拳を口の前

に当て、少し考えるようにしてから、口を開く。

「うーん、色々。レジとか、品出しとか、あと伝票の計算とか」

「伝票の計算までするんや」

驚いた声を上げた海に、空は頷いた。

「そ。まあ、簡単なことしかしてないけど。そのうち俺が継ぐから、今からちよこちよこ仕事覚えてるんだ」

そう言くと、なぜか海と光が驚いた顔をして、顔を見合わせた。

「へー。空、ちゃんと将来のこと考えてたんだな」

「予想に反して真面目やな。そんなん考えてるって思ってもみいひんかったわ」

感心する二人に、空は眉を顰めて見せた。

「おまえら、俺のことちよつとバカにしてないか？ いや、してるだろ」

聞いておいて断定した空に、海は言う。

「バカにはしてへんよ。なあ光」

「いや、バカだとは思ってるけど……」

光はさらっとそんなことを言っつて、少しずれてきた眼鏡を人差し指で押し上げた。

「ムキーっ。ム力つく」

空が光に向かって大声を上げた。

その大声に光が眉を寄せる。

「うるさい、そういう振る舞いがバカなんだ」

「うるさいのはそっちだ。バカって言う方がバカなんだぞ」

「おまえは小学生か」

「う、うるさい」

海は空と光の口喧嘩を聞きながら、こっそりと溜息をついた。

会った時から、喧嘩をしていたこの二人は、仲良くなった今もこうしてよく口喧嘩をしている。まったく、こりへん奴らやな。そう思っつてまた溜息をついた。

もう少ししたら、仲裁に入ろう。そんなことを思いつつ、海は残

り少なくなったアイスティーを口に含んだ。

第三章 相談

坂崎第二中学校三年二組のクラス会は、幹事の親が経営しているというカラオケボックスで行われた。

飲み放題のドリンクに安価な食べ物が入るとあって、カラオケボックスは中々に手ごろだったらしいと、海の隣に座った柏木が言った。

柏木は、引越してきた海に始めて話し掛けてくれた人物であり、今でも親交のある友人だ。昨年まで陸上部の部長だった柏木は、日に焼けた笑顔が可愛いと、実に女子生徒によくモテていた。

海は前のテーブルに置かれたフライドポテトを取って、口に運びながら思う。

俺の周りは、なんでこう女子にモテるやつばかりなんやろう、と。

「おい。紫藤。何ぼつとしてんだよ」

思い切り背中を叩かれ、海は我に返った。叩かれた背中がかなり痛い。

痛がる海を気にせず、柏木は白い歯を見せて笑っている。

「聞いてたか？ 俺の質問」

喧騒の中、そう問いかけてきたのは、海の正面に座る人物だった。こちらも友人、浅川だ。浅川は、黒ぶち眼鏡の奥の瞳を細めた。

「やっぱり、聞いてないだろ」

「聞いてなかったな」

そう断定したのは、隣の席に座る柏木だ。

「えっと、ごめん。なんの話やったっけ？」

素直に謝ると、浅川はしょうがねえなーと言いながら、もう一度さっき言ったであろう問いを口にした。

「三浦と風見が付き合ってるって、知ってたかって聞いたんだよ」

「えっ、それは知らなかったわ」

驚いて声を上げたが、マイクを通しての歌声と、周りのお喋りの声にまぎれた。

海はこっそりと風見を見た。一昨日、海にクラス会の場所変更を電話してくれた人物だ。よく見れば、その隣には三浦が座っている。三浦は幹事の一人で、このカラオケボックスを経営しているのは、彼の親だった。

三浦とは余り話したことがない。だからといって嫌いな訳でもなかった。たんに三浦が無口だったただけだ。

一方、風見とは席が近いこともあり、よく話をしていた。彼女はお喋りで、明るい性格だったので、海も気兼ねなく話せた。

「俺、てつきり風見は紫藤とくつつくと思ってたのになー」

妙に残念そうな声が、浅川の口から漏れた。海はそれを聞きとがめる。

「え？ 何でやねん。俺と風見はそんな雰囲気全くなかったやん」

海の言葉を聞き、浅川と柏木はそろって首を横に振った。

「いやいや。アレはもう付き合っているとしか思えなかったよ」

「そうそう。授業中もデカイ声で喋りすぎて怒られてたじゃないか。おまえら」

二人に言われて、そういえばそんなこともあったなと思いだす。その時、噂の風見が立ち上がって、こちらに近寄ってきた。柏木の前を窮屈そうに通り過ぎると、海の横に立つ。柏木が気を利かせてか、少し横にずれた。

風見を見上げ、相変わらず気の強そうな顔立ちだと思う。風見の顔立ちは美人と言って差し障りはないが、海の好みではなかった。

「よっ。紫藤。久しぶりー」

片手を挙げて笑顔をつくる風见到、海も笑顔を返す。

「おっす。久しぶりやな。彼氏はいいんか？」

そう言って、風見越しに三浦を見るが、三浦はこちらを気にした風もなく、隣にいる男子と笑顔で会話している。

「大丈夫よ。英志はそんなことで怒らないもん。っていうか、うち

らが付き合ってるって誰に聞いたのよ」

海は浅川と柏木を見た。風見はその視線を追って、納得したように頷いた。

「なるほどねー。噂になってるの？ あたしたち」

風見は、柏木と浅川に聞いた。二人は無言で頷く。それを見て、海は一つ思い出した事があった。

「あ、そうか。おまえら同じ学校に入学したんやったっけ」

「え？ 今更？」

「紫藤、それはないんじゃない」

浅川と風見が非難の声を上げる。海は苦笑するしかなかった。

そんな海の腕を風見が掴んだ。何かと思ったら、腕を上につける。

「な、なんやねん」

「ちよつと、廊下行こうよ」

「え？ なんで……」

戸惑いながら、見上げた風見の顔が妙に真剣だったので、海は問いを途中で止めて頷いた。

そのまま、自分で立ち上がり、風見の背を追って廊下に出る。

ドアが完全に閉まると、室内の喧騒が小さくなった。

ドアに背をつけて立つと、微かに音程の外れた歌声が聞えてくる。どうやら、浅川に歌の番が回ってきたらしい。そう思っていると、風見の声が耳に届いた。

「紫藤にさ、相談があるんだ」

相談という言葉に驚いて、ドア越しに室内を覗いていた目を風見に向けた。

「え？ 何で俺やねん。おまえの彼氏に相談したらええやん。それとも、彼氏には相談できへん内容か？」

風見は無言で頷いた。

海は眉を寄せた。確かに風見とは仲が良かったし、今でもメールのやり取りくらいはある。あるが、毎日のように顔を合わせていた

去年でも、風見から相談事なんて受けた事はなかった気がする。滅多に顔をあわせることがない今だからこそ、相談しやすいということなのだろうか。

「紫藤さ、一回だけブチ切れしたことあったじゃない」

唐突にそう言われて、海はすぐに思い当たった。決まり悪そうな表情を作った海に、風見がなおも言う。

「覚えてるでしょ？ 誰かがさ、自殺した子のこと悪く言った時、すんごくキレて教室飛び出したじゃない。あれ、びっくりしたんだよね。紫藤なんて会った事もなかったじゃん。桜田さんに」

風見の言う桜田さんは自殺した少女の苗字だ。海がこちらに転校してくる一年前、中学二年生のときに自殺したのだという。その少女のことが話題に上ったとき、誰かが言った『死んでよかったんじゃないの？』この一言が気に触って、怒鳴った上に教室を飛び出した。思い出しただけでも腹立たしい半面、あそこまで切れなくてもよかったのではないかという苦い思いもある。

「会った事なかったって、言うていいことと悪いことがあるやろ。で、それと、相談と何の関係があるねん」

声に棘があつたのだろか。風見が細く整えている眉を寄せた。眉間に大きな皺が寄る。

「怒る事ないじゃん。関係があるから言ってたし。あたし、あの時、紫藤のこと、ふだんおちゃらけてるけどカッコいいところあるじゃんって、思ってたんだから」

「……そりゃ、どうも。で、相談って何やねん。そろそろ戻らんと、おまえの彼氏にいらん心配さすんちゃう？」

一応気を使って言った海に、風見は頷いて見せた。

「君島由香。覚えてる？ あたしと同じ部活で、隣のクラスにいた子」

「あー。風見と違って可愛い感じの子」

正直に思ったことを口にしたら、大きな音がするほど腕を強く叩かれた。叩かれた腕を押さえて文句を言おうと風見を見たが、そ

の風見の顔を見た瞬間、海は口を閉ざした。

「ちよつと。あたしと違ってどうという意味よ」

怒っている。そんなつもりは全くなかったが、どうやら彼女の怒りの琴線にふれたらしい。

海は慌ててごまかすような笑みを見せる。

「いや、あれやん。風見は美人タイプやろ？ 君島さんは可愛い系やん。そう言う意味であってやな。おまえが可愛ないとかそういうこととちやうで？」

半眼で海を睨んでいた風見は、溜息をついた。海はごまかす笑みを持続させながら、風見が口を開くのを待つ。

「ふう。ま、そういうことなら許してやるか」

内心ほつとした海は、にこにこ頷いてから、話を元の方へ修正する為に口を開いた。

「で、その君島さんがどうかしたんか？」

聞くと、先ほどまで怒りの表情をしていた風見の顔が暗くしぼんだようになる。

「メールがね、来るのよ」

「メール？ 誰から？ 迷惑メール的な感じか」

海の問いに風見は首を横に振った。その時海は、風見がピアスをつけていることに気づいた。中学の時にはピアスの穴なんて開けていなかった。そんなことで、時の流れを感じる。

「違うの、桜田さんからメールがくるのよ。由香は中二のとき、桜田さんをいじめてたグループに入ってたから」

ここで、自殺した少女の名が出るとは思わなかった。それに、君島がイジメグループに入っていたということも驚きだった。大人しそうな子だったのに。海は内心の驚きを隠すように、声をだした。

「ふーん。でも、そんなんおかしいやん。桜田さんって亡くなった子やろ？ 誰かのイタズラちゃうん」

「でも、確かに桜田さんなんだって。桜田さんと由香たちしか知らないような内容がメールで来るんだって」

「ちょお、待つて。君島さん以外にもメールきてるんか？」

風見は頷いた。

「うん。今度、由香に会ってやってよ。詳しい話聞いたげてほしいの。こんなの誰にでも相談できないじゃん。あたし、紫藤が口硬いの知ってるし。桜田さんのこと、固定観念なしに見れそうだし。それに、同じ学校じゃない方がいいでしょ。また、妙な噂がたつたらいやだし」

「妙な噂？」

「桜田さんが自殺したのは、由香たちのグループのせいだって」

「イジメのせいじゃないんや。自殺したの」

「それも、原因の一つだとは思うけど。謎なんだよね。桜田さんがなぜ自殺したのかは。色々家でもあったみたいだし。親が離婚したりとか、色々」

「ふーん。ま、会うだけやったら会ってもいいけど。でも俺、たぶん何もできへんで」

「いいよ。それでも。あたしもアンタに何かできるなんて思ってたないし。ただ、誰かに言うだけでもマシにはなるかなって思ったんだ。由香、かなりまいってるから」

海は溜息をつきたい気分になった。また自殺絡みの話か。そう思うと心が重くなる気がする。会ってもいいなんて、安請け合いしない方がよかったのではないか。そう思ったが、海はその想いを口にしないまま、風見とともにカラオケで盛り上がる室内に戻ったのだ。

第四章 ケンカするほどの仲？

『今日は楽しかったね。ムッコとアンナが買ったストラップ可愛かったな……』

ムッコとアンナが買ったストラップ。三年前、確かにムッコとアンナは、学校帰りに寄り道したファンシーショップでお花柄の可愛いストラップを買っていた。

今更なんで？

携帯電話を握る手が震える。数日前から、毎日くるメール。今日もまだ、由香たちが桜田絵里に対してイジメまがいのことをする前の内容だ。それに安堵する自分を、由香は恥じた。

自分達が出したことを、後悔した。後悔して、苦しんだ。それも、やっと忘れかけてきたのに。

「どうして、今頃こんなメールがくるのよ」

由香の口から掠れるような声が漏れた。

「エリはまだ、私達を許してないの？」

由香の問いに答える声は、やはりない。

代わりに着信を告げるメロディーが流れる。

由香は、震える手で、メールを開いた。

『ねえ、ユカ。私たち、友達だよね……』

今日もよく晴れていた。青く広がる空に白い雲が浮かんでいる。遠くには、入道雲が見える。あの下はきっと大雨だな。ふと、そんなことを思った。

高橋空は、窓の外から手元に視線を戻す。大きく口を開けて、照り焼きバーガーを口いっぱい頬張った。照り焼きのたれの味が、

空は好きだ。

午前中いっぱい使って、図書館で勉学に勤しんだ。もともとない頭を使って勉強するのはひどく腹がへるというもの。きつと頭にエネルギーをとられすぎるのだ。

空は、一緒に夏休みの宿題を片付けた学友であり、血の繋がった兄弟でもある紫藤海と春名光とともに、駅前のファーストフード店にいた。左隣に海。正面に光が座っている。

空は、目の前の光がチキンバーガーを少し口にしたのを機に、話しかけた。

「あ、ねえねえ。どう。美味しいだろ？」

「ああ」

光は言葉少なに頷いた。二口、三口と食べているところを見ると、不味いと思っているわけではなさそうだ。空は満足して、隣に座る海と目で頷きあった。

驚きだが、光はこのようなファーストフード店に入ったことがなかったそう。友達と学校帰りとか寄り道しなかったの？ そう聞いた空に返ってきた答えは『今までは学校が終われば練習に向かっていたから、友達と遊ぶ暇などなかった』だった。光は去年事故に遭うまで、フィギアスケートの選手だったのである。

それを聞いた空と海は、妙な使命感に燃えた。俺たちが光に一般的な高校生の生活を教えねばと。空と海は半ば強引にこの店に光を連れて入り、今にいたるというわけだ。

テーブルに乗せたトレイの上が、ほぼ紙くずだらけになった頃。空が満腹の意を込めて、大きく息を吐き出した。その横で、海が口を開いた。

「あのさ、ちょっと話があんねんけど」

彼にしては珍しく、言い難そうな響があった。

そこに疑問を抱きつつ、空は先を促した。

「何？ 聞くよ」

海は頷いた。話し出す前に喉を潤そうと思ったのだろうか、ストローを口にくわえた。ほぼジュースはなくなっていたのだろう。吸った先から大きな音が鳴る。海はそれに少し眉を顰め、ストローを口から離すと、一拍の間を置いて話し始めた。

「あのさ。死人からメールが来ることってあると思う？」

その問いに空は光を見た。光は相変わらずの無表情で、ただ海を見詰めている。光が何も言わないと見て取った空は、海に向き直った。

「何それ。怖い話？ 俺、そう言うの結構好きだよ」

空の言葉に、海は首を横に振る。

「ちやうねん。昨日、クラス会行った時にな、相談のってくれへんかって言われて、そんな時に、死人からメールが来るって怯えてる女の子がおるんやって言われたんや」

「何それ、マジで言ってるの」

「誰かの悪戯だろう」

空の声に被せるように言われた光の言葉に、海は頷く。

「そう、俺もそう言ったんやけど、マジで本人からやって言うねん。本人と自分達しか知らんような内容がメールでくるんやって」

「うわー。怖いなそれ。やな感じ」

空は言いながら二の腕を摩る。鳥肌を立てたのだ。海は珍しく煮え切らない顔をして、頭を掻いた。

「うーん。でな、俺にその女の子に会って、話聞いてくれ言うねん」
「それで、会って言ったんだな、海は」

断定的ともとれる口調で光が言った。光のトレーの上には、チキンバーガーの包み紙が綺麗に折りたたまれて置いてある。

「まあ、そうやねん。で、なんて言うてあげたら良いと思う？」

海の問いかけに、空は唸った。口元に拳を当てて考えるが、コレといった妙案は浮かばない。

「わっかんねーよ。そもそも、本当に死人からメールが来てるなら、

俺たちにどうしようもねーし。霊媒師とかそっちに相談したら？
とか言ってみたら？」

「死人がメールなんて打てるわけじゃないか。死人は死人だろ」
相変わらず冷たい物言いだ。空は、そう思ってた光を見る。海もそう
思ってたのだろう。珍しく棘のある口調でこう言った。

「じゃあ、おまえはどうすればいいと思うんや？」

光はその問いに、あからさまな溜息をついてみせた。

「どうもしなくて良いと思うけど」

「でも、気持ち悪いって思ってるんやで、その子。可哀相やん」

「じゃあ、メールが来ないように着信拒否でもすればいい話だろう。
メールアドレスを変えるって手もある」

光は、なぜそんなことにも気づかないんだといった口ぶりだ。

携帯電話を持っていない空は、着信拒否とかできるんだと感心し
ていた。その横で、海が煮え切らない表情のまま口を開いた。

「まあ、そうやけど。それって、なんかちゃんとした解決策ではな
いっていうか、なんか、後味悪いっていうか……こう、すっきり解
決してやりたいっていうか」

海がそこまで言った時だった。光が口を挟んだ。

「そもそも、どうして海がその子のことで悩まなきゃならないんだ
？ 海には関係ないじゃないか」

「そ、そうやけど。でも、相談受ける手前、やっぱ親身に考えたら
なあかんと思うし」

じつと、光は海を見ていた。相変わらずの無表情の奥で、光が何
を考えているかは分からない。きつと、光の脳はめまぐるしく動い
ているのだろう。と、空は思う。

「そうやって、人の荷物まで背負う必要はないと思うけど。メール
を送ってくる相手が、どんな奴かは解らないけど。死んだ人間の名
を騙るような奴だ。彼女に良い感情は持ち合わせていない。今は、
ただメールがくるだけで済んでいるけど、それ以上の何かがあった
らどうする？」

「それ以上の何かって？」

空は、つい口を挟んでしまった。光の冷たい瞳が空を見た。

「飛躍しすぎかもしれないけど、例えば暴力に訴えるとか。そんなことになった時、おまえは責任とれるのか？ おまえの言ったことで、取り返しのつかないことになったら？ 責任取れないんだったら相談なんてのるのやめた方が身のためだよ」

光は言葉の途中で、海に視線を合わせて言い切った。その間、やはり表情は変わらない。無表情なせいで、より一層言葉に冷たさが加わっている。

光が言い終わるまで黙って聞いていた海は、不意に光を睨んだ。空は驚く。海がこういう顔をするのは珍しい。彼は笑顔でいることが多いからだ。

「光、おまえはなんでそうなんや」

光は黙って海を見返した。空は、場の空気がおかしくなっていることに気づく。何だ、この不穏な空気。空は光が胸の前で腕を組んだのを見た。

「そうとは？」

「おまえ、冷たいねん。前から思ってたけど、他人に対して冷めすぎや。もうちょっと、他人に優しくてもいいんとちゃうか」

光は眉間にしわを寄せた。ずれてもいない眼鏡を人さし指で上げるしぐさをする。

「優しくとか……他人なんてどうでもいい。僕はお前が……」

「どうでもいいってなんやねんっ」

辺りに大きな音が響いた。海が机を思い切り叩いたのだ。一瞬、周りの喧噪が途切れた。

空は、机に手について光を睨んでいる海の腕を、そっと引っ張った。

「ちょ、ちよつと。落ちつけよ」

「空は黙ってる。人がせつかく忠告してやってんのに。なんやねん。光、お前はそんなんやから友達もできへんねん。自分の殻に閉じこ

もって、何でもかんでも理詰めで考えるから、あんな馬鹿なことまでしでかすんや」

海がそこまで言ったとき、光はふと視線を逸らした。空はそれが気になって、その視線をそつと追う。そこには空たちと同じ年くらいの女の子がいた。こちらをじつと見つめている。女の子だけではなかった。店内にいる人のほとんどがこちらを注目している。

「か、海ってば。みんな見てる」

もう一度、空は海の腕を引っ張って注意をひいた。

海は空を一瞥したあと、立ち上がる。

「帰る、付き合ってられへんわ」

そう言っただけで海は足早に店内を後にした。

それを呆然と見送ってしまった空は、我に返って慌てる。

「あ、ど、どうしよう」

空は光を窺い見る。光は無表情を崩していなかった。海の言葉など、なんとも思っていないというように。

「追っかければ？」

いつもと同じ、淡々とした口調。

「で、でも」

迷う空に、光はまた言った。

「大丈夫だから、行けよ」

「分かった。十分で戻らなかつたら、先帰っていいから。んじゃ、行ってくる」

空は、床に置いていたかばんを掴んで店を出た。

外に出ると、一気に暑い空気に包まれた。蝉の鳴く声が、車道を走る車の音とともに、辺りに響いている。

暑い日差しを浴びながら、駅の方へ向かうと、すぐに海を見つけることができた。行き交う人を避けて走り、海に近づく。

「海、海ってば」

空は海の肩を掴んで振り向かせた。海の表情にはまだ、怒りの色が浮かんでいる。

「なんやねん」

「なんやねんって、あの、追っかけてきた」

「それは、見たら分かるわ」

そう返されて、そりゃそうかと空も思う。

「だって、お前いきなりキレるから、びっくりしてさ。お前らしくないし」

「俺らしいない？ …… まあ、確かにそうかもな」

海は溜息をついた。

空は、内心首をかしげなくなった。思ったよりも怒っていないのだろうか。てつきり、言い返してくると予想していたのだが。

海はゆっくりとした歩調で、ガードレールのそばへ行き、そこに腰をおろした。空もそれに倣うように、隣に腰掛ける。道行く人がちらちらとこちらを見ているが、気にしないことにした。

「俺、あかんねん。カーツとなったらつい、ガーって言ってまうねん」

海は舗装された歩道を見つめ、そう言った。空はそんな海に視線を向ける。

「そうなの？ そんなイメージないけどな。どっちかつつと、俺のがそういうイメージじゃね？」

空の言葉に、海は肩をすくめた。

「確かに、お前は沸点低いやんな。その分冷めるのも速いし」

「まあね。それが俺の利点だから」

そう言つと、海はもう一度たまったものを吐き出すように溜息をついた。

「それをいうなら利点やなくて、長所やろ」

「そんなのどっちでもいいだろう。で、どうすんだよ」

「何を」

「何をつて、これから。光まだいると思うけど、迎えに行く？ それとも帰る？」

問うと、難しい表情で答えた。

「俺は謝らへんで」

海は立ち上がった。険しい表情をしたままではあったが、足をファーストフード店の方へと向ける。

空は、それに笑みをこぼす。

「うん、いいんじゃないの。お前の言うことも一理あると思うし。ただ、ちよつと言い過ぎ」

「んー。そうやるか」

「そうだよ。だって、馬鹿なことしかすって、あれって光が自殺しようとしたこと言ってたんだろ」

空は海の隣を歩きながら彼の顔を窺う。海の表情から、怒りは見えなかった。

「確かに、あいつは冷血漢で、人のこと見下したような態度をとるし、カチンとくること多いけど、結構繊細なんだぞ。思い出させるようなこと言うなよ」

海は口に手をやった。空の、光を庇うように容赦のない言葉に、口元が緩みそうになったのだ。

「おまえ今のセリフ、俺より酷いで？ 分かてるんか？」

「え？ そんなことないよ。俺はいつも本人に言ってるもん。お前はそれを止める役だろ。俺の専売特許とるなよな」

にっと笑って言ってるやると、ようやく海の顔に笑みが戻ってきた。まだ、少しぎこちないが。

だが、その顔が不意に歪んだ。信号を渡れば、目の前がファーストフード店というこの位置で、海は苦虫をかみつぶしたような表情をつくる。

「海？」

「あいつ……」

その眩きには怒りがこもっていた。

「え？ あれ？」

さほど距離のない横断歩道の先、ファーストフード店の店内で、光が同年代の少女に笑いかけている姿が、空の目にも映った。

「光、笑ってる」

眩きが口から洩れた。学校でも、空たちの前でもめったに笑顔など見せないのに。

そつと、海の様子を窺った。

「あいつ、全然気にしてへん」

「あの……、海」

「何女の子はべらして、へらへらしてんねん。俺のことはどうでもいいっちゅうんか！」

「あのー。海さん？」

「帰る」

海はそれだけ言うと、来た道を引き返した。

空は、遠ざかる海の背中と、店内の光を見比べた。

「もー。馬鹿っ」

誰にともなく、唸るようにそう言って、空は海の後を追った。

第五章 違う目線

時は少し遡る。

空が店を飛び出した海を追った後。

光は深く溜息をついた。

どうやらまた、自分は失敗したようだ。そう思うと情けなくなる。光はただ、他人よりも海のことがか心配だったただけだ。

まだ、自分は人に思いを伝えることに慣れていないらしい。ずっと、感情を表に出すことをしてこなかったから。

そんなことを考えていると、不意に光は近くに人の気配を感じた。光の座る席の傍らに、誰かが立ったようだ。

そちらを見上げると、光と同じ年くらいの少女がいた。派手さはなく、クラスでも目立たないタイプとでもいおうか。黒髪を両サイドで三つ編みにして、肩に垂らしている。

彼女はおずおずといった体で、光に話しかけた。

「あの……。もしよければ、私と少しお話しませんか？」

小さな声だったが、聞き取れた。光は少し、意地悪をしたい気分になる。海と喧嘩したことが、尾を引いているのかもしれない。

「何？ ナンパ？」

少女は赤面し、目を大きく見開いた。そこまでは光の予想範囲内だったが、その後が違った。

「はい、ナンパです。逆ナンです！」

胸の前でこぶしをぐっと握り、少女は店内に響くような大声でそう宣言したのだ。

光は、呆氣にとられた顔を少女に向ける。

「あの、ダ、ダメでしょうか」

不安そうにこちらを見る彼女に、光は自分でも信じられないほど自然に笑みを浮かべて見せた。だがそれは、ある種営業スマイルに似たものだった。フィギアスケートをやっていた頃、周りの人に向

けていたような作り物の笑顔。

「いいよ。でも……」

「で、でも？」

なぜか呆けたような調子で少女が問う。

「どこか他の店に行こう。喫茶店とか」

光はそう提案する。少女はきよとした。ここでいいのに思っていることは明らかだ。光は、笑顔を持続させたまま指摘した。

「君が、動物園の檻の中にいる気分を味わいたいなら、このままここで話してもいいけど」

そう言つと、少女は気づいたように辺りを見回す。そして、あちらこちらから向けられる好奇の視線に耐えかねたように下を向いた。「ほ、他の場所がいいです」

少女の呟くような声に合わせて、光は立ち上がり笑顔を向けた。

「じゃあ、行こうか」

それを合図に、二人はそろって店を出た。たくさんの目に見送られながら。

二人はファーストフード店からほど近い喫茶店に入ることにした。店内は昼のピーク時を過ぎたせいか、客はまばらだ。さほど広くはないが、落ち着いた雰囲気醸し出している。光はカウンター席を避け、店内一番奥の四人掛けの席を選んだ。

少女は素直に後についてくる。

目の細い喫茶店のマスターに、アイスコーヒーとアイ스티ーを頼む。

二人は、マスターが頼んだ品々を持って来ても、沈黙を保ったままだった。

光は少女が話し出すのを待っていたが、待っていても一向に話し出す気配がないことを悟り、自分から口を開くことにした。

「で、君は僕と何の話がしたかったのかな」

光の問いかけに、アイスコーヒーにシロップとクリームを入れて混ぜていた少女は、顔を上げた。

「あの……」

そこから話が続かない。光は溜息をつきたいのを我慢した。

「本当はナンパじゃないよね。ただ、僕から話を聞き出したかった。違う？」

重ねた問いに、少女は意を決したように、アイスコーヒーから光に視線を移した。光の瞳をしっかりと見つめる。

「どうして、分かったの？」

「そりゃ、普通ナンパするときはあんなにはつきり、はいナンパです。なんて言わないものだよ」

「うっ」

思い出したのか、少女は痛いところを突かれたような顔をした。少し頬が赤くなっている。

「それに君、僕たちが騒ぎ出す前。僕の連れが死人からのメールの話を始めてからずっと、こっちを気にしてただろう。君は僕たちの話が聞こえる程度には近いカウンター席にいたから、すぐに分かった」

「気づいてたんだ」

驚いたように、少女はそう言った。それが肯定の言葉になった。

「実は、そのメール。私のところにも来てるの。あ、あなたのお友達に相談したのは私じゃないけど」

少女はそう言って、またストローでアイスコーヒーをかき回した。氷が音をたてる。

「そう。でも、僕はメールが来るとしか聞いてないよ。それ以外は何も分からない。君に何か言ってあげることでもないな」

相変わらず冷たく聞こえる声音だったが、少女は怯まなかった。

「ねえ、一緒に犯人を探してくれないかしら」

「え？」

「私一人じゃ不安だし。こんな話、誰にも話せないし。でも、あなたは知ってるし、だから、一緒に犯人捜してくれない？」

少女の言っていることは、筋が通っているとは思えなかった。普段なら即断っている。だが、光は断る言葉を飲み込んだ。

どうせ、海は何を言っても、この話に首を突っ込むだろう。そして、人のいい海のことだ。絶対に巻き込まれるに決まっている。それならば、先にこちらで動いてしまった方が、海の危険を少しでも回避させることができるのではないか。そんなにたいした危機があるとは思えないが、少なくともそれを確認することはできるだろう。そんな思いが光の頭を過った。

「分かった。でも、一つ条件がある」

少女は緊張した面持ちで頷いた。

「う、うん。何？ 条件って」

光はまた笑顔を浮かべた。海と喧嘩してからこっち、表情がゆるんでしまったようだ。

「君の名前を教えて」

そう言つと、初めて少女は笑顔を見せた。

「あ、本当。まだ私たち名乗りもしてなかったのね。私は静。伊藤いと静ずか。あなたは？」

「春名光」

光が名乗ると、少女は光に向かって手を差し出した。少しの驚きと躊躇いを持って、光は静を見返した。

彼女は言った。

「握手しましょ。よろしくね。春名君」

光はゆっくりと手を差し出した。

喫茶店で静と別れてから、光は時間を確かめようと携帯電話を見て、着信があったことに気付いた。空の自宅からだ。空はいまどき

珍しく、携帯電話を持っていない。

光は逡巡のあと、リダイヤルを押した。

『ありがとうございます。高橋ブック店でございます』

電話の相手がそう告げた。女性の声だ。光は店の方にかかってしまったのかと驚いたが、驚きは表に出ることはなかった。

「春名と申しますが、空君はいらっしゃいますか」

光が尋ねると、電話の向こうの女性の声が先ほどよりも低くなった。どうやら先ほどの声は営業用だったらしい。

『ああ、光くんね。空からはよくお話を聞いてますよ。この間のテスト学年で一番だったんですってねー。すごいわー。空に爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいわ』

「いえ、別にすごくは……」

『あらやだ、謙遜しちゃってー。また空に勉強教えてやってくださいね。あ、そうだ、今度うちにご飯食べにいらっしゃいよー。この間も海君がねー……』

口を挟む隙がない。

光がどうしたものかと思いながら、大人しく相手の女性の話を聞いていると、電話の向こうから空の母を呼ぶ声が聞こえた。

『あ、ちよつと待ってね。空が来たから。空ー。光くんから電話よ』

電話の向こうで、なんで母さんが長々しゃべってんだよ。とか、だつて一度話してみたかったのよ。などという会話が聞こえ、その後、空が出た。

『あ、ワリ。母さん話好きなもんだからさあ』

「おまえ、電話って店と共用なのか？」

尋ねると肯定が返ってきた。

『うん。まあね。そんなことよりさ。どうなってんだよ。海カンカんに怒ってるぜ』

「僕は間違ったことを言ってるつもりはないけど」

『じゃなくて、女だよ、お、ん、な。女の子と一緒にいただろっ』『見てたのか』

空の言葉に少なからず驚いた光は、無意識に口走っていた。

『見てたんだよ。海のやつ、光が海と喧嘩したこと全然気にしてないって言って怒ってさ。帰り道口きいてくれなかったんだぜ？あの海がだぜ？ここはひとつ、光、お前が謝つとけよ』

光は見えないと分かっているながら首を横に振った。遅れて言葉が漏れる。

「それは無理だ」

『なんでさー。一言謝ればすむことじゃん』

「海が何に対して怒ってるのかが分からない」

『はあ？』

「そう言うことだから」

光はそれだけ言い残して電話を切った。空が何かを言おうとしていたが構わない。

そもそも海は何を怒っているのだろうか。

最初は光が優しくないと行って怒っていた。

だが、空の話では女の子と一緒にいたのが気に食わないから怒っているという。

女の子と一緒にいてなぜ腹を立てられなければならないのだろう。

光は無意識に首をひねり、ケータイ電話を尻ポケットに突っ込むと、駅へ向かって歩き出した。

第六章 本格始動？

『ねえ、ユカ。私たち、友達だよね』

頷くと、嬉しそうに笑うエリ。

今でもあの時の笑顔が頭に浮かぶ。

そのたびに、ごめんなさいと心の中で許しを請う。

『あの日。仲直りの記念に、お揃いのアクセ買いに行く約束したよね？』

ごめんなさい。

もう、許して。

『ねえユカ。あの日、どうして私は死んだの？』

手にした携帯電話のディスプレイに浮かぶ文字。

『ねえ、ユカ。私たち友達だよね……』

ストローに口をつけて吸うと、大きな音が鳴った。いつの間にかすべて飲み干していたようだ。ほんの少し口まで届いた液体は、オレンジジュースの味がかすかにする水だった。海は顔をしかめ、紙コップを握りつぶした。

駅前のショッピングセンターの、待合所に設けてあるベンチに座っていた。平日の昼過ぎとあってか、海の座るベンチ以外には誰もいない。

光と喧嘩別れしてから数日がたった。あれから一度も光に会っていない。思い出しただけで腹が立つ。だが、なぜそこまで腹が立つのか、海自身にもよく分かっていなかった。

せっかくあの日、宿題全部終わらせたのに。

海はそう思って溜息をついた。本来なら『宿題早く終わらせて遊びまくろう計画』の『遊びまくろう』を実行させていたはずなのに。

海はまた溜息をついた。

「おつまえ、溜息多すぎ。この瞬間にも幸せがどんどん逃げてって
るんだぞ」

海の横から元気な声が聞こえてきた。

海はそちらに目を向ける。二重の、大きな茶色い瞳が海を見ていた。海はその瞳が、空の顔の中で一番好きだ。その瞳にあつらえたように似合いの鼻や唇のせいで、一見するとしとやかなお嬢様顔の空だが、瞳に宿る勝気な性格が、空を元気な印象に変えていた。

無意識に、海はじつと空を見つめていた。空が沈黙に耐えかねたように眉を寄せる。

「おおーい。何放心してんだよ。お前大丈夫か？ 最近変だぞ」

小首を傾げるその姿を可愛く感じて、海は憂鬱だった気分を切り替えるべく、笑顔を作った。

「いやー。やっぱ空って可愛いよなーって改めて思ってもうたわ。
でへっ」

頭に手をやって表情を崩した海に、空は眉を吊り上げた。

「がーっ。何がでへっだ！ 可愛いって言うなっつってんだろうが
っ。ほんつとムカつく。っていうか、まだなの？ 二時に待ち合わせ
せつつたじゃん。今二時十五分だぜ？ 相談しようっていうのに
遅れてくるとはどういうことだ」

吠える空を見ると、やはり子犬のようだと海は思う。

今日は風見に頼まれたことをしに来たのである。つまり、君島由
香の相談に乗りにきたのだ。

海は空に捨ててと紙コップを手渡して、彼の気をそらせた。ちよ
うど彼の横にはごみ箱が置いてある。

「まあ、いろいろと事情があるんちゃうか？ なんやったら空はも
う帰ってくれてもいいけど」

「何それ。俺が邪魔ってことか」

「ちやうけど……なんや空、そんなに俺のこと好きなんかい。海子
嬉しいー」

そう言いながら、ふざけて空に抱きついた。空は大暴れである。
「だー、熱い、気持ちわりい。はーなーれーろー」

空がもがいているのが面白いので、海はもうしばらくくっついて
いることにした。

ひとしきりじゃれあっていると、背後から呼びかける声が上がっ
た。

「ちよつと、紫藤ってホモっ気があつたの？」

聞き覚えのある声に空を抱いたまま振り向くと、面白がった顔を
した風見と、隣に複雑そうな表情をした少女が立っていた。

海は二人に笑顔を向け、空の背に回していた手を離す。

「そつやねーん。コレが俺の愛しい人」

そつ言つと、空に頭を殴られた。

「調子乗りすぎっ」

「ははっ」

海は殴られた頭をさすりながら、笑って誤魔化した。

「で、本当はどつちなのよ」

風見が近付いてきたので、海は立ち上がった。空も続いて立ち上
がる。

「友達友達、ただの友達だから」

空は風見の言葉にむきになって答える。

「あ、これが言つといたツレヤから」

海は空を指差して二人に紹介した。空は、海にこれってなんだよ
とくっつかかる。風見には事前に空が来ることを伝えていた。空が、
どうしても自分も行くと言つて聞かなかったからだ。

「元気いーねー。男の子だね？」

風見が尋ねると、空は頬をふくらませた。

「どつからどー見ても男だろ」

空が吠えた。それに風見は苦笑いをみせる。きつとどつからどつ
見ても、と言うほど男には見えないと思っているのだらう。

「まあまあ。で、空。こつちの美人が風見で、そつちのかわいい子

が君島さんや」

海が手で二人を示しながらそう言うと、君島と名を呼ばれた少女が少し目を見張った。

「あ、覚えててくれたんだ。紫藤くん」

とても小さな声だった。海は笑顔で頷く。

「え？ そら覚えてるわ。一年もたつてないのに、忘れてたら俺アホやん」

「あ、そうよね。ゴメンなさい」

謝りながら君島は微笑んだ。空はそのやり取りを見ながら首を軽く傾げている。

「もう、紫藤つてば罪づくりな奴なんだからー」

風見がそう言いながら肘で海の脇腹をつついてきた。けっこう痛い。

それに、風見の言っている意味が分からなかった。

「なんやねん。どういう意味や？」

「鈍感」

風見はそれだけ言って、顔を背けた。

「あー？」

海は風見に声を上げる。そんな海の腕を空がつついた。

「なあ、いつまでここにいる気？ それともここで話すんの？」

空が聞くと、風見があつと声を上げる。

「そうだ。待たせてんのよ」

海は空と顔を合わせてから、風見に問う。

「誰を？ 話は君島さんとやんな」

そう言うと、風見は綺麗に整えた眉を寄せた。

「それがさー。紫藤、他にもメールきてる子いるって言ったじゃん」

「ああ、言つとつたな」

「その、他の子も来てるんだよね。あたしん家に」

「ああ？ 何で」

声を上げた海に、怯えたように体を震わせて、君島が言った。

「あ、あの。紫藤君ごめんなさい。私がみんなに、紫藤君に相談することにしたってメールしたら、一度みんなで話し合おうってことになって。第三者の意見も聞きたいから、紫藤君も呼ばうって」

君島の様子に気づいた海は、笑顔を君島に向けた。

「あ、大丈夫やで。気にせんといてな、君島さん。さ、行こか」

海の声を含図に四人は風見の家に向かって歩き出した。

第七章 話し合い

ショッピングセンターから五分ほどで、風見の家に着いた。

ずいぶん大きな家だ。二階建てで、駐車場がついている。駐車場には車が二台停められるスペースがあった。

「でっかい家だな」

空が言葉を洩らす。内心、光の家の方が大きいけど、と付け加えた。

「まーね。さ、あがって。皆がいる部屋、二階だから」

そう言って、さっさと階段を上がっていく風見に、空たちもついて行った。

風見に連れられて着いた部屋は、客間のような。クーラーのきいた部屋に、ほつとする。空の家のどの部屋よりも広いスペースに、大きなテーブルと、ソファアがいくつか置いてある。ざっと見て、八人くらいは座れるだろう。そのソファアに三人の少女が座っていた。

「おっそーい。ユカたち」

その内の一人が声を上げた。非難の響きに、風見は微かに気分を害した気配を見せた。空はそれに気づいて、内心喧嘩が始まらなきやいいけど、と思ったが、それは取り越し苦労であった。

「ごめんね。みんなの分の飲み物とかもついでに買って来たのよ。あとで、持ってくるからさ」

風見は由香の変わりにというように、非難の声を上げた少女にその笑顔をかえず。

少女は、肩をすくめて見せただけだった。

風見とはやりあいたくないのだろうか。

風見はついでにと、海と空を三人の少女に紹介した。

二人揃って挨拶をした後、少女達を紹介してもらう。三人の少女が立ちあがった。

風見はまず、最初に声を上げた少女を手で示した。

「えーっと、彼女は石井睦子^{いしむつこ}」

「どーもー」

やる気のないような声を上げた石井睦子は、空たちに視線をやることもなく、軽く頭を下げた。空たちよりも明るい茶髪を、ポニールにしている。その顔にはしっかりとメイクがほどこされていた。

空は、挨拶する時くらいこっち見ろよと思ったが、口には出さなかった。今日は、一応海の付添で来ているのだ。まだ、話も始まっていないうちから、事を荒立てることもない。

風見は、石井の態度にまたもや気分を害した様子を見せたが、こちらも口に出すことはなく、石井の隣に立っている少女に視線を移した。その隣に立つ少女はキャミソールにミニスカートといういでたちだ。細身の彼女にはとてもよく似合っている。

「で、隣にいるのが川崎杏奈^{かわさきあんな}」

「どども、紫藤はお久だねー」

石井と同様、しっかりとメイクをほどこした顔に笑顔をのせ、川崎杏奈と呼ばれた少女は海に手を振る。振った拍子に、手首にたくさんつけられたアクセサリーが音をたてた。

空が海の方を見ると、彼も軽く笑みを浮かべていた。

「おー。久し振り」

「何？ 知ってんの？」

空が聞くと、海は頷いて見せた。

「そう、俺のダチの元カノやねん」

海の言葉に、川崎は唇を尖らせる。

「もー、ヘンな紹介の仕方やめてよねー。あいつとは一か月しか付き合ってなかったんだから。今はフリーだよー。誤解しないでね、高橋くん」

何故かそう話を向けられ、空は反射的に首を数度縦に振った。それに満足したのか、川崎は相手を崩す。

「はいはい、粉かけはあとにしてよねー。じゃ、最後ね。彼女は伊^{いと}藤^{うしずか}静」

風見の声で、空と海は示された少女を見た。一見おとなしそうな少女だ。石井や川崎と違い、ノーメイクで染めていない黒髪を左右でお下げにしている。服装も露出の多い川崎や石井と違い、白い半そでのブラウスに、紺色のひざ丈のスカートと地味な出で立ちだ。「はじめまして。伊藤です」

伊藤静と呼ばれた少女は、深々と頭を下げた。

空と海もよろしくと、あわてて頭を下げる。

「よし、じゃあ、紹介も終わったし、話し合い始めようか？」

風見の声を合図に空と海、そして少女五人はそれぞれ一番近い位置のソファーにテーブルを囲むようにして座った。

「じゃあ、まず、何から……」

風見が話し始めたとき、その声を遮るようにして石井が声を上げた。

「あのさー。別に話し合うこともなくない？ あんなの無視してればすむことじゃん」

「でも、ムツコは怖くないの？ あのメール」

石井は君島に鋭い視線を投げた。

「あのさー、ユカ。あんなのエリが送ってきてるとかマジに思ってるの？ そんな訳ないじゃん。あいつ死んでんだよ？ 死んだあいつが、どうやってメール送ってくるっていうのよ」

「だって、でも……」

言いよどむ君島に、石井は追い打ちを掛けるように口を開く。

「ムリよムリ。絶対ムリ。っつーかさ、あの内容でそんな怯えることとなくない？ それとも、なんかやましいことでもあるの？ ユカ」

「や、やましいことなんて……」

「だったら怯える必要ないじゃん、……まあ、あんたがエリをやったって言うんなら？ 話は別だけど」

石井が侮蔑を込めたような目で君島を見る。そんな石井に反論の

声を上げたのは、君島ではなく、その隣に座っていた風見だった。

「ちよつと、石井。あんた言っていていいことと悪いことの区別もつかないの？ 由香がそんなことするわけないじゃない」

立ち上がって石井を見下ろすように言った風見に、石井は冷たい眼を向ける。

「うるさいな、あんた部外者じゃん。でしゃばってんじゃねーよ」
「な、なんですってー」

石井のあまりの言いように、風見の堪忍袋の緒もとうとう切れたらしい。風見が大きく息を吸い込むのを見たとき、空も黙っていられず腰を浮かした。

二人を止めるために、やめろと言おうとしたのだが、その言葉を発する前に空の隣から大声が響いた。

「わっ！」

その大声に、空は勿論、その場にいたほぼ全員がその声の発生源から身を引いて、そちらを見た。

注目を浴びたその人物は、不意に笑顔になると、一人一人の顔を眺めるように見回した。

「よっしゃ、静になったな」

海以外の全員が、力が抜けたようにソファーにもたれる。

「もー、何だよ。俺心臓止まるかと思った」

「アタシもマジビビった」

「やめてよねー紫藤」

口ぐちに非難の声を上げる面々に、笑顔を持続させたまま答える。

「でも、みんな落ち着いたやろ？ これでちゃんと話できるやん」

海の言葉に、風見と石井が顔を見合わせた。

「まあね、でも石井は言いすぎよ」

風見の言葉に、石井は不機嫌な表情を見せるも、溜息をついて君島に謝罪した。

「ごめん、ユカ。言い過ぎた。だって、なんかさ、イライラしちゃって。怖くはないけど気分悪いじゃん。こんなメールが来るのって」

君島は目を伏せて頷いた。奇妙な沈黙が辺りを支配する。普段は気にならない、クーラーのモーター音が耳につく。

「ねえ、みんなはどうして急にこんなメールが来るようになったんだと思う」

不意に上がった声は風見からではなく、伊藤静からだった。静は、ゆっくりと一人一人の顔を見回した。

「誰かのイタズラとしか考えられない？」

一番初めに意見を出したのは、先ほど風見に粉をかけるなど言われた川崎杏奈だった。

「なぜ今頃？ エリが亡くなったのって、二年も前よ」

冷静な声を出す伊藤に、川崎は肩をすくめて見せた。

「他には？」

「あのさあ、メール見させてもらっただけど、このメール送ってきてる人ってさ。ずいぶん桜田さんとあんなたちに詳しいわよね」

風見はメールが来ている四人の顔を見回す。

「あー、それやけど。具体的にどんなんきてるんや？ 俺、実際にメールの内容見せてもらってないねんけど」

ここで海が話に加わる。川崎が、机の端に置いていた携帯電話を手にとった。

「じゃあ、メールきた順番に読みあげるね」

そう言って、川崎は声を上げた。

『アンナ。元気にしてた？ 私かえってきたよ』

『今日は、友達がいつぺんにできたのが嬉しかったなー。アンナにムッコにシズカにユカ。ずっと友達でいてね』

『今日は楽しかったね。ムッコとアンナが買ったストラップ可愛かったな。私も買おうかなー。でも千二百円は高いよね』

『四人ではじめての遊園地。シズカが彼を連れてきてびっくり。だって、シズカの彼つてばとってもカッコいいんだもの。シズカつてば、大人しい顔して、結構やるなあ』

空は、川崎が読み上げるメールの内容を聞きながら疑問を覚えた。どれもこれも、日常の些細な出来事を綴ったものだったからだ。死人からのメールというから、もっとこう、おどろおどろしいものを想像していたのだが。

「この、ストラップとか、遊園地のこととかって、ほんまにあったことなんか？」

海が誰にともなく問いかける。

由香がゆっくりと頷いた。

「ええ。どれも本当のこと。どんどんと、エリが死んだ日に近づいていつてるの」

「えっと。このムツコが石井さんで、アンナが川崎さん。で、シズカが伊藤さんで、ユカが君島さんだよな」

空が、こんがらがってきた頭を整理しようと声を上げた。メールの内容を聞いただけでは、誰が誰かよく分からなくなってきたのだ。「あつてるよー。高橋君。高橋君もアタシのことアンナって呼んでくれていいからね」

甘い声でそう言ってくれた杏奈に、空は愛想笑いを返した。

そんな空の耳に、風見の咳払いが聞こえた。

「うおっほん。さ、そんなことより、メールの話でしょ。もちろん、メアド変えたり、色々やったのよね。でも、メールがくる。そうでしょ？」

「そうよ。だから、気味悪いんじゃない」

相変わらず不機嫌そのものの声で、睦子が肯定した。

「あら、ムツコは怖くないって言ってなかった？」

静の言葉に、睦子は声を上げる。

「怖いとは言っていないでしょ。気味悪いって言うてんの。内容はた

いしたことないけどさ。こんなメール送ってくる意味が分かんないし、いまさら、こんな思い出語られても。どうしろっていうのよ」「だよねえ。ムツコの言うとおり。アタシもなんだか気持ち悪いな」杏奈が手にした携帯電話のストラップを弄びながら、同意の声を上げた。静がそれに頷いたのを空は見た。

自殺したという少女と、彼女たちの日常風景が書かれたメール。これにいったいどんな意味が込められているのだろう。

はつきり言ってさっぱり分らない。嫌がらせにしては、大した効果もないように思われる。確かに気味は悪いかもしれないが。

空が首をひねっていると、由香が恐る恐るといった体で、口を開いた。

「あの、みんな気づいてた？ 最初に来たメールのアドレス。本当にエリの使ってたケータイのアドレスだったってこと」

「え？ うそっ」

杏奈が気味悪げに由香を見て声を上げる。

「マジで？ そんなの気付かなかった。だって、エリが死んで、ソッコーでアドレス削除したしさ」

「私も、ケータイ変えたとき、エリのアドレス削除してたから気付かなかったわ」

静が、睦子に同意する。由香は心なしに青ざめた顔で、一同を見回した。

「本当よ。私、エリが死んだあとも、どうしてもアドレス消すことができなくて、ずっと残してたの。だから、メールが来た時驚いたの。誰かのいたずらとは思えなくて、本当にエリなんじゃないかって……」

由香は体を縮こませるように、腕を抱く。そんな由香の言葉を遮るように、風見が声を上げた。

「ちよ、ちよつとユカ。そんなことないって。ありえないって。だって桜田さんは」

「死んでるのよ、ユカ。エリな訳がないの。でも、ユカの言うよう

に、メールアドレスがエリのものだったなら……」

そこまで、静が言ったときだった。急に、杏奈の持っている携帯電話が音を鳴らした。ほぼ、時を同じくして、あちらこちらから音が鳴る。携帯電話の着信音だ。海は空と顔を見合わせた。由香や静。そして、睦子が自身の鞆を探る。

一人携帯電話を手に使っていた杏奈が、声を上げた。

「ヤダ、何これ」

口元に手をやり、自身から遠ざけるように携帯電話を持った方の腕を伸ばす。手首につけたアクセサリーが音をたてた。

杏奈の携帯電話を半ば取り上げるようにして、海がディスプレイに目を落とす。空はそれを横から覗きこんだ。

「何だこれ。気持ち悪っ」

思わず声を上げる。

『ねえ。私を殺したのは、誰？』

確認すると、四人全員に、同じメールが送られていた。

第八章 自殺じゃなかったの？

夏は日が沈むのが遅い。

十分に明るい午後六時過ぎ。

まだまだ暑いが、温度の少し下がった風が通り過ぎ、一時涼を感じさせる。

空と海は由香を家まで送り届けるために、並んで住宅街を歩いていた。

すっかり意気消沈してしまった由香は、黙々と歩みを進めている。その様子を窺っていた空は、黙っているのも性に合わない口を開くことにした。

「なあ、えっと、君島さん」

由香が無言で空に顔を向ける。空は無理やり笑顔を作った。

「あのさ、何であんなメールが来たんだろうな。殺したの誰って、自殺なんだから自分だよな」

由香は小さく体を震わせた。その顔色が心なしに青くなったことに気付いた空は、自分が失敗したことを悟った。どうせなら、関係ない話をふればよかったと後悔する。だが、後の祭りだ。

足を止めてしまった由香に気づき、空は海とともに立ち止まった。彼女は俯いてしまっている。

「ごめんなあ、君島さん。空ってば空気読めへん奴やから」

「悪かったな」

海を睨んだが、その声はどこか弱い。

海が自身の頭に手をやって、髪をくしゃくしゃと撫でた。

由香に何と声をかけようか考えているのだろう。

「……の、せいな」

小さく、由香の声が聞こえた気がして、空は海と目を合わせた。そして、また、視線を由香に戻す。

「今、なんて言った？」

由香はゆつくりと顔を上げた。今にも泣きだしてしまいそうな歪んだ表情だ。

「私なの。エリを殺したのは、私なのよ」

由香は大きな声でそう言っ、手のひらに顔を埋めてしまった。肩が震え始める。泣きだしてしまつた由香を前に、男二人は複雑な表情で顔を見合わせた。

海はゆつくりと辺りを見回し、考えるように顎に手をあてる。

「あー、君島さん。この辺に確か公園あつたよな。そこ行かへん？ ゆつくり話聞くから、溜まつてるもん、全部吐き出してみようや」海の優しい声音が耳に入ったのだらう。由香はゆつくりと頭を縦に振る。安堵したような海の吐息が、空の耳に届いた。

ふと、空は海の言葉に引っかけかりを覚えて、首を傾げる。なぜ、海がこの辺りに公園があることを知っているのだらう、そう思つたのだ。

中学三年生の時、由香はこの辺りに越してきたそうだ。中学校の学区とは離れた場所に、彼女の家はある。

海の家は、空の家を基準にして、ここから正反対の場所だ。この場所は、駅でいえば海の自宅の最寄り駅から二駅先になる。空の家の方が海の家より近いが、空はこの辺りの地理には明るくない。海がこの辺りに詳しいというのが解せないのだ。

しかし、その疑問を口にする雰囲気、今はなかった。

泣きじゃくる由香を海に任せ、自動販売機で缶ジュースを三本買つてきた。空は、缶ジュースを公園のベンチに座る海と由香に手渡し、自身もそのベンチに腰かけた。海と空で由香を挟むかたちだ。遊具場を背に、広場の方に向けて設けられたベンチ。夕焼けが目に眩しい。午後七時を過ぎたせいだらうか、広場に子どもの姿はなかった。

「落ち着いた？」

海の声が耳に届き、空は顔を横に向けた。隣に座る由香がゆつくりと頷いたのが視界に入る。

「ごめんなさい。泣いたりして」

相変わらず沈んだ声で謝る由香に、海は首を横に振る。

「そんなん気にせんでいいって。な、空」

「お、おう。全然気にしてないし。それより、ジュース飲めば？」

喉乾いてんだろ」

手渡したジュースを飲んでいないことに気づき、そう声をかけた空に、由香は小さく微笑んだ。

「ありがとう、いただくな」

そう言いはしたものの、プルトップを開けるのに苦戦している。そんな彼女を見かねてか、海が由香のジュースを取り上げて自身のジュースを差し出した。

「まだ、飲んでへんからこっちどうぞ」

爽やかな笑顔を振りまく海に、由香は礼を言い俯いた。その顔が赤くなつて見えるのは、きつと夕焼けのせいだけではない。

空は溜息をつきたい衝動に駆られた。二人から顔を背け、口を歪めて思う。

俺、お邪魔ですかー？ と。

一口飲んだジュースは、甘く口に広がった。

「ところで、君島さん。単刀直入に聞くで。さっき言うった話、エリを殺したのは私って、どういう意味なん？」

いきなり核心を突く言葉に、空は背けていた顔を戻した。

表情を強張らせた由香が、ゆっくりと顔を上げる。

また、泣きだすのではないかと身構える。だが、それは杞憂に終わった。

「エリが死んだ日。私は、エリと会う約束をしていたの。でも、行かなかった」

「そんな、行かなかったくらいで自殺なんかしないだろ」

つい声を上げた空に向かって、静にしろというように海が人差し指を唇にあてる。

「でも、私が行っていればエリは死ななかったかもしれない。私がエリを裏切ったから、エリはきつと絶望して死んじやったのよ。やっと喋ってくれたって、喜んでたのに、それを私、裏切っちゃって……」

声が震えていた。口元にやった手も震えている。

「あのさ、やっと喋ってくれたってどういう意味？」

空は気になったことをそのまま口にした。

由香は一度肩を震わせ、大きく息を吐いた。空は黙って由香を見つめる。

「私たち、エリが死ぬ二週間前から、エリのこと無視してたの」

「何で？ あ、泣くなよ」

問いに顔を歪めた由香に、慌てて釘をさす。彼女は頷いた。

「理由はよく知らないの。ただ、ムッコとアンナが、エリのことムカつくから無視しようって言いだして。私にも、エリを無視しなきゃ絶交だって……」

尻すぼみになる由香の声。由香は何かに耐えるように、持っていたジュースの缶を握る手に力を込めた。関節が白く浮き上がる。

「あの時、凄く嫌だったけど。でもムッコたちに嫌われるのも嫌で、ごめんなさいってずっと思いつながら、エリのこと無視してたの」

「そうか。しんどかったな。それは」

海が呟くようにそう漏らす。由香は一度口を閉じて、目に溜まった涙を指で拭いた。大きく息を吐き出し、また話を再開する。

「でも、二週間目に入った日に、エリに何で無視するのかって問いただされて。全部話したの。私、自分の身可愛さにエリのこと裏切ったのに、エリ、笑って許してくれた。ムッコやアンナに虐められたら、守ってくれるって、そんな風にも言ってくれたの」

由香はそこで一度息をついた。手にしていた缶ジュースを口に運ぶ。

「強えな。その、エリって子」

とても自殺しそうには思えないと続けようとして、自殺は禁句かもしれないと思いとどまる。空の目に、由香の頷く姿が映った。

「とっても強い子だった。私と違ってハキハキしてて。あの日、エリが亡くなった日。仲直りの記念につて、二人で遊ぶ約束をしてたの。でも、私は行かなかった。その約束してるところをムッコたちに見られて……」

「行くなつて言われたんやな」

溜息混じりの言葉に、由香は肯定の意を吐いた。

「うん。行ったら一生いじめてやるつて言われて、私、怖くなつて。無視したときと同じこと、繰り返しちゃったの」

そして、次の日。

由香はエリの死を知ったのだ。

「私がエリを殺したようなものだわ」

どうして行かなかったのだろう。

どれだけ自分を恨んで死んだのだろう。

それ以降、そんな思いが由香を苛んだ。

「理沙に……」

「リサ？」

「ああ。えっと、風見さんに、いつまでも落ち込んでたつて仕方ないつて、悪いと思つてるなら、エリの分まで由香が楽しんで生きなきゃつて言われて、やつと前向きに考えられるようになってきたのに……」

「メールが来るようになったんやな」

由香は無言で頷いた。空は、いたたまれない気持ちになりながら、視線を上へ向けた。日はもうずいぶん沈み、上方には星が瞬き始めている。

「何とか、何ねーのかな」

そう、呟いていた。

「んじゃ、ちよつと調べみいひんか？」

空は、思いついたように声を上げた海に顔を向けた。

「どうやって？　っていか何をだよ」

海はよつと掛声をあげて立ち上がる。そして、二人を振り返った。
「もちろん。メールを送ってくる犯人や」

言いきつた海は、不適な笑顔を見せる。

「そんなん出来んのかよー」

訝る空に、海はさあと首を傾げる。何とも頼りない。

「まあ、とりあえずは、桜田さんのケータイが今どうなってるか調べてみようや」

桜田の実家を知っているかと尋ねた海に、由香は頷いた。

「ええ、時々お線香あげに行ってるから。それと、今度家に呼ばれてるわ」

「そりゃ、好都合や」

相好を崩す海に、何が好都合なのかと空は思ふ。だが、海はそれには触れず、その日一緒に桜田絵里の家に行く段取りをとった。

「んじゃ、そういうことで。そろそろ帰ろつや。もう七時半過ぎてるし」

海はズボンの尻ポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認したようだ。

時刻を聞いて由香は慌てて立ち上がった。空と海は当初の予定通り、由香を家へ送り届けた。

第九章 電話じゃなくてさ

夜の八時過ぎに家に着いた。

食卓に出された夕飯は、昨日の天ぷらの残りを乗せた天井だった。タレの匂いが良い具合に腹の虫をくすぐる。空は、手を合わせていただきますと言ってから箸を手にとった。

「空、遅くなるなら電話ぐらいしなさいよ。心配するでしょう」

母が、横に大きな身体を揺らして、麦茶の入ったコップを手に空の前の席に座る。空は、かきこんだご飯の咀嚼を終えてから、母に答えた。

「だって、最近公衆電話ないじゃん。電話しようにもできないって」
反論した空に、母はそう言えばそうねえ、などと呟いている。

空は、ふと壁に掛けてある時計を目にし、母に声をかけた。

「ねえ、母さん。いいの？ もう八時過ぎてるけど、いつも見てるテレビ始まつてるよ」

「ああ、大変。お父さん。何見てるー」

居間にいる父に呼びかけながら、母は立ち上がってダイニングを出て行った。

漏れ聞こえる両親の声を聞きながら、ウチって平和だよなと思う。

勢いよく食事を終わると、皿を洗ってからダイニングを出る。そして、廊下に置いてある電話に向かった。受話器を上げて、すでに頭に入っている電話番号を押す。

ほどなくして、電話がつながった。

『もしもし？ 空？』

「え？ なんで俺って分かんのか？」

驚いて声を上げた空に、電話の相手は不機嫌な声を上げた。

『空、うるさい。何でそう、声でかいんだよ』

「悪かったな。コレが地声だったの。いい加減慣れろよな」

開き直った空に、光の溜息が届く。

『で、要件は？』

端的に尋ねる光に、もつと話すことはないのかよと思う。だが、口に出すことはやめた。どう言っても言い争いになりそうな気がして。争いをするために電話したのではないのだ。

「行って来たぜ、今日。この間言ってた、死人からメールが来るって子の所」

『へえ、どうだった？』

お、珍しく話に乗ってきたぞ。と、思っ、空は今日の出来事を語って聞かせた。

「ってわけ。で、俺達、明後日にその死んだ子の家に行くことになったんだ」

そう、話を締めくくった。一拍の間を置いて、光の声が耳に届く。

『空も行くのか』

「まあ、いちおうな。あ、光も一緒に行く？」

光と一緒に来てくれれば、空たちが気付かない何かに気づいてくれるかもしれない。以前事件に巻き込まれたときも、光はよく回る頭をフル稼働して事件の真相に迫ったのだ。

それに、そろそろ海と仲直りしてほしい。ケンカしてから一度も、光と海は会っていない。いつまでもこのままでは、空の気がもたない。

『いや、やめとくよ』

「何でだよ。いいじゃん。暇だろ」

『空と一緒にしないでくれ。別に暇じゃない』

間髪入れずに返されて、空は頬を膨らませた。どうせ、見えはしないが。

『空は行くんだろ？ だったら、また教えてくれよ。どうだったかあと、亡くなった子の家に行ったとき、聞いてほしいことがあるんだ……』

簡単な問いの文句。だが、空にはそんなことを聞いて何になるの

か分からない。

「え？ 何で？　つか、何でそんなこと聞かなきゃなんないわけ？」
興味がないのではなかったのか。

空は、首を傾げつつ光の答えを待つ。

『嫌なら、別にいいけど……』

「あ、聞く聞く。ちゃんと聞いてくるって。な。だからまだ切るなよ」

慌てて声をあげて、空は一度大きく深呼吸した。回りくどいのは好きじゃない。こうなったら単刀直入に言ってみようと、空は心に決めた。

「あのさ、海と仲直りしろよ」

しばらく待ったが、光から返答はない。

空は、受話器から延びるコードを片手で弄びながらまた口を開く。

「せっかく、兄弟だって分かったんだしさ。仲良くしたいじゃん。

お前だって、今の感じ嫌だろ」

『まあ、な』

空は、光の返事に安堵の息をついた。よかった。これで、別に何とも思っていないなどと言われたら、もうどうしていいか分からなかった。仲直りしたいと少しでも思っているなら、今の関係を改善できるチャンスはある。

『でも、僕じゃなくて、海が嫌なんだろ。僕には海が何に怒ってるか分からないし、謝るつもりもないから。海が僕に会ってもいいと思うまで会うつつもりはないよ。じゃあ、そろそろ切るから』

そう言って、空の返答を待たずに、光は通話を切ってしまった。

「もー、なんでそんな頑固なんだよ。光のバカ」

空は、通話の切れた受話器を握りしめ、そう叫んだのだった。

第十章 光はその日

駅前の繁華街を抜けると、急に寂しい住宅街になる。ビルや店のあかりで明るかった路地は、住宅街へ入ると暗さが一気に増した。等間隔に並んだ街灯の数が不十分なのだと、彼女は思う。

送ると言っていた男に、額けばよかったと少し後悔する。彼氏と別れたばかりで、下心のありそうな男性の申し出を受ける気がしなかったのが、正直なところだ。だが、こうして人通りのない夜道を一人歩いていると、不安になる。その不安を煽るように、背後から足音が聞こえてきた。

驚き、彼女は振り返る。

だが、暗い夜道の向こうに人影はない。

気のせいか。そう思い彼女は、また前を向いて歩きだす。

心持ち、速度を速めて。

だが、その速度に合わせるように、また彼女の背後から足音が聞こえるのだ。

かかとを擦って歩くような足音。

彼女のミュールの音が歩幅に合わせて、大きくそして早くなる。後の足音もそれに合わせるかのように速度を上げる。

つけられている。

彼女の中で、疑惑が核心に変わった。

振り返るのが怖い。

彼女は、全速力で家へ向かって走った。

いつの間にか、足音は聞こえなくなっていた。

クーラーのきいた自室で、たった今通話を終えた携帯電話を、べ

ツドの上に放り投げた。

自身の身体もベッドへ投げ出す。すぐに顔を顰めたのは、先ほど放った携帯電話が背中にあたったからだ。寝ころんだまま少し背を上げて、手探りで携帯電話を取る。

さて、どうしようか。

そう思っ、光は携帯電話を顔の上に掲げた。逆光で影に隠れた携帯電話をただ見つめる。

不意に、咳が襲ってきた。慌てて携帯電話を握った手の甲を口元にあてる。

苦しい。咳が止まらない。

光はパニックになりそうな思考を抑えて、咳を繰り返しながら、注意深くゆっくりと、荒い呼吸を抑えるように息を吐く。

大丈夫だ。これくらい。大丈夫。

自分に言い聞かせながら、深呼吸を繰り返した。それでも合間に、咳が漏れる。

幸い軽い発作だったらしく、しばらくすると咳は治まった。薬を使うほどでもなかったようだ。

楽になつてきた呼吸を整えるように、息を大きく吐き出す。

まったく、こんなことで発作を起こすなんて。

しばらく、喘息の発作はでなかったので、油断していた。

光が喘息の発作を起こすのは、心因的要因が大きいと医者に言われている。

今、考えうる心因的要因と言えば……。

海のことか。

そう、結論付けて、光は苦い顔をする。

いつものことじゃないか。嫌われるのは。

そう、いつものことだったはずだ。いつもの。

そこまで考えたとき、ずっと握ったままだった携帯電話が、バイブレーションとともに音をたてた。

半身を起こすと、相手を確認かめずに、光は通話ボタンを押した。

「もしもし……」

『あの、春名くん？』

聞き覚えのある声に、思い当たった顔を脳裏に浮かべる。

「ああ、伊藤さん。どうかした？」

我ながら、ひどい声だ。掠れたような低い声。さつきまで発作を起こしていたのだから仕方ないが。

『あ、ごめん。寝てた？ 今、話しても大丈夫かしら』

掠れ声を寝ていたせいだと誤解したのだろう。静の言葉に光は苦笑いを浮かべた。

「いや、大丈夫だよ。何？」

問いかけると、静は話し始めた。今日、メールの来ている友人たちと集まったこと。その時、メールが来たこと。空から聞いたこととほぼ同じ内容だった。

『春名君はどう思う？ 誰が、私たちにメールを送ってきてるか、分かるかしら』

「分からない」

間髪入れずに答える。静からそれに対する返答はなかった。

「でも、可能性のある人物なら数人いる」

『なら、聞かせて』

静の挑戦的とも取れる口調に、どこか違和感を覚えたが、光はそんなことはおくびにも出さずに口を開いた。

「それだけ君たちのことに詳しいなら、人数は限られる。君たちのまわりにいた人物、もしくは君たちの中の誰か」

そこで、光は一度息をついた。そして、沈黙を守っている静に届くように続ける。

「もしくは、君自信か……」

光の耳に、静の笑い声が響く。驚いて、光は少し携帯電話を耳から遠ざけた。

『ごめんなさい。あんまりはつきり言うからおかしくなっちゃって』
笑われるとは思わなかった。笑い続ける静に、光は憮然とした表

情を作り、携帯電話をまた耳にあてた。

『ねえ、他には？ 他にはいないの？』

笑いを押さえた静に問われ、光は一度顎に手をあててから口を開く。

「そうだな。あとは、亡くなった彼女の家族の誰かな」

『うん、実は私もその可能性が一番高いと思ってたの』

「どうして」

興味を引かれて尋ねると、静はどこか嬉しそうに先を続ける。

『だって、最初に来たメール。あれ、エリのケータイのアドレスと同じものだったって、ユカが言ってたから。それが本当なら、エリのケータイを持ってる人物は、家族くらいしか思い浮かばなくて』
確かにそうだ。一番、亡くなった少女の携帯電話を手に入れやすい環境にあるのは、その少女の家族だ。静や、他の関係者では難しい。

「明後日、空たちがその亡くなった子の実家に行くらしい」

『空って、ああ、高橋君ね。仲直りしたの？』

聞かれて、思わず咳きこんだ。これは発作ではない。

「いや、仲直りって。そもそも喧嘩してないし」

『でも、初めて会った日、喧嘩してたでしょう……あ、喧嘩してたのは紫藤君とか』

言い当てた静に、苦い思いを抱きながら、光は溜息をついた。

『早く仲直りした方がいいわよ。で、それより明日なんだけど』

余計なひと言の後に、静が言い淀んだ。何かと思ひ言葉を待つ。

『明日、時間ないかしら。あの、会ってもらいたくて。ムッコたちに』

ムッコの名は空の口からも聞いている。空には暇じゃないといったが、本当は特に用事はなかった。それに、一度会って話を聞いた方がいいだろう。海は光の危惧したとおり、この件に首を突っ込んでしまったのだから。

もう一度溜息をついて、光は肯定の意を静に伝えた。

第十一章 女って

今日もよく晴れていた。最近雨が少ない。このまま降らなければ、また水不足だと騒ぎ出すのではないだろうか。

青空に目を向けていた光は、ゆつくりと視界を街中に戻した。

行きかう人の多い、駅前噴水広場。その噴水の縁に彼は腰かけていた。時折飛沫が服の背にかかるが、気にしない。

あと五分で、待ち合わせ時間の午前十時半になる。ずいぶん日も高くなり、暑さも増してきた。

「あ、春名くん？」

突然呼びかけられて、そちらに顔を向けた。そこにいたのは、慣れた少女の姿だった。

「ああ、朝倉」

「すごい、偶然ね。信じられない。こんな所で何してるの？ 待ち合わせ？ 私も今日は友達と待ち合わせなの」

嬉しそうに、駆けよってきて光の隣に腰かけたのは、クラスメートの朝倉有紀だ。朝倉は、光と同じクラス委員をしているので、光にとっては話しやすい女生徒だった。

「朝倉、そんなにいつぺんに言われても、答えられないよ」

「えへへ。ごめんね。だって嬉しかったから、春名君に会えて。夏休みってつまらないわよね。だって春名君がいないんだもん」

にこにこ笑顔全開の朝倉。どうして、こつと簡単に、人に好意を向けられるのだろう。

光には理解できない人種である。その、理解できない人種である朝倉を、ついまじまじと見つめてしまう。すると、朝倉の頬がほんのりと赤くなってきた。

光は軽く首を傾げる。

「暑い？」

「へ？ 何で」

光は朝倉の頬の辺りを指差した。

「赤いよ、顔」

「もうヤダ、春名君ってばー」

言うやいなや思いつきり背中を叩かれた。
かなり痛い。

「あ、ごめんなさい。春名君」

慌てたように声を上ずらせる朝倉に、なんでもないというように手を上げた。

その時である。遠慮がちに、光を呼ぶ声が耳に届いた。

そちらを振り向くと、光の目に一人の少女の姿が映った。

白い、レトロ調のワンピースを着た少女が光のもとへ駆け寄ってくる。

「あの、ごめんなさい遅くなつて。そちらは？」

そう言つて、伊藤静は朝倉に目をやった。

「は、は、は、春名君。待ち合わせて女の子だったの？」

「ああ。じゃあ、また学校で、朝倉」

光は、朝倉にその声をかけ、横に立て掛けていた折り畳み式の杖を手に、立ち上がった。

「あ、うんバイバイ」

どこか力なく手を振る朝倉に背を向けて、静を伴つて駅の繁華街の道を進む。

「よかったの？ 今の子、彼女？」

「いや、クラスメートだよ」

静は、ふーんと、どこか腑に落ちない顔をしている。先日はお下げにしていた髪を、今日は下ろしている。サイドの髪は後ろで一つにして、バレッタでとめていた。髪型を変えただけでも、ずいぶんと印象が変わる。それに明るい色の洋服を着ているだけで、ずいぶんと垢ぬけて見えるのだ。

「似合うね」

「え？」

「その格好。見たときびっくりしたよ。可愛くなつてて」

淡々と、表情すら動かさずに光は言ったが、静は恥じらうように目を伏せた。

「ありがとう。春名君、いつもそういうこと真顔でいうの？」

どういう意味が分からず、光は黙った。光は小さい頃から、育ての母に、女の子が普段と違う格好や髪形をしていたら褒めなさいと教えられていた。それに、母自身も髪形を変えたときに気づかないとむくれてしまうのだ。そのため、女性の変化には敏感になっていた。

静は、どこか落ちつかなげに、視線をさまよわせた後、光の足元を見て口を開いた。

「私も、びっくりしたわ。足、悪いの？」

光は首肯した。以前、事故で足を負傷して以来、遠出をするときはいつも杖をついて歩いている。

「ああ、以前事故に遭つてね。それより、これからどうするんだ」

「あ、ああ、あの、この近くの喫茶店で待ち合わせしているの」

静に導かれながら、光は目的の喫茶店に向かった。

午前十一時を過ぎたころ。暇を持て余していた空は、実家である本屋の前で掃き掃除をしていた。近くにある惣菜屋からとても、いい匂いがこちらに漂ってくる。遠く、魚屋の大将の客引きの声や、小さな子供の鳴き声も聞こえる。自転車が、ベルを鳴らして、空の横を通り過ぎた。

いつも通りの、商店街の風景だ。

あらかた、掃き終えて店内に戻ろうとしたときである。空はどこからか名前を呼ばれた気がして、そちらに顔を向けた。

「いーたー。高橋ー」

そう声を上げたのは、少女だった。まだ結構な距離があるが、そ

の声は商店街中に響き渡るような大声であつた。

何事かと、店に前にいた客や、あちらこちらの店から店員が顔をのぞかせる。

「あ、朝倉？」

ようやく顔を認識した空の前に、ものすごい勢いで到着した朝倉は、空の首を絞めるかのごとく襟首を掴んだ。

「ちよつと、どういふことなのよ！ あの女誰！」

口調に合わせるように、襟首を掴んだ腕を動かすので、空の体は前後に大きく揺れる。

「ちよ、ちよ、朝倉。離せよ」

空は、堪らず朝倉の手を無理やり外させた。

「おまえ、なんだよ。いきなり」

睨みつけるように、朝倉を見ると、朝倉は怒りの形相を空に向けた。

「だから、あの女誰よ！」

「知らねーよ。女って誰だよ！」

大声に大声で返す空。

「それは、だつて。うう」

走ってきた勢いはどこへやら。朝倉は顔を歪ませた。

それに、慌てたのは空だ。片足を一步引いて、朝倉の前に手をかざす。

「な、泣くなよ。頼むから」

気づくと、いつの間にか、自分たちは注目の的だった。人垣ができつつある。様子を見に来たらしい、酒屋の店主と八百屋の店主から、ヤジが飛ぶ。

「おおおう、修羅場だな。空ちゃん」

「やるねー。空。いよつ、色男」

「やめろつーの。オッチャンたち、面白がつてんじゃねーよ」
そのヤジに怒鳴った空に、穏やかな声がかかる。

「空、店の前じゃなんだから、上がってもらいなさい」

声の方を見ると、声と同じ穏やかな表情の父がいた。

「ちよつとは落ち着いたかよ」

自室のドアを開けると、中にいた朝倉に声をかけた。空の手には母に渡された麦茶入りのコップが握られている。

「コレが、落ち着けるわけないでしょ！」

ものすごい剣幕で怒鳴られた。大変不本意である。小さな四足テーブルに麦茶の入ったコップを置く。それを朝倉は一気に飲み干した。その様子を、テーブルに肘をついて見ていた空は、朝倉に声をかける。

「つーか。何で俺が怒鳴られなきゃなんないわけ」

その言葉に、朝倉は虚をつかれた顔をした。

「何その顔」

一応突っ込んでおく。

「あー。ごめん。ちよつと動転しちゃって」

浅倉は落ち込む様に肩を落とす。

「んで、何。女って」

「そう、女なのよ。春名君が待ち合わせで女だったのよ」

言いきった朝倉に、空は変な顔をする。

「はあ？」

「違った。春名君の待ち合わせしてた子が女の子だったの。それも清楚系の。誰あの女。春名君のなんなの？ 彼女？ 冗談じゃないわ！」

思い切り机を叩く朝倉。手も痛いだろうに、その痛みを感じなくなるほど腹を立てているということか。

「え？ 光が女と待ち合わせ？」

昨日言っていた暇ではないという言葉が思い起こされる。彼女とデートがあるから暇ではないと、そう言う意味だったのだろうか。

何かム力つく。

「俺、あいつに彼女いたなんて初耳なんだけど」

剥れた様な空に、朝倉は眉を寄せた。

「何それ。高橋は春名君と仲良いくせに知らないの？」

「別に、何でもかんでも知ってるわけじゃねーよ。あいつ、何考え
てつか分かんねーとこあるし」

昨日だってせっかく海と仲直りしろと勧めたのに、ヘンな理屈を
こねて相手にしなかった。

「高橋も知らないのか」。もう、最低。春名君は私のものなのにー。
春名君ー」

「いや、光は朝倉のモノでは絶対ないから」

突っ込みを入れたとき、空は朝倉の鞆から音が漏れていることに
気付いた。

「おい、朝倉。ケータイ鳴ってねえ？」

朝倉はその言葉に、鞆に目を向けた。そして、驚愕したように力
バンをひつつかんで携帯電話を取り出す。

「やばい、友達と待ち合わせしてたんだった。ごめん高橋、行くわ」
言いながら、朝倉は部屋を飛び出した。

「嵐のような奴だな」

半ば呆然と空は朝倉を見送った。

第十二章 二人の言い分

あの日、彼女が来なければ。

きつと、今頃こんなことにはならなかった。

あの日、自分があの場所へ行かなければ。

きつと、彼女は死ななかった。

それを知っている誰かが、いる。

それを知っている誰かが。

案内された喫茶店は、少し空調がききすぎていた。暑い外から来たからそう思うのかもしれないが。

店員が注文の品をすべて持って来たのは、静がちょうど待ち合わせしていた二人の紹介を終えたところだった。

「なーんかアタシ、最近ついてるなあ」

満面の笑みを浮かべ、静に川崎杏奈と紹介された少女がそう言った。意味ありげな視線を投げてくる。光はその視線に気づかないふりをして、杏奈の隣で落ちつかかなげに座っている石井睦子を見た。

日焼けした肌が健康そうに見えるが、表情がやけに硬い。二人とも、どちらかというと派手な格好だ。おとなしいタイプの静とは縁がなさそうに見える。まあ、学校は制服であるし、見た目の違いは関係ないのかもしれないが。タイプというのは大体において、似て来るものではないのだろうか、光は首をかしげた。

本当はもう一人誘ったそうなのだが、今日は別の予定があるということで、ここに来ることは出来なかったらしい。

「いいなあ、シズカ。カッコイイ」

「アンナ。ダメよ」

静が、短く窘めるような声を上げる。

「あ、大丈夫よー。シズカの彼氏とったりしないってー。アイツじやあるまいし」

「ちよつと、アンナやめな」

へらへらと手を振った杏奈に、睦子の鋭い声が飛んだ。

場が一気に静まる。光は、静の恋人として二人に紹介されていた。彼女がそう望んだからだ。静の狙いがどこにあるのかは分からないが、光にとってもそれは望ましいことだった。メールのことを調べていると言つて、下手に警戒されても困るからだ。もし、この二人の内どちらかが、あのメールに関わっているとしたら、上手く話を聞き出せない可能性がある。

「ごめんなさい、私、ちよつとお手洗いに」

沈んだ空気に、居づらくなったように、静が席を立った。これは予定内の行動だ。

光が、彼女に二人に会ったら一度席をはずしてほしいと頼んだのだ。静が席をはずすことで、静がいるときには出ない話が出るかもしれないと光は考えたのだ。もちろん、その考えを直接彼女に伝えはしなかったが。

手洗い場に向かう静の背を見送ったあと、杏奈が声を上げた。

「ねえ、ねえ。春名くん、春名君つて超イケメンだよ。いいなー静つてば。私もイケメンゲットしたいー」

睦子が杏奈に顔を向け、溜息をつく。

「アンナはイケメン好きだもんねー。ごめんね、春名くん。うるさくて」

「いや。それより、さっき言いかけてたアイツつて誰のこと？」

睦子と杏奈の顔を代わる代わる見ると、二人は困ったような顔をした。

「そんなこと聞いてどうすんのよ」

不機嫌な声を出す睦子に、光は眼鏡の奥の瞳を向ける。

「気になって。さっきの言い方じゃ、誰かに彼氏を取られたみたいだったから。興味本位だよ。教えてくれないかな」

じつと、光は睦子を見つめた。しばらく見つめてみると、耐えきれなくなっただのか、頬を赤く染めて俯いてしまった。

「ムツコー。なーに、赤くなってんのよお」

変な笑いをしながら、杏奈は睦子を肘でつついた。

「別に、赤くなんてなってないわよ。それより、春名くん。アイツ……のことよね」

睦子はまだ赤い顔を一度振ってそう言った。

「教えてくれる？」

尋ねると、杏奈が大きく頷いた。

「アイツっていうのはー。アタシらの中学んときのダチなんだ。シズ力がアタシらに彼氏紹介してくれたのね。そしたら、その彼氏がさ、エリに惚れちゃってー。シズ力ってば振られてんの」

杏奈は、爆笑している。

「へえ。取られたんじゃないくて、振られたんだ」

「そう。でも、シズ力はそう思ってたみたい」

と、睦子が口を挟んだ。どういう意味かと問い返せば、睦子は肩をすくめた。杏奈が代わりに答える。

「シズ力ってば、ああ見えてプライド高いんだよ。だから、エリが……、あ、エリっていうのが中学んときのダチの名前ね。エリがシズ力の彼を誘惑したんだって言ってたの」

「そうそう。シズ力ってお嬢だからさ。セレブよセレブ。男を金と顔でしか選んでないの」

杏奈と睦子は顔を見合わせると、ねーと声を揃えた。

「その点、春名くんは合格だよー」

にこにこ笑う杏奈に、曖昧に返事をして、光は少し考える。

エリという名前には、聞き覚えがある。あの、自殺した少女の名前が桜田絵里だったはずだ。

「その彼氏はエリって子と付き合った？」

光はゆっくりと、眼鏡を人差し指で押し上げた。杏奈は笑いながら手を左右に振る。

「まつさかあ。だって、エリそのあとすぐ死んじゃつ……」

「ちよつと、アンナ。喋りすぎ」

慌てたように、睦子が杏奈の言葉を遮った。

やはり、そうだったか。光は杏奈の言うエリが、亡くなった桜田絵里だと確信した。空の言っていた、エリを虐めた理由が、この辺りにあるのかもしれない。

「ごめん。ムツコは本当におこりっぱいんだからー。ねえ、春名くん。シズカに飽きたらあ、私と付きあつてね」

笑顔全開で、杏奈が甘えた声を出した。光は返事に詰まる。なんと答えようかと思っていると、睦子が声を上げた。

「まったー。アンナはすぐこれだ」

「えへへ。でも、ムツコだってカッコいいって思うでしょ。ムツコ、彼と別れたばかりなんだから、ムツコもお願ひしときなよあ。もちろんアタシの次だけど」

「しないわよ。アンナじゃないんだから。アタシは別れてせいせいしてるんだもん。しばらくは独り身でいいの。だから、春名君。気にしないでね。シズカあ見えてお嬢気質なところあるから、疲れるかもだけどさ。末永くよろしくしてやって」

光は少なからず驚いて、睦子を見つめた。睦子はきまり悪そうに、光から視線を逸らす。

「君たちは本当に友達なんだね」

睦子は眉を顰めて光に目を向けた。

「何それ、どういう意味？」

「あはは、分かる。シズカってば、見た目大人しいからさ。ぱつと見アタシらとタイプ違うじゃん。だから、友達っぽく見えないんだよね」

杏奈はにこにこ笑顔で光に向ける。

「いや、まあ。そうだな」

「うっわ素直に認めたよ。この人」

苦笑交じりに睦子が杏奈を見る。杏奈は口の端を上げた。

「まあ。そう見えちゃうのも仕方ないかなー。シズカって金払い良いんだよねー、お嬢だから。よくおごってもらってるもん。あ、だからと言って財布代わりにしたわけじゃないよ。嫌な奴なら、お金積まれたって一緒にいないもん。ね、ムッコ」

「うん。あ、シズカが戻ってきた」

その言葉に反応するように、杏奈が手を振る。振りかえると、確かに静がこちらに向かって歩いてくるところだった。

戻ってきた静は、先ほどと同じように光の隣の席に着いた。

「何の話してたの？」

「いや、春名君かつこいいからさー。シズカに飽きたらアタシんとかおいでって言うってたのー」

「もー。アンナはすぐそれだ」

そう言って、笑いあう女たち。光は疲れた気分で、壁に視線を向けた。

その時である。携帯電話の着信音が聞こえてきた。静と睦子の鞆の中から、音が漏れている。テーブルの上に置いた杏奈の携帯電話が、バイブレーションに合わせて音と光を放出していた。すぐに音が途切れたところを見ると、メールだったのだろう。

笑いが一気におさまる。それぞれの視線が自身の携帯電話のある位置に向かう。

「見ないの？」

問うが誰一人として、見ようとはしない。

「静、見せて」

光は、静に片手を差し出す。彼女は、我に返ったように鞆に手を伸ばした。携帯電話を取り出すと、メールを開いてから光に手渡す。

『どうして、無視するの？ どうして？ あんなに、仲よくしてたのに。私が何をしたっていうの？ ひどい、ひどいよ。どうして、私を殺したの？ ひどいひどいひどいひどいひどいひどいひどい…』

…』

ひどいという言葉が画面を埋め尽くす。スクロールを途中でとめて、光は静に目を向けた。

「何、このメール？」

静の言っていた、死人からのメールだということはすぐに分かったが、光は敢えてそう尋ねた。静は、光に差し出された携帯電話を手取る。文面を読んで、心無し青ざめた顔を光に向けた。

「心当たりがある？」

静は、光から顔を逸らし俯いてしまった。その前で、恐る恐るといった体で、携帯電話を開いた睦子は、悲鳴のような声をあげて携帯電話をテーブルに放り投げた。

「もう、嫌。これきつと呪いよ、呪いなよ。エリの呪い！ そのうちアタシたち殺されるのよ」

頭を抱えて、机に突っ伏す睦子の肩に、杏奈が心配そうに手を置いた。

光は嘆息すると、注文していたアイスティーをすべて飲み干した。「お茶も飲み終わったし、石井さんが落ち着いたら場所変えて話しよう。いいよね、静、川崎さん」

尋ねると、静と杏奈はゆっくりと頷いた。

第十三章 いい加減にしるよ

お焼香を終えた人々が、彼に声をかけていく。しかし、彼にその言葉が届くことはなかった。

ただ、彼女ともう逢えないのだということが、彼の頭を占めていた。

彼女の明るい笑顔や楽しげな笑い声も、見聞きしてきたはずなのに。

何一つ思い出せない。

いま思い出せるのは、宙に浮いた彼女の足が力なく揺れる様。

自殺した彼女を発見したのは彼だった。

どうしてあの日、早く帰らなかったのか。早く帰ってきてと言われていたのに。なぜ、早く帰らなかったのか。なぜ、どうしてと。

後悔ばかりが、彼を苛んだ。

それは数年たった今でも、彼を蝕み続けている。

落ち着いたかと尋ねた光に、杏奈は頷いた。喫茶店から一番近いということ、今は静の家に場所を移していた。

光の家と変わらぬほどの大きな邸である。大きなテーブルが真ん中に鎮座している。壁に掛けられた絵画は名のある画家が描いたものだ。壁際に置かれた棚には大きな壺が乗っている。こちらも高価そうだが、洋室であるこの部屋には不似合いだ。

ずいぶん成金趣味だな。この部屋に入った光の第一印象がそれだった。

テーブルを挟んで向かい合わせに置かれた大きなソファーに、彼は座っていた。ちょうど杏奈の正面の位置だ。

光の隣には静が、杏奈の隣には睦子が座っている。

「ゴメン。ちよつとさ、最近、メールの内容がこんなものになってきてブルー入ってたんだ。店で大声出してゴメン」

睦子は顔の前で手を合わせた。

「いーよー。気持ち分かるし」

「そうよ、ムツコ、気にしないで」

女性陣が睦子に口々に声をかける。光はそれを黙って聞いたあと、ゆっくりと口を開いた。

「ところで、石井さん。さっき言ってた呪いってどういう意味？」

単刀直入に聞いた光に、三人の視線が集中した。最初に口を開いたのは睦子だった。

「アタシ黙ってたんだけど、実は最近さ、どうにも誰かにあとつけられてる気がして。それが、もしかしたらエリなんじゃないかなあって思うときがあつて」

「なにそれ。超怖いんだけどー。そう言えば、私もそんな気がしなくもない時もあつたけど」

杏奈が声をあげた。結局どっちなんだと言いたくなる。静の方をそつと見ると、静は難しい顔で、立てた親指の爪を噛んでいた。

「静も、同じ目に？」

「え？ いいえ。私は……」

抑えた声を漏らす静。光は内心嘆息した。メールだけではなかったのか。否、嫌がらせのようなあのメールのせいで、彼女たちの神経が過敏になってるだけかも知れない。

「必要以上には怖がらなくていいと思うけど、でも気をつけた方がいいな。夜遅く出歩くのを避けたり、どうしても気になるようなら警察へ……」

行ったらどうかと続けようとしたが、それを遮るように、睦子が声をあげた。

「行けるわけじゃないじゃない！ 警察なんて！」

叩きつけるような言い方に、全員が睦子に目を向ける。

睦子は我に返ったように、目を見開いた。そして、そそくさと立

ち上がる。

「ゴメン、アタシ帰る」

「ちよつと、ムツコ」。ムツコが帰るならアタシも帰る」

すでにドアノブを掴んでいる睦子の背に声をかけ、杏奈も立ち上がる。せわしなく光たちに手を振って、睦子に続いて部屋を出て行った。

「彼女たち、どうしたんだろうな」

光が静に声をかけると、静は首を横に振った。

「さあ、私には分からないわ」

静から、抑揚のない声が返ってきた。

伊藤家を後にした光は、タクシーを拾った。

途中、病院に寄ったので思ったよりも帰宅が遅くなってしまった。光は腕時計に視線を落とす。針は六時半を示していた。この時間では、家政婦はもう家へ帰っているだろう。

誰もいないと分かっているが、鍵を開けて家の中に入るとただいまと声をかけた。

もちろん、返事はない。薄暗い家の中へ上がると、光は二階にある自室のドアを開けた。

「あ、お帰りー」

思いがけず声がかかって、光は珍しく呆けた顔をした。口を大きく開けて、部屋にいた人物を凝視する。

「な、何してるんだ。ここで」

「何って、おまえを待ってたんじゃない」

あっけらかんと、空が笑った。

光は頭が痛くなるような思いで、壁に寄り掛かる。

「坂内さんがさー、光居ないって言うから部屋にあがらせてもらってたんだ。今日はアイスクーキつつつのをごちそうになった。んまか

ったぞー。おまえんち、いつもお菓子あるから好き」

幸せそうにそう報告する空に、力が抜ける思いがする。坂内さんまで手なずけたか。光は内心苦笑した。

坂内さんとは、この家の家政婦をしてもらっている女性である。誰に対しても屈託なく接する空は、誰にでも大抵好意的に迎えらるようだ。

光はゆつくりと歩いて、床に座った空の前に腰を下ろした。片膝を立て、痛む足は伸ばす。

「おまえさー、あいつどうにかしろよ」

空は唐突に顔を顰めた。よくころころと表情を変えるものだと感じする。

「あいつとは？」

簡潔に疑問を口にすると、空の表情がより苦々しいものになった。

「あいつだよ。朝倉。朝倉の奴、俺んとこ怒鳴りこんできたんだぜ」
怒ったように空は胸の前で腕を組んだ。

「怒鳴りこんできたとは、穏やかじゃないな」

「だろ。しかもあいつなんて言ったと思う？ あの子誰！ って言いやがったんだぜ、人前で、俺に」

自身を指さす空。光は眼鏡の奥で瞬きを繰り返した。

「おまえたち、そういう関係だったのか」

その発言に、空は大声で答えた。

「お前まで言うか、ちつくしよー朝倉の奴、恨むからな」

頭を抱える空の前で、光は眉を寄せている。

「光、朝倉と会ったんだろ。朝」

聞かれて頷いた。確かに静と待ち合わせしていた噴水広場で会っている。

「けど、朝倉は友達と待ち合わせしていると言ってたけど」

「あいつ、忘れてたみたいだぜ。お前が女と待ち合わせしてたことがよっぽどシヨックだったんじゃない？ 俺にあの女誰って聞いただしに来たんだよ」

「へえ」

「としか言いようがなかったのだが、空は不満だったようだ。むつつりと頬を膨らませた。」

「へえ、じゃ、ねえよ！ おかげで俺、二股かけたことが女にばれた男ってことになったんだぜ、近所で」

「空は、怒鳴った勢いのまま床を叩く。」

「空が、二股かける男？ ありえないだろ」

「だろだろ。なのに、そう思われちゃってんの。親までさ、空に彼女ができたつつって、喜んじゃって。二股は俺がやるわけないって思ってるみたいだけど。母さんなんか赤飯炊きそんな勢いでさ」

「それはまた……」

「光は緩みそうになる口元を押さえた。結構、大事になっているらしい。はたから聞いていれば、面白いのだが、本人にしてみれば迷惑な話だろう。」

「だから、面倒臭くなって、逃げてきた」

「は？」

「今日泊めて？」

「空は可愛く小首を傾げた。そんな仕草を見ると、本当に女の子のようだ。そう思ったことは伏せておいて、光は無表情で応じた。」

「何でそうなるんだ」

「ほら、ちゃんとお泊りセットも用意してきたしさ」

「ポンポンと傍らに置いてあった、少し大きめの鞆を叩く空。光は脱力した。答えになっていない。」

「坂内さんも、俺の分のゴハン用意してくれたしさー」

「いいだろ？ と聞いてくる空。」

「坂内さんが？」

「少し驚いてそう漏らした光に、彼は頷いた。」

「そう。来たときちょうどみさきさんが帰ってきててさ、すぐ出たけど、坂内さんに俺のこと頼んでってくれたんだよ」

「光は溜息をついた。まったく、女性陣は空に甘い。ちなみに、み

さきさんとは、光の母親だ。

「分かったよ。泊っていけば」

「何その投げやりな感じ」

少し不服そうな空だったが、すぐに気を取り直したように笑顔になった。

何かを思いついたのかもしれない。

「ま、いつか。ってことで飯食おうぜ。腹減った」

どこまでも平和そうな空の顔を見ていると、肩の力が抜ける。

光は、夕食を取る気がなかったのだが、仕方なく空につきあうことにした。

第十四章 実家へ行く前に

ケータイサイトで見つけた日雇いのバイトを終えて家に帰った海は、早速、皿洗いをさせられていた。むろん、母親の命令である。紫藤家では女性が優位なのだ。医者をしている父親は寡黙で、いつも母親が一方的に喋っている。

海自身は外で夕食を済ませてきたので、今洗っているのは両親の使った皿というわけだ。

「海。話があるんよ」

母親が、背後から話しかけてきた。それに振り向くことはせず、答える。

「何？」

手は規則正しく、蛇口から流れる水で皿を濯いでいる。

「今度の、お墓参りやけど……母さんたち、仕事で出なあかんのよ。だから、日をずらして……」

海は水を止めて、母親を振り返った。皿洗い終了だ。

「いいって。俺一人で行ってくるわ。俺の問題やし、おばさんに付き合ってもらわんでもええよ」

海は目を伏せるようにしながら、口元だけで笑顔を作った。

「でもなあ。こっからやと遠いし、あんた行き道分かるんか？」

「あのなあ、おばさん。俺をいくつやと思ってるねん。遠いって、こっから三駅くらいしかないやん。関西に住んでる頃に比べたらぐつと近いやんか。それに、おじさんに行き道聞いたらいけるって」

海の言うおじさんとは、今の父親のことで、おばさんとは今目の前にいる女性だ。外では便宜上、今の両親を『父さん』、『母さん』もしくは、『おとん』『おかん』と呼んでいるが、面と向かってそう呼んだことはなかった。いつも『おじさん』、『おばさん』だ。

「はん、生意気なこと。ついこの間までビービー泣いってたくせに」

「いつまでも昔の話ばかりして。年取った証拠やで」

減らず口を叩く海の頬を、近づいてきた母親が容赦なく捻った。

「痛へへへ」

「そんなことをいう口はこの口か」

「ご、ごめんなさひ」

「よろしい」

素直に謝ると、あっさりと手を離れた。痛む頬をさすって恨みがましく母親を見る海に、彼女は表情を引き締めて声をかけた。

「あんた、最近イライラしてるやる。やっぱり、あのことが原因か？ 前から思ってたんやけど、あんた毎年この時期になると情緒不安定になってる気がするんよ」

海は一瞬言葉に詰まる。一度顔を伏せた後、母親に目を合わせた。柔らかな笑顔をつくる。

「気のせいやる。さ、洗いもんも終わったし、風呂入るわ」

そう言って、母親の横をすり抜けた。母親から見えない位置にくると、海の顔から表情が消えた。

目を覚ますと、すぐ目の前に人の顔があって、空は悲鳴のような声をあげた。

「ぎゃー、おばけ！」

そう叫んだのは、横にあった顔が妙に綺麗だったから。

腰を浮かせて、身を引いたら浮遊感に見舞われた。

落ちる。

思わず目を瞑ったところで、腕を掴まれた感触とともに、身体が引き戻される。心臓が煩い。

「朝から、何やってんだよ。っていうか、誰がおばけだ」
疲れた声が耳に届く。

うつすらと目を開けると、光が空を見上げていた。

混乱する頭で周りを見回して、ここが光の部屋であること、そして何故か、同じベッドで眠っていたことを知る。横になってこちらを見上げている光の手が、空の腕を掴んでいた。

「な、なんで俺たち一緒に寝てるの？」

腕を掴まれたままゆっくりと背後を振り返る。ベッド脇の床に、布団が敷いてあるのが見える。昨夜、自分で敷いてその上に寝ていたはずなのだが。

「おまえが……」

「え？」

光の声に思わず、目線を下げた。いまだ横になって、空を見上げている光の顔はいつにも増して不機嫌そうだ。

「おまえ、途中でトイレいっただろう。部屋帰ってきたと思ったら、寝ぼけてこっちに入ってきたんだよ」

「お、起こしてくれればよかった……あーゴメン」

よかったのにと続けられなかったのは、自分が一度眠りに落ちたらちよつとやさつとじゃ起きないと知っているからだ。

ベッドが少し、軋む。光が半身を起した音だ。

「僕が下で寝ようと思ったけど、おまえ僕の服掴んで身動きとれなかったし」

「だから、ゴメンって」

「別に謝ってもらうことじゃないよ」

空は目をぱちくりした。

「あ、そう？」

なんとなく今の発言に驚いて、気の抜けた声が出た。

「行くんだろ、今日」

「へ？ どこに？」

唐突な言葉に、思考回路がうまく働かなかった。寝起きでもしっかりと思考回路が働いているであろう光の顔に、バカと書いてある気がした。それも大きく。

「悪かったな」

「まだ何も言っていないだろ」

「どうせ、今バカって思ったくせに」

そういうと、光がかすかに驚いたように眉をあげた。ほんの少しの表情の違いが分かるようになってきたのが不思議だ。

「少しは賢くなってきたじゃないか」

「うるせー」

大いに？れて空はそっぽを向く。

「で、行くんだろ？ 亡くなった子の実家に。いいのか？ ゆっくりしてて。もう、十時過ぎてるけど」

言われて、壁掛け時計に目をやると、確かに十時を五分ほど過ぎている。ずいぶん寝坊してしまったようだ。これも夏休みの特権である。

「大丈夫。夕方、えっと、三時に待ち合わせだから」

「そうか、なら、それまで図書館付き合ってくれ」

「え。勉強は嫌だぞ」

そういうと、光がふっと笑みを漏らした。微かな、口元だけの笑みだったが、久しぶりに見た気がする。

「勉強じゃない。ちよっと調べたいことがあるんだ」

そう言った光の顔は、もういつものポーカーフェイスに戻っていた。

朝食兼昼食を食べ終えたあと、光と空はそろって図書館に来ていた。

あいた席に腰を落ち着けると、光はふらりとどこかへ行つて、古い新聞紙を手に戻ってきた。何を調べるのかと問うても、ろくな返事が返ってこない。何かに没頭するといつもこうなる。

暇つぶしにマンガでも取りに行こうかと、空が考えていたとき、光が小さく声をあげた。

「あつた。これだ」

「何？」

空は横から、光の指さす記事に目を落とした。

『廃病院の屋上から転落か？』

と、見出しのついた小さな記事だった。

「これって、もしかして」

「そう、桜田絵里の記事だ」

頷く光の前から新聞を引っ張って、自分の前に置くと記事に目を通す。

『二十日午後六時ごろ、美晴市美晴町の廃病院の敷地内で、近くに住む桜田絵里さん（十四）が、頭から血を流し死亡しているのを、肝試しに来た大学生が発見した。』

美晴署によると、現場は廃病院の裏庭。絵里さんは、この建物の屋上からなんらかの理由で落ちたものとみられる。同署は自殺と事故の両面で調べを進めている』

「へー、最初から自殺だったって分かったわけじゃなかったんだな」

「ああ、そうみたいだ」

光は、かけていた眼鏡をはずすと眉間を指でもんだ。空は、首をかしげる。

「あれ？ でも、何で光が桜田さんのこと調べてるんだよ」

光は空から目を背けた。

「ちよつと、気になって」

「ふーん。何だかんだ言つて、やっぱり気になるんだ。へー」

からかい調子で、光の顔を覗き込むと、顔を手で押しやられた。

その手ははずさせて、また覗き込む。

「んだよ、照れてんの」

「おまえウザい」

「うおっほん」

背後から、咳払いが聞こえて、空と光は動きを止めた。どうやら、知らず知らずのうちに声が大きくなっていったらしい。

光は外した眼鏡をかけなおしたあと、腕時計に目をやった。

「いいの？ そろそろ二時半になるけど」

海たちとの待ち合わせ場所へ行くにはそろそろ出ないといけない時間だ。

「やべっ。俺行くわ」

そう言って立ち上がった空の腕を、光が掴んだ。

「空、覚えてるか？ この前僕が電話で言った質問。忘れずにしてこいよ」

空は口を開け、光を凝視した。

「えっと、何だっけ」

光は思いつきり溜息をついた。

それに、文句を言う前に、光は質問内容を空に伝えた。

第十四章 実家へ行く前に（後書き）

こんにちは。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

いかがでしたでしょうか。

久々に海が登場いたしました。今回は初めて、海の家族が登場しました。

そして、空と光も初体験しております。こんな書き方すると妙な感じですね。

次回もまた火曜日に更新予定です。

実は昨日、三兄弟の番外編的な位置づけになるコラボ小説をUPしております。

伽砂杜ともみ先生作の時間シリーズと三兄弟とのコラボです。

『かさなる時間』

<http://ncode.syosetu.com/n1231m/>

約27分の短編です。

舞台は、三兄弟の通う清秀高校の文化祭です。

三人が、走ったり、テンション上げたり、女装したりしております（笑）

事件のからまない三兄弟をかけたのは楽しかったです。
こちらと合わせて、お気軽にご覧いただければ幸いです。

それでは皆様。

また、お会いできることを願って。

愛田美月でした。

第十五章 実家へ行く

どうして、あなたは死んでしまったのだろう。

どうして。

どうして。

どうして？

待ち合わせ場所に着くと、海と由香は先に来ていた。

待ち合わせ時間の五分前だったが、なんとなく申し訳ない気持ちになる。

三人そろって待ち合わせ場所から、由香の案内に従って住宅街を進んだ。

「あ、ここよ」

そう言って立ち止った由香の視線の先には、一戸建ての住宅があった。こじんまりとした二階建ての家だ。

もとは白かったであろう壁は少し黄ばんで、この家の古さを感じた。よく見れば、ひびを修復した後もある。

表札には、桜田とあった。

由香が代表してチャイムを押すと、ほどなくして中から中年の女性が現れた。

彼女が桜田絵里の母親だろう。

「いらっしやい。よく来てくれたわね。由香ちゃん。それとお友達もはじめまして。さ、中へ入って」

存外明るく出迎えてくれた。もっと、暗い雰囲気、やつれた女性が出てくるものと思っていた空の予想は外れた。

彼女は、太っているとまではいれないが健康そうな体型で、笑顔

の中にも活力があふれているように見える。こう言っでは失礼かもしれないが、とても子どもを一人亡くした母親には見えなかった。

家に入ると、まず始めに、仏壇に手を合わせた。仏壇の横にある棚には少女の写真が飾られている。可愛らしい、元気な笑顔。これが、桜田絵里か。空と同じ年のこの少女は、もうすでにこの世にいないのだ。

手を合わせた後、仏壇のある部屋から隣に移った。その部屋は、居間として使われているであろう、和室だった。

小さめの四足テーブルの前にあぐらをかいて、空と海は並んで座る。その前に緑茶の入った湯呑を置き、女性が海の正面に座った。由香はその隣だ。

「今日はありがとうね。由香ちゃん。それと君たちも」

柔らかな笑顔とともに、絵里の母親は口を開いた。空と海はそれぞれ軽く頭を下げた。

「今日は、三人で押しかけてすみませんでした。君島さんが今日行くって聞いたんで、一緒にと行って」

敬語を使うときの海は関西弁ではなくなる。以前も聞いたことがあったが、妙な違和感がある。

「ええ、どうもありがとうね。生前、仲よくしてくださってたんだって？ 来ていただけて絵里も喜んでるわ」

そう言っ、絵里の母親は襖の方へ目をやった。襖の向こうには仏壇がある。

由香はどうやら、空と海のことを、同じ中学校の友達だと話していたらしい。嘘をついていることに罪悪感を覚えるが、この場合仕方ないだろう。

「今日、由香ちゃんに来てもらったのはね、形見分けをしようと思っ」

絵里の母親は少し、寂しそうにほほ笑んだ。由香は驚いたように目を見張った。

「え？ 形見分けって」

「もうすぐ、引っ越すのよ。……実は、再婚することになって」

この告白に、空たちはかなり驚いた。

「すっげ、おめでとうございます！」

「ありがとう」

空の言葉に、絵里の母親は幸せそうに頷いた。由香もお祝いの言葉を述べる。初対面での彼女の印象が明るかったのは、娘の死を乗り越え、前を見据えていたからだろうか。

「それでね、一からやり直す意味で、絵里の持ち物を少しだけ残して、後は処分することにしたの。だから、絵里の物で使えるものがあつたら、何でも持って行っていいから。見てくれる？」

由香はおとなしく頷いた。視線を受けた空たちも頷く。

「あ、そうだ。おばさん。桜田さ……絵里さんって、日記書いてました？」

空は思い出したように声をあげた。女性は面食らったように空を見る。由香や海も同様だ。唐突だっただろうか。だが、聞かなければならなかったのだ。

「ええ、書いてたわよ。あの子の父親が教師でね。日記は自己を見つめることに役立つとか言って、毎年誕生日に日記帳をプレゼントしてたけど。でも、それがどうかした？」

尋ね返されて、空は慌てたように声をあげた。

「え？ ええつと、あの、そう。どうしても思い出せないことがあって、それで、絵里さんが日記に書いてないかなーと思って」

「そーらー、お前慌てすぎやな。何やその思い出せないことって、恥ずかしいことなんか？」

空が嘘ついていることを知っているはずの海が、にやにやと笑いながら空の肩に手を置いた。

「べ、別にそんなじゃねーよ」

海の手をはずさせて、大きな声をあげた空の反応がどう映ったのか。絵里の母は目を細めて空たちを見る。

「ふふふ。あなたたち仲いいのね。楽しいお友達がいて、絵里も幸せね」

「え、いや。そんな」

嘘をついていることが、胸に痛い。

「あ、あの、おばさん。日記で思い出したんですけど、私たち、交換日記してて。それ、あつたぜひもらいたいんですけど」

由香の遠慮がちな声に、彼女は笑顔を向けた。

「あら、ごめんなさいね。日記はここにはないのよ。間が悪かったわね。先月だったかしら、あの子の父親が持っていたから。たぶん交換日記も彼の持つて行った日記に交じってるのじゃないかしら……何なら、見せてもらえるように話をつけるわよ。由香ちゃんたちなら、絵里も日記見せたって怒らないでしょうし、交換日記も探せるでしょう」

どうする？ と、聞かれて真っ先に返事をしたのは、海だった。

「ぜひ、見たいです。お願いします」

海の言葉に頷いて、絵里の母は立ち上がると、三人を連れて二階に上がった。

二階奥の部屋が絵里の部屋だった。クーラーのきいていない部屋はとても暑い。窓は開いているが、カーテンは動いていない。風が吹いたところで熱い風が入ってくるだけだろうが。

狭い部屋には、壁に沿うようにベッドや机、そして本棚が置いている。ベッドカバーはピンク地に苺柄の女の子らしいものだった。机の上には黒い鞆が置いてある。学校指定の鞆だろう。中に教科書が入っているのが少し見える。

部屋は毎日掃除されているのだろう。目立った埃はなかった。まるで今も、この部屋の主が生きてここで生活しているかのようだ。「好きに見ていいから。あの人には、私から時間作ってもらうように連絡するわ」

そう言つて、絵里の母は部屋を出て行つた。

「嘘、ついちゃった」

静かな口調で、由香が呟いた。部屋の中を見回していた海が、声につられるようにそちらへ視線を向ける。

「嘘？ 何が嘘なん？」

「交換日記。交換日記は私が持つてる」

「え？ そうなの」

空が大声をあげた。海が慌てて口をふさぐ。

「むがつ。何すんだよ」

海の手をどけて、睨む。海は両手を肩の高さほどに上げた。敵意がないことをアピールしたのだ。だが、注意は忘れない。

「空、声でかいっちゅうねん」

「悪かつたな！」

ふんつと？ れた空を見て、海は由香に肩をすくめてみせた。

由香は軽く笑みを口元に上らせる。だがすぐさまその笑顔は消えた。

「私が、絵里の物、もらう資格なんてないのに」

「君島さん」

由香は、ゆっくりと机に近づき、机の上に乗っている鞆に手をやった。それを悲しげな、それでいて懐かしむような顔で撫でる。

そんな様子を見つめていた海は、一つ首を振ると空に向き直った。

「空、さっき何でいきなり日記なんて言いだしたんや？」

「え？ さあ」

と、首を傾げる空。海は呆れたように口を開けた。

「さあつて、お前が自分で聞いたんちゃうん」

「ああ、まあ。そうなんだけどさ。聞けって言われたから」

「誰に？」

空は明らかに動揺した様子で、海から顔を背けた。そして、口笛を吹きだす。

訝しむように眉を寄せた海の横で、由香が声を上げた。

「あ。これ……」

由香が持ち上げたのは、鞆の下に挟まれていた布製の筆箱だった。
「これ、私が誕生日にエリにあげたの。学校では使ってなかったのに、家で使ってくれてたんだ……」

掴んだ筆箱を胸に抱いて、由香は肩を震わせた。
泣いているようだ。

空は頭を掻いた。海と目を合わせる。

そんな三人の背後から、部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。振り向くと、絵里の母親がドアを開けたところだった。

「どう？ 持って帰れそうな物ありそう？」

「はい、これいただいていきます」

由香の言葉にそちらを向けば、目元をぬぐって笑顔を見せる由香が目映る。

「あ、そうや。おばさん。絵里さんのケータイって今どうなってます？」

海が今日の目的だった携帯電話の話に向ける。絵里の母親は不思議そうな顔で小首を傾げた。

「ケータイ？ あの子、ケータイはもってなかったわよ」

「え？ そんなことないです。エリはちゃんと持ってたわ。私とおそろいの苺のストラップ付けてたもの」

由香の言葉に、なおも首を横に振った。

「いいえ。そんなお金もないし、あの子にはケータイなんて持たせてないわよ。誰かと間違えてるんじゃない？」

空は海と目を合わせた。

彼女が嘘をついているようには見えない。

だが、そんなはずはないのだ。

桜田絵里が携帯電話を持っていたのは、由香だけでなく、杏奈たちも見ている。

「そうですか」

そう言いはしたものの、すっかりしない想いが三人を支配するの

だった。

桜田絵里の家を出た空と海は、用事があるという由香と別れ、駅へ向かっていた。このまま、桜田絵里の父親に会いに行こうということになったのだ。

「そーらー。何か隠してるやろ」

横を歩く海が何気ない口調で問う。空は、顔をゆっくりと海と反対の方向へ向ける。

「な、何のことかなー」

一歩二歩三歩。そしてもう一歩。無言のまま進む足。

空は、一度大きく息を吐きだして海を見た。

「なあ、いつ光と仲直りするんの？」

無言のまま、海の足は進む。

空は立ち止って、遠ざかる海の背を見つめる。二メートルほど歩いた後、海が振り返った。

「空？」

「なあ、いつ、光と仲直りするんだよ」

大股で、空は海の前になると、挑むような目を向ける。

「何で、仲直りする必要があるんや。あいつ、何も言うてこうへんし、俺のことなんてあいつは何とも思ってたへんのやろ」

「そんなことねーよ。仲直りする気はあるんだろって聞いたら、まあって言うってたし、それに日記のことだって……」

「日記？ さっき、おばさんにしてた質問、光に言われて聞いたんか？ でも何で光がそんなこと。空が相談したんか？ 光に」

眉を潜めて問いだす海に、空は頷く。

「う、うん。ん？ 相談はしてねーよ。意味分かんねーけど。聞いてこいて」

「何であいつが、関係ないやろ？」

「そりゃ、やっぱりお前のが心配だからじゃねーの？ 気になるのかって聞いたら照れてたし」

その情景を思い出したのか、ひひひ、と妙な笑いを口に上らせる空。

海はふーんと言つて、しばらく黙った。

「でも何で日記なんだろうなー。光に聞いても自分で考えろつつて教えてくんねーんだよ」

歩き出しながらそう聞いた空に、海は答えを出した。

「そりゃ、あれやろ。もし、家族の誰かが桜田絵里の名前を騙ってメールを送るにしても、あれだけ詳細な内容をかけると思つか？」

空は一度、口元に拳をあてて考えた後、首を横に振った。

「いや、思わねーな。例え生前、話をしてたとしても、誰と誰が買ったストラップがどのとか、はつきり覚えてねーと思う」

「そうやろ。でも、日記があつたらどうや？ 日記を見れば、詳細なメールを送ることもできるって訳や」

なるほどねーと、空は顎に手をやって感心するように頷いた。

「じゃあ、やっぱり怪しいのは、その日記を持つてる桜田絵里の父親ってとこだな」

「ああ。今から会えるわけやし、犯人やってばれたら、やめてくれるやろ。こんな嫌がらせ。これでやっと自殺がらみの事件ともおさらばできるわ」

海は万歳をするように両手を上げる。空は、海の前に回り込むと後ろ歩きしながら海の顔を覗き込むようにして笑顔を作った。

「んじゃ、おさらばできたら、光と仲直りしてくれよ」

「まだ言うか。しつこいなー空は」

「おう、俺はしつこいぜ」

威張る空に、海は苦笑する。

「威張っていうことやないやろ」

「へへっ」

この事件が終われば、きっと光と海の仲も元に戻ってくれるはず

だ。

光明が見えた気がして、空は密かに笑いを口元へ上らせた。

第十六章 思わぬ再会

二人が最寄りの駅に着いたのは、午後五時半頃だった。相手から五時半以降に来いという指定があったのだ。

桜田絵里の父親が住むというアパートに着いたのは、午後六時近くなってからだ。駅から五分とかからないと聞いていたのだが、目的のアパートが民家の入り組んだ場所にあり、三十分ほど道に迷ったのだ。

ずいぶんと古ぼけたアパートだった。外付けの階段はさびいて、所々塗装がはげている。足音高くその階段を上がった二人は、岸谷と表札の掛かった家のドアをノックした。インターホンを探したがみつからなかったのだ。

返事がないので、繰り返しノックする。

「はい」

中から低い声が聞こえたかと思ったら、ドアがゆっくりと開いた。ドアを開けたのは、中年の男性だった。絵里の父親なのだから、相応の年齢といったところか。学校の先生だと聞いていたから、もつとハキハキとした人が出てくるのかと思ったが、随分と陰気に見える。無精髭を生やした顔は表情が乏しい。

「あの、桜田絵里さんのお父さんですか？」

海が尋ねた。男は返事をしようと口を開いたようだが、言葉を発することはなかった。代わりに大きく目を見開く。

その表情に、訝しげな顔を見せた海だったが、ふと何かに気づいたようにこちらにも驚いた表情になる。

「もしかして、斎藤か？」

海を見つめて言う男に、空が違つと声を上げようとした。だが、その言葉を遮るように、海が口を開く。

「はい。今は斎藤やなくて、紫藤ですけど。……名前見たとき、ま

さかと思っただけど、やっぱり岸谷先生なんですね」

「そうか、紫藤か。そうだったな。それにしても大きくなったなあ」
破顔する男に、海も笑顔を見せる。何やら分かり合っている二人に、置いて行かれた気分で、空は海の肘をつついた。

「おい、どういふことだよ、海」

小声で聞くがあつさり無視された。

とにかく上がりなさいと、部屋に入るように促されて、二人はおじゃましますと口々に言いながら中へ入った。部屋のほぼ中央に置かれた、小さな丸テーブルの前に、二人は岸谷と対面するように座った。

「にしても、絵里の友達が来るって聞いてたんだがな。まさか男の子が来るとは思わなかったな」

最初に対面した時の暗い雰囲気はどこへやら、日に焼けた髭面に快活な笑顔を見せる。

「ああ、俺ら、まあ代理なんです。な、空」

「あ、そう。そうです」

不意に声をかけられ、空は慌てて男に向かって頷いてみせた。

「そうか。で、交換日記を探してたんだよな。君たちが来る前に一通り見たんだが、見つからなかったんだ。日記の束の中にも無かったよ。せっかく来てもらったのに悪いなあ」

頭を掻きながら、本当にすまなさそうに言う男に、空と海はいえいえと首を横に振る。

そもそも、交換日記は由香が持っているのだから、ここにあるはずがないのである。むしろ、あったなんて言われたらびっくりだ。

「あ、あの、その日記って、見せてもらったりできませんか」

空が尋ねると、岸谷の日に焼けた顔が少し困ったようになる。

「そうだな、申し訳ないけどね。日記というのは、自己を見つめる手段として書くものであって、人に見せるために書くものではないんだよ。だから、絵里の許可なしには見せることはできないな」

「はあ、そうですか」

はつきり拒否された。とても、残念だ。空は、心の中で舌打ちする。

「あ、そうそう。これも頼まれとったんですけど」
「ん？」

声に反応した岸谷が海をみると、海は笑顔を作った。

「絵里さん、ケータイ持ってたよね。それに、ストラップひとつたらしいんですけど。苺の形した、ストラップ。それ、貰えるならほしいって、君島さんが」

「君島さんというと、ユカちゃんか」

思い出すように言う岸谷に、海が頷く。

「会ったことあるんですか？ 君島さんに」

空が尋ねると、岸谷は首を横に振った。

「いや、絵里が生前仲のいい友達だって話してくれたんだよ。ちょっと待ってる。ケータイだな。持ってくるよ」

そう言っ、膝に手をついて立ち上がった男は、背後にあった押入れの襖をあけて、そこから段ボールを取り出した。こちらに背を向けたまま、段ボールの中を探っている。

「やっぱり、桜田絵里はケータイ持ってたんやな」

男に聞こえないように、海が空に耳打ちする。

「うん、お母さんは持ってないって言ってたのにな」

そこまで答えたとき、男がこちらを振り返った。

「あつたよ。これがケータイだ」

そう言っ、丸テーブルの上に置かれたのは、ピンク色の携帯電話だった。

「おばさんに聞いた時は、絵里さんケータイ持っていないって言ってましたよ」

何気ない風を装っ、海が告げると、岸谷は照れくさそうな笑顔をつくった。

「ああ、絵里にねだられてな。あいつには内緒で買ってやったんだよ」

空と海はなるほど頷いた。どうやら絵里は、母親にばれないよう上手くやっていたようだ。

携帯電話には、由香から別れ際に聞いたように、母のストラップがついていた。

「あ、これこれ、このストラップちゃうかな」

そう言つて、海がその携帯電話を手に取った。

「あ、開いて見てもいいですか？ 俺、前これと同じ機種やったんですよ。懐かしいな」

「そうか。触るのはいいが、そのケータイは使えないぞ」

「ええ？ 使えないんですか」

思わず大声を上げた空の横で、海が額に手をやった。

岸谷は驚いたように空を見ている。

「あ、すみません」

「いや、いいよ。使う本人がいないからな。たまに、充電してるから中を見ようと思えばみれるが」

「そうか、そりやそうですよ」

空は、乾いた笑いを口元に上らせた。

その横で、海は慣れた手つきで携帯電話を触っている。

しばらく触つて、海はありがとうございましたと携帯電話を返した。その前に母のストラップは外している。

「じゃあ、これ貰つて帰りますね」

「ああ、どうぞ」

「ありがとうございます。で、先生」

「ん？ なんだ」

穏やかに聞き返した男に、海は少し表情を曇らせて言葉を口にした。

「最近、絵里さんの名を騙つて変なメールを送るやつがおるんです。先生んとは何かそういうメールきてませんか」

空は、はじめられたように海を見た。

そんないきなり、直球かよ。と、思ったのである。

海はどこか緊張の面持ちで男を見ている。

「いや、俺のところには来てないが。絵里の名を騙ったメール？
それはどういう……」

「いや、いいんです。すみません。気にせんといってください。たぶ
んただの悪戯やと思います。そのうち犯人も、こんなこと何の意味
もないことやって気付いてくれるって信じてますから」

海は半ば岸谷の言葉を遮るようにそう告げ、立ち上がった。

丁寧には部屋に上げてもらった礼を言っ、二人は岸谷の部屋を後
にした。

「かい。どういふことか説明しろよ」

アパートの敷地を出てすぐ、空が声を上げた。若干声に不機嫌さ
が滲み出ている。

やっぱり来たか。そう思って、海は息をついた。

「説明って何を？」

とぼけて尋ねると、即返答があった。

「桜田絵里の父親とどういう関係？」

眉間に皺を寄せて半ば睨むようにこちらを見る空に、海は淡々と
答えた。

「俺、実は小学校の二年までこっちにおってな、そんで。あの人は
小二の時の担任やねん」

「ふーん。じゃあ、斎藤ってのは？」

顰め面のまま聞かれた言葉に、海は真顔で答えた。

「日本人の名字やな」

より一層睨まれた。

海は苦笑してゴメンと謝る。

「俺な、実はお前に嘘ついとった。俺、最初に貰われたん、紫藤の
家やないねん」

空は、何も言わずじつと海を見つめている。海はいつになく堅い表情で、空を見返した。

「それ以上は言いたない」

きっぱりと告げた。拒絶の言葉と取られても仕方がない。ゆっくりと目を逸らした海の背を、空が思い切り叩いた。

「痛って」

「うん、分かった。お前が話してもいいって思うまで待ってる」

その言葉に逸らした目を戻すと、空の笑顔が映る。

どこかほっとした気分で、海は笑顔を返した。

第十七章 まさか……

また、誰かが後をつけてくる。彼女の履くミュールの音が、夜道に響く。その後に、微かな靴音が続く。

彼女が足をとめれば、後ろの靴音が少しずれてとまる。

もう嫌だ。

どうして、つけてくるの？

彼女は足を速めながら、鞆の中の携帯電話を探った。

家まであと数メートル。あの角を曲がって少し行けば家に着く。

彼女はさらに歩みを速めた。

携帯電話をようやく鞆から取り出して、開こうとした彼女の手が止まる。メールが来たことを知らせるマークが点滅していたのだ。

また、エリから？

もう、嫌！

手にした携帯電話を、路面に投げつけたい衝動を抑え込む。

後ろから、足音が聞こえてくる。つかず、離れず。彼女は後ろを

振り向いた。街灯から離れた場所に人影が見える。

背筋が凍る。

彼女は走り出しながら、携帯電話を開いた。メールは無視して、電話をかける。

ワンコールで出た相手に、彼女は声を上げた。

「もうイヤよ。ねえ。もうイヤ、またつけられてるの。きっとエリの呪いよ。アタシ達呪われてんのよ。アタシ、もう警察行く。警察言って全部話す。そうすれば……」

『何言ってるの？ 落ち着いて。今どこ？』

相手が、驚いたように声を上げた。

彼女は今いる場所を言いながら、角を曲がった。

その時。

彼女は横の路地から伸びてきた手に、捕らえられた。叫び声を上

げようとした口を背後から塞がれる。そのまま細い路地に引き込まれていった。

夜九時過ぎ。

今日も泊りに来た空は、光の座る机の後ろで、健やかな寝息を立てている。夕飯を食べて風呂に入ったあと、すぐに寝てしまったのだ。別の部屋を用意すると言ったのだが、せっかく泊まりに来たのに一人じゃつまらないと、空は主張した。その割に早く眠ってしまったのだから、意味がないのではないかと光は思う。

彼は、することもないので、机に向かって予習をしていた。それもひと段落し、強張った肩をほぐすように動かした。

夕食の時、空に聞いた話を思い出しす。それを整理するために、ノートを一枚ちぎって、そこに思いつくまま書きだした。

- ・ 一番最初のメールは、絵里のメールアドレスから送られてきた。
- ・ 内容は細かく、すべて真実。
- ・ メールに書ける内容が書いてあるであろう日記は存在した。
- ・ 桜田絵里の母親は、日記の存在を認めたが、携帯電話を持っていたことは知らなかった。
- ・ 父親の方は、どちらの存在も知っていた。
- ・ 絵里の携帯電話は、父親が持っていた。
- ・ そのケータイ電話は使用不可能だった。
- ・ その携帯電話から、メールが送られた形跡はなかった。

こうやって書き出してみると、一番怪しいのは、携帯電話と日記を持っていた父親だろう。空の話から、海もそう考えたことがうかがえる。

海が桜田絵里の父親に対して、メールが送られてくることを告げ

たのは、父親に対しての牽制だろう。そうでなければ、信じているという表現は使わないはずだ。

そこまで考えた時だった。携帯電話が机の上で、動き出した。マナーモードにしていたので、振動したのである。

机から落ちたところを、キャッチして、光は携帯電話を開いた。

「もしもし」

『助けて、春名君』

静だ。緊迫した声に、嫌な予感を覚えた。

「どうした」

『ムツコから電話があつたんだけど、途中で切れちゃって』

「それで？」

『だから、ああ。えっと、ムツコ後をつけられてるって怯えてて。

家の近くだけど、警察行ってくつて、そしたら電話切れて』

「分かった。とりあえず、そっち行くから。今どこ？」

『ムツコの家近所まで来てるの、亀公園近くの大きな交差点のところに』

そこなら知っている。光はすぐさまその辺りの情景を思い浮かべた。車の通日も、人の通日も多い場所だ。

「じゃあ、そこで待ってて。すぐ行くから」

そう言つて、電話を切つて。光は立ち上がった。ドアまで歩いて、一度後ろを振り返る。

空がちょうど寝返りを打ったところだった。

幸せそうな寝顔が目に入り、光は空をおいて行くことを決めた。

「春名くん」

タクシーを降りたところで、声をかけられ、光は声のした方向へ視線を向けた。

静が街灯の近くで手を振っている。そちらに歩み寄って声をかけ

た。

「大丈夫？」

「ええ。でも、どうしよう」

「警察に連絡は？」

静は首を大きく横に振った。

「警察にいったって、きっと信じてくれないわ。それより、ムッコ捜さなきゃ」

「……分かった。この辺りにいるって彼女は言ってたんだね？」

「ええ……」

不安に強張った顔の静。光は彼女の肩に手を置いた。

「不安だろうけど、とりあえず彼女を見つけることだけを今は考えよう。いいね」

ゆっくりと言い聞かせるような声音に、静は頷いた。

まず、睦子の家に電話をかけた。もしかすると、睦子は家にいるのではないか。そんな希望的観測からだ。しかし、睦子は家に帰っていないかった。家の人に、睦子が帰ってきたら連絡をくれるようにお願いして、通話を切った。

二人は睦子の家の前まで来ると、その付近を捜して回った。だが、どこにも姿はない。この辺りの道は、人通りが少ないせいもあってやけに静だ。

街灯も少なく、暗い路地を、目を凝らして探す。

「あつ。春名くん」

細い路地を覗いていた静が声を上げた。そちらに歩み寄った光に彼女が何かを差し出す。

それは、小さなキーホルダーのようだった。

「これ、中学の修学旅行で買ったやつなの。皆色違いで。この色はたぶん、ムッコのだと思う」

光はそのキーホルダーを街灯のある方へ掲げてみた。

ハート型のキーホルダーだ。よく見ると、爪切りとしても使えるようだ。土産物というだけあって、地名も入っている。

少し傷はあるものの、たいして汚れてはいない。最近落としたものだろう。

「この、路地の先には何がある？ 例えば、人目につかないような場所はないかな」

静は、眉を寄せ考えるようにしたあと、何かを思いついたように声を上げた。

「あ、廃ビルならあるわ。この間、ムツコに聞いたの。二、三年前に立て直すって言ってたけど、そのまま放置されてるビルがあるって。そこなら、中へ入ってしまえば、周りからは見えないかも」

「行ってみよう」

光は、静の背を押して促し、自身も歩き出した。

細い路地を抜けてすぐ、その廃ビルに着いた。五階建くらいの小さなビルだ。月をバックに建つ廃ビルは、さながら悪の巣窟といった雰囲気だ。街灯の光も弱いため見えにくい、壁のあちこちに罅が入っている。

入口には立ち入り禁止のロープが張られているが、入ろうと思えば誰でも簡単に入れるだろう。

「中へ入ったことは？」

光が尋ねると、静は激しく首を横に振った。こんな薄気味の悪いところ入るわけないとでも言いたげだ。

「ねえ、中入るの？」

怖気づいたような静の声。

「僕一人で入ろうか？」

その言葉に、静は大きく首を左右に振った。

光が、ビルの中へ向かうと静が慌ててついてくる。

中は真っ暗だ。月明かりもほとんど入ってこない。光は、ポケットから携帯電話を取り出した。開くと、明るいひかりが周囲を照らす。射光は弱いがないよりはまだ。

床は、砂のようなもので汚れて、足跡がいくつも残っている。コンクリートの欠片なども落ちており、壁には無数の落書きがあった。ふと、何かが落ちていた気がして、先ほど照らしたばかりの場所に携帯電話の弱いひかりを向ける。そこには、カゴバッグが落ちていた。

「このバッグ」

光の呟く声が届いたのか、静がそちらに歩み寄ってバッグを拾い上げた。

「これ、ムツコのだわ！ ムツコここに来たのよ」

静に手渡されたピンク色のカゴバッグは、確かに光も目にしたことがある。一度、睦子と会ったときに彼女が手にしていたものと同じだ。

だが、なぜこんなところに落ちている？

「ムツコー。いないの？ いるなら返事して」

静が声を張り上げる。光が階段を見つけてそちらに進むと、静が光の片腕を掴んだ。

ちよつとした重みに驚いて見ると、不安げな表情の静と目が合う。溜息をつきたいのをこらえて、静に掴まれた腕はそのまま、光はゆっくりと階段を上りはじめた。足が痛いがそうもいつていられない。

「あ、そこ危ないわよ。大きな穴があいてるから」

言われて、携帯電話を下に向けてそこを照らせば、コンクリートが削れたようになっていた。穴というほどではないが、ここに足を取られたら転んでいただろう。暗くて、見落とすところだった。光は眉をひそめたあと、静に顔を向けた。

「……ありがとう」

呟くような小さな声だったが、光に身を寄せている静には聞こえ

ただろう。

しばらくして、二階に着いた。

こちらも、ひどく荒れている。壁の落書きも一階と同様に、所狭しと描かれていた。とても口には出せないような下ネタに、相合傘も書かれている。

「ムツコー、いないの？」

廊下にむなしく響く声。

何故か落ちている段ボールやゴミをよけ、光と静は二階にあるフロアをすべて見て回る。

三階、四階ともに見て回るが人の姿はどこにもない。ここにはいないのではないか。そんな思いが頭をかすめた。

五階の最後のフロアに来た時だった。静は携帯電話を取り出し、睦子に電話をかけた。

しかし、コール音が鳴るばかりで、電話がつながる気配はない。何かに気を取られたように、窓の外を見た静が声を上げる。

「春名くん」

呼ばれて歩み寄ると、何かの音が聞こえる。はやりのアイドルの歌声が微かに。音に気を取られていると、静がまた光の腕に抱きついた。勢いに危つくバランスを崩しかける。

「どうした？」

「外、外見て」

震える声で促され、光はゆっくりと窓に近寄り、外に目をやる。

月が見えた。そして、町の明かり。

先ほどより、はっきりと聞こえる音。

「下、下を見て」

言われて下を覗き込む。

息を飲んだ。

月明かりの下。

ビルと塀の狭間。

そこに見えるシルエット。

人が、倒れている。

月明かりをもってしても、ここからだと人物の特定はできない。

「音が、ムツコの着うた……ムツコ、なの？　ねえ、ムツコなの？
どうして……」

震える静の声を聞き、光はそつと静の背に片腕をまわした。

第十八章 証言

廃ビルの裏側に、人が集まっていた。

夜の十時過ぎだというのに、辺りは騒然としている。

ビルの入り口付近には、立ち入り禁止のテープが張られ、見張りの警察官が立っていた。その近くには、警察関係の車両が駐車してある。

そしてまた、車が一台停車した。

そこから降りてきたのは、二十代後半くらいの男性と、五十代半ばほどの、こちらも男性だった。

二人は立ち番の警官と二言三言話しをすると、立ち入り禁止のテープを潜り、現場へと足を向けた。

この廃ビルの裏手で、女が亡くなっていたという通報があつたためだ。

二人は、カバーの掛けられている遺体に近寄ると、しゃがんだ後、そろって合掌し、カバーをめくる。

まだ年若い少女だった。高校生くらいだろうか。男がそう考えていたら、先に着いていた新米刑事の河合が彼の考えを裏付けた。

「該者は石井睦子、十六歳。持っていた生徒手帳から、愛聖女子学園の一年生であることが分かりました。死亡推定時刻は、午後七時から十時の間。死因は転落死ではないかということですよ」

「ふーん。若くて可愛かっただろうに、勿体ない」

「おい、私市。お前はそんな感想しか持てんのか」

中年の男性が、若い方の男に呆れた声をかける。私市きさいちと呼ばれた男は、整った顔に笑顔をのせた。

「本音、聞きたいですか？ 虻さん」

虻あぶさんと呼ばれた中年の男性は、嫌そうに顔を歪めた。

「いらん。どうせろくでもないこと言っただろうが。で、河合。第一発見者は？」

河合は緊張の面持ちで、私市たちの背後を指さした。河合はまだ、この中年刑事に視線を向けられると緊張するようである。

「あつちで待つてもらってます」

河合の指し示す方向を目で追って、私市は軽く驚きの声を上げた。

「あれ？ あの子は……虹さん、あの子」

「え、ああ？ 見覚えある顔だな」

第一発見者という少年と少女。私市たちが注目したのは、少女ではなく綺麗な顔をした少年の方だった。

「やあ、春名くん。久しぶりだね」

にこやかに私市は話しかけたが、少年は眉間にしわを寄せ、私市を見上げた。そんな顔をしていても、綺麗な。

「あれ？ 僕のことは憶えてないかな？」

苦笑いを作ってみせると、少年は首を横に振った。初めて会った時もあったが、どうにも表情の乏しい少年だ。彼が以前、フィギアスケートの選手として活躍していたことを知っている私市は、その頃とのギャップに首を傾げなくなってしまう。本当に同一人物なのかと。

「いえ、私市さん。その節はありがとうございました」

言葉の後半で頭を下げる少年に、私市もつられて頭を下げた。

「いえいえ」

そのやり取りを見て、少年の横に立った少女が目を丸くしている。刑事と知り合いだったことに驚いているようだ。

「おい、私市。何やつとんだ。まったく」

頭を平手で叩かれ、恨みがましい目で叩いた相手を見やった。

「虹さん、子どもの前でー」

「煩い。遊んでないで、さっさと話し聞かんか」

心の中で、へいへいと返事をして、私市は手帳を取り出した。

その手帳を見て、少女がまたもや驚きの顔を作った。私市が出した手帳はクマとウサギのキャラクターが描かれた、とてもファンシーな物だ。私市の趣味ではなく、姉からのプレゼントである。この

間まで使っていた黒革の手帳を使いきったので、机の奥にしまっていた物を急場凌ぎのつもりで持ってきていたのだ。しかし、この手帳を見た人の反応が面白いので、そのまま使うことにしようと思っている。

何か言われる前に、私市は素早く質問を口に上らせる。

「君は、春名光くんだね。では、お嬢さん。お名前は？」

「え、えつと。はい。伊藤静です」

おとなしげな少女である。亡くなった石井睦子はどちらかといえば派手な格好をしていたが、こちらの少女は、服装もおとなしめである。

「そう、伊藤さんね。二人はどうして、こんな時間にこんな場所に來てたのかな？ デートってわけではないよね」

そう尋ねたのは、二人の間に色恋特有の甘いムードが見られなかったからだ。まあ、死体を発見した直後では、そんなムードを出しようにないだけかもしれないが。

「はい。あの、ムツコから電話貰ったんですけど、その電話がおかしくて、それで春名くんと一緒に捜しに……」

「ふむ。ムツコっていうのは、亡くなった石井睦子さんのあだ名かな？ 二人は友達？」

優しげなといえば聞こえはいいが、気だるげともとれる口調で私市が問う。

「はい、中学からの友達です」

静が頷きながら言葉をつむぐ。それに頷き返して、さらに問いを重ねる。

「ふむふむ。仲は？」

「良かったです」

静から即答が返ってきた。私市が睦子と静の仲を聞いたのは、彼女たちの服装の違いに違和感を覚えたからである。友人というのは、どこことなく服装が似通っているものだと私市は思っていたからだ。

まあ、学校では制服だし、服装の好みは関係ないのかもしれない。

二人の関係は調べれば分かってくるだろう。

私市は頭を切り替えた。

「そう、じゃあ、その電話の内容は？ どうおかしかったのかな」

静は一瞬言い淀む様子を見せたが、光が頷いたのを見て話し始めた。

「夜の九時前だったと思います。ムツコから急に電話がかかってきて、またあとをつけられてるって。これから警察に行くって。その途中で電話が切れたんです」

それは、穏やかじゃないな。静の話を手帳に記しながら思う。

「あとをつけられてるって言ったけど、またってことはそういうことが頻繁にあつたってこと？ ストーカー被害にでもあつてた？」

「いえ、ストーカーではないと思います。ムツコはエリの呪いだっと思ってたみたいです」

私市は隣に目をやった。虻さんの眉間に大きな皺が寄っている。

彼は呪いなどの非科学的なものは嫌いなのである。

「エリっていうのは？」

「一昨年亡くなった、友人です。最近、その亡くなったエリの名を騙ったメールがくるようになって、それでムツコも私も氣に病んでたんです。だから、ムツコ、追い詰められてたんだと思います」

うーんと私市は唸った。

隣を見れば、虻さんがただでさえ怖い顔を顰めている。

「虻さん、私市さん」

突然名を呼ばれて振り向くと、河合が白い手袋をつけた手に、携帯電話を持ってやって来る姿が見えた。

「これ、見てください」

そう言つて、私市と虻さんの間に身を割り込ませた。

彼の持っている携帯電話のディスプレイを見て、私市は眉を寄せた。

『私を殺したのは誰？』

メールの画面にはそう書かれていた。

「これ、これが君たちの言っていた悪戯メールかな」

私市は、河合の手首を掴んで、二人に画面が見えるように動かした。河合が痛がっているが、気にした様子も見せず、二人の答えを待つ。

「はい、そうです」

伊藤静の答えに、私市は頷いた。河合の手を離してやると、河合に恨めしそうな眼で見られた。

「私市さん。酷いっすよ。って、あ、違うんすよ。私市さん」

河合が思い出したように声をあげる。なんだと言うように、視線を河合に向ける。

「これ、メールじゃなくて、このケータイに直接入力されてるんす」「新規メールについて何か？」

河合が頷く。虻さんは要領を得ない顔をしていた。虻さんを置き去りに河合は話を進める。

「犯人が、入れてったんすかね」

河合には答えず、私市は自身の顎に手をやった。

これは、単純に自殺という線で、片付けられなくなりそうだ。

亡くなった少女の名を騙るメールは、ただの悪戯である可能性も高いが、かといって無関係であるとも言いきれない。

つけられていた、というのが事実であれば、ストーカーもしくは変質者の線も考えられる。

携帯電話に入れた文字は、本人が入力した可能性もあるだろうが、この文面を入力する意図が分からない。第三者が、入力した可能性の方が高いように思われる。

とにかく、調べてみるしかない。これから忙しくなりそうだ。

第十九章 後悔

空が目を覚ましたのは、廊下で鳴り響く電話の音のせいである。眠い頭を一つ振って、部屋を出た。空の家とは違う、広く長い廊下は静で、人の気配がない。

光の名を自慢の大声で呼んだが、返事はなかった。

電話が鳴り続けている。

電話機を見つけて、空はその前で少し迷った。

他所様の電話に出てよいものか考えたのだ。

結局、いつまでもなり続ける電話を前に我慢できず、空は受話器に手を伸ばした。

「もしもし」

『その声、空か？』

唐突に相手が大声を上げた。空は一拍の間をおいて思いついた名を上げる。

「海？ え、何で……」

光とは喧嘩してたのに。そんな疑問が頭をかすめた。

『おまえん家に電話したら、こつちやって言われてな』

「ん？ じゃあ俺に用な訳か」

『そうやねん。君島さんから連絡あつてな』

そこで一度、海は言葉を切った。その間がやけに長かったので、空が不審に思った時、海の声が耳に届いた。

『石井睦子が亡くなったんや』

「え？ 嘘だろ……」

空はそのまま絶句した。石井睦子が倒れていた場所へ向かうという海の言葉に、自分も行く、それだけ言って通話を切った。

亀公園近くの交差点で待ち合わせて、空と海、そして由香は睦子が発見されたという廃ビルへ向かった。

その廃ビルが視界に入る前に、人のざわめきが空たちの耳を打った。

それが、野次馬の声だと分かったのは、その廃ビルの前で立つ多くの人影を見つけたからだ。

その中に割って入るようにして、空たちは人垣の前に出た。

先ほどまで、人の頭や背中であられていた視界が広がる。立ち入り禁止のテープの向こう。

結構な数の警察関係者と思われる人の中で、見知った人物を見つけて、空は大声を上げた。

「あ、光！ 何でここに」

空のあまりの大声に、一瞬身を引いた海は、はっとしたように空の視線の先を追った。

そこには、以前学校で起こった事件の時に顔を合わせた中年の刑事の傍らに、光と伊藤静の姿があった。

「何で、伊藤さんと一緒におんねん」

「俺に聞かれても」

不機嫌な声を上げた海に向かって、空は困ったように頬を人差し指で掻いた。

「ていうか、何で刑事と一緒にやねん」

「だから、知らねーつつうの」

光は家にいるはずだと思っていたのだ。空が床に着くまでは確かに部屋にいた。

家を出て行ったとするなら、空が寝ていた間だろう。

「あの人、シズカの彼氏でしょう？ アンナが電話で言ってた。シズカが、彼氏と一緒にムッコを見つけたって。紫藤くんたち知り合いな？」

聞かれて、空と海は顔を見合わせた。

「おい。光！ こっち来いよ」

空はまたも大きな声を出す。

喧騒の中でも、よく響いたその声に、光は顔をこちらに向け、微かに眉をひそめた。

そして、刑事に何か話してから、空たちのもとへやって来る。

「空。起きたのか」

光は開口一番そう言った。

「悪かったな、寝穢くて」

「誰もそんなこと言っていない。で、要件は」

相変わらずの無表情で問う。海はそんな光に不機嫌な眼差しを向けた。

「おまえ、ちょっとこっち来いや」

そう言って、海は光の手首を掴んで引っ張った。光は立ち入り禁止のテープを潜るしかない。

そのまま二人は人垣の向こうへと消えていく。

「え、ちょ。おいてけぼり？ 俺たち」

「どうしよう」

由香に不安そうな顔で見つめられ、空は反射的に笑顔を作った。

「俺、あいつら追いかけるからさ。君島さんは川崎さん来るのこいで待ってて。来るんだよね？ あの子」

「う、うん」

頷く由香にぜったいここを動くなと言い置いて、空は海たちの後を追った。

しばらく歩いて、足をとめる。

細い路地へと続く角の向こうから、声が聞こえた気がしたのだ。

そちらに向かうと、案の定、光と海がいた。

壁に背を持たせかけて立つ光の前に、海が腕を組んで立っている。「日記のこと、空に聞いておかしいなとは思ってたけど。まさか

お前が調べてるなんて思わんかったわ」

光は無言で眼鏡の奥から、海を見つめている。

「俺が、メールのこと言うた時は他人なんか関係ないとか、やめろとか言うと思ったくせに、どういうことや！」

詰め寄る海を前に、光は溜息をつくと顔を背けた。

「別に……」

「別について何やねん！」

怒鳴る海と光の間に、空は割って入る。

「まあまあ。海、落ち着けて。そんで、光。さっき君島さんが、お前が伊藤さんの彼氏だって言ってたけど本当？ 伊藤さんに言われて、事件調べてたのか？」

取り合えず話題を逸らそうと、気になったことを聞いてみた。だが、聞いた内容は話題を逸らしたことになるっていいない。

光は相変わらず表情一つ変えずに、口を開いた。

「関係ないだろ」

抑揚のない声が耳に届き、空は短気ぶりを発揮して怒鳴ろうと口を開けた。

「か……」

「関係ないって何やねん」

空が声を上げた声にかぶせるように海が怒鳴った。空は度肝を抜かれて、口を開けたまま海を見る。

「俺ら、兄弟やろ。そういうこと、何も言わんとこんなことに巻き込まれて、俺がお前に相談した時は、動こうともせんかったくせに女に言われたら動くんか。最低やな」

怒声を上げて疲れたのか、肩で息をしている海の前で、光は俯き、口元に手をやった。

そして、ふっと鼻で笑う。顔をあげて、冷たい視線を海に向けた。「そう思いたいなら、そう思ってたればいいじゃないか」

光と海の視線が交錯する。

海を突き放すように見る光の視線。

その視線を感じた刹那。

海は手を上げていた。

あつという空の声。その前に響いた乾いた音。

海はゆっくりと、己の右手の平に視線を落とした。

「海、何も殴ることないだろっ」

その声を聞いて顔を上げる。頬を押さえて、珍しく驚いた表情をしている光と目があった。眼鏡が、ずれている。

「あ、俺」

しびれるような手のひらの痛み。

海は後退りした。

「俺は……俺は謝らへんで！ お前なんか、もう知らん。大嫌いや」
大声を上げ、踵を返して走り出す。

「待てよ、海」

空の声が背にかかるが、海は振り向くことができなかった。

見知らぬ夜道を、海を捜して走り回るうちに、小さな公園に辿り着いた。その遊具場で、海の背を見つけて空は安堵の息をつく。

彼が、海と呼びかけようとしたとき。

「うがぁ！ やってもうた」

海は妙な声をあげると、頭を抱えてしゃがみこんだ。

「ぬぁ、何って声出すんだよ」

驚いた空は、自身も妙な声をあげて、海に駆け寄った。

「空？」

「おう。空さまだっつーの。お前、殴った拳句何で逃げてんだよ」

「光は？」

問いに答えず尋ね返した海に、空は呆れたような眼差しを向ける。

「戻ったよ。まだ帰るなって刑事に言われてんだってさ」

「そうか……」

空は、海に手を差し出した。暗に立ってと言っているのである。海はその手を取って立ち上がった。

二人して公園を出る。由香を待たせているのだ。もう杏奈も着いている頃だろう。

空は、海の顔をしばらく見つめたあと、口を開いた。

「やつぱ、お前最近変だ。変だよ変」

「へんへん言うなや」

「変なものは変だよ。光と喧嘩するしさ。かと思えば殴るしさ。普段のお前なら絶対しないだろ。光の言うことなんかこやかに聞き流せるだろ。いつものお前なら」

俺は聞き流さないけどな。と、続ける空の横で、海はしばらく無言のまま歩みを進めた。

「光、殴ってもうなたなあ、しかも大嫌いつて、俺は小学生か。ほんま俺何やってんねやろ」

大きく溜息ついて、掌を見る海。空はそんな海に目を向けた。

「後悔するなら、やんなきゃいいのに」

「……そやな。俺、あいつに八つ当たりしてるんかもしれん」

「え？」

「最低なんは俺の方や……」

意味がつかめず問い返したが、海は言いなおすことはしなかった。

石井睦子の葬儀は、睦子の遺体が見つかったからちょうど一週間後に行われた。

睦子の遺体は司法解剖に回されたと聞く。空はお焼香をあげたあと、海や由香たち五人で葬儀会館を後にした。光は別行動を取っている。

日が沈んだばかりの道は街灯が少なく、暗い。人通りの少ない坂道をゆっくりと駅に向かって下って行く。

「どうして、こんなことになったんだろう」

由香が涙声で呟いた。

きつとこの場にいた全員が思っていた言葉だろう。

杏奈が、流した涙をぬぐって声を上げた。

「ユカは、喜んでんじゃない？ アタシらのこと本当は恨んでんでしょ」

泣きすぎたせいではればったくなった目で、由香を睨む。

「川崎、何で、そんな言うねん」

海が鋭い声を上げる。杏奈は俯いた。

「だって、そうだもん。アタシらユカがおとなしいから、けっこうやりたい放題やってたし。ざまあみろって思ってたでしょ。本当は」足を止め、拳を握りしめて叫ぶように言った杏奈に、全員の視線が向かう。

由香は二度、大きく首を横に振った。

「違う。そんなことない。悲しいよ。悲しいに決まってるじゃない。中学の時、友達できなかった私に、はじめて声掛けてくれたのムッコとアンナだったじゃない。嬉しかったのよ。本当にうれしかった。あれから、今まで、エリのことがあっても。私のこと見放さないでいてくれたじゃない。ざまあみろなんて、思うわけじゃない」珍しく大きな声をあげた由香を、驚いた顔で杏奈が見詰めた。

「私たち、友達でしょう」

涙ながらに訴える由香に向かって、杏奈は手を伸ばした。ゆっくりと、由香の体を引き寄せる。

「ゴメン。ゴメンねユカ。変なこと言ってゴメンねえー」

抱き合ったまま、声をあげて大泣きする二人を黙って見ていた空は、どうしようかと海を見る。海は肩をすくめた。

どれくらいたっただろうか。空と同じく二人を静観していた静が動いた。

二人の肩に手をおいて、宥め始める。

しばらくそんな様子を眺めていた海が、三人にそろそろ行こうと声をかけた。

また、五人で駅に向かって歩き出す。湿っぽい空気の中、静が声を上げた。

「やっぱり、あのメールを送った人がムッコを殺したのかな」
「そんな」

由香が怯えたように声を上げた。

「でも、ムッコ誰かにつけられてるって言ってたし、どういう理由かは分からないけど、エリを私たちに殺されたって思ってる犯人がムッコを……」

「やめて、シズカ！ そんなこと、あるわけないよ」

由香が耳をふさいで、首を振る。

静は、由香に目を向けた。

「なら、ムッコが言うようにエリの呪いだっていうの？ それこそあるわけないでしょう」

静の冷静な口調に、空は、それは確かにそうだなと思う。

そんな空の横で、杏奈がこぶしを握った。

「どっちにしろ、ムッコを殺した犯人、アタシは許さないけどね」
前へと向けられた強い視線。

杏奈の言葉に、全員が彼女に視線を向ける。

「絶対に、許さない」

彼女の言葉が、暗い夜道を通って消えた。

第二十章 記憶

あの日、早く帰るから。そう言ったのに。

あの日、早く帰ってきて、そう言われたのに。
帰りが遅くなってしまった。

だから、彼女は死んでしまったのだろうか。

だから、彼女は自分を待たず死んでしまったのか。
だから、これは自分の罪。

自分の罪だ。

蝉の鳴き声が、周りに大きく反響している。養父に手書きしてもらった地図を片手に、最寄りの駅に降り立った。

地図を見ずとも、ある程度の記憶がよみがえり、足がかってに墓場へ向かう道に行く。一年に一回とはいえ、何度となく来た道だ。

十分ほどで、墓場に着いた。

墓の位置も、だいたい把握している。墓石が立ち並ぶ道へゆつくりと歩みを進めた。

もうそろそろ、目的の墓に着く。

そう思っ、心なし俯けていた視線を上げて、海は足をとめた。

海が目的としていた墓の前に男がいる。手を合わせていたその人が、立ち上がったのが目に映る。

男がこちらに気づいた。ゆつくりと笑顔になったその顔を、海は知っている。

「私市さん、来てはったんですか」

小走りに私市のもとまで来ると、声をかけた。

「ああ。ここで会うのは初めてだね」

穏やかな声音が海の耳を打つ。

毎年、自分が来る前に供えられていた花。

花を供えてくれていたのは、この人だったのか。

「毎年、来てくれてはったんですね。ありがとうございます」

そう言っただけを下げれば、また穏やかな声はその頭に振ってきた。

「そりゃあね、俺にとつては、憧れの人だったからな」

そう言っただけを見た。

海も墓に目をつけた。

墓石には、斎藤家の墓と彫られている。

海の血の繋がっていない両親が眠る墓だ。

海がお父さん、お母さんと呼ぶのは、この下に眠っている二人だけ。

私市が火を点けたのだろう線香の香が、この辺りにまだ漂っている。綺麗な花も飾られていた。海の手にも、花がある。

海は花を置いて、墓の前で手を合わせた。

高校生になったこと、兄弟を見つけたこと。いろんなことを報告する。

そして目を開けると、後ろを振り返った。

私市は、海が墓参りを終えるのを待っていてくれたのだろう。所在無げにたたずんでいた。

男前なのにどこか眠たげな、そしてやる気のないような表情は、昔から変わらない。

私市と初めて会ったのは、もう随分と前になる。海がまだ、こちらに居た頃のことだ。近所に住んでいた彼は、海の父親を兄のように慕ってよく家に遊びに来ていた。

海の彼に対する認識は『よく遊びに来る面白いお兄さん』だった。小さな甥っ子がいるとかで、子どもの扱いに慣れている人だった。

そんな彼とは、今年八年ぶりに再開した。数ヶ月前に起こった事件の捜査に、海の通う学校へ来たのだ。

最初は、まったく気付かなかった。昔のことは、あまり思い出さ

ないようにしている。八年という歳月が、記憶を曖昧にしていた。彼から話しかけられなければ、ずっと気付かなかったことだろう。話しかけられてすぐに思い出したものの、彼が海の父親と同じ刑事となっていたことにまた驚いた。海の父親は、殉職している。そして、母親もその後を追うように……

「海くん？ どうした」

声をかけられ、海は我に返って私市を見た。

彼の顔には心配そうな色が見て取れる。

「な…… んでもありません。ちょっと、思い出したから」
「そうか……」

私市は、大きな掌を海の頭にやって荒っぽく撫でた。海は慌てて頭に手をやって、髪を整える。

「何するんですか。俺、もう子どもやないですよ」

拗ねた口調で文句を言うと、私市は笑顔を作った。

「ははは。君はまだまだ子どもだよ。さ、せっかく会ったんだし、ゴハンでも食べに行こう。昼まだなんだろ」

聞かれて、海は素直にうなずいた。

私市に連れられて入ったのは、駅前そば屋だった。広い店内には、結構な数のテーブルが並んでいる。奥には、座敷も見えた。

四人掛けの席に案内された二人は、注文を終えると、冷たいおしぼりを手にとった。

私市がそのおしぼりで顔を拭いているのを見て、おっさんやんと思っただことはふせておく。

「君はうどんを頼むのかと思ったよ」

唐突に言われ、冷たいお茶の入ったコップに向かって伸ばしていた手を止める。

「だってほら、関西の人はうどんが好きだろう」

私市は真面目な顔をしている。海は思わず噴き出した。遠慮なく笑ってから、手を上下に振って私市の気を引く。

「何言うてるんですか、俺もともとこっちの人ですよ。それに、関西にやって蕎麦好きの人もいてますよ」

「そうなのか？ 大阪に友達がいるんだが、蕎麦屋でもわざわざうどんを頼んでいたのが印象に残ってたんだ。だって蕎麦屋なのにさ、何でわざわざメインの蕎麦を頼まずにうどんにいくんだって思わないか？ 絶対蕎麦の方が美味いだろうに」

私市は腕を胸の前で組んで、首を捻る。相変わらず、妙なところにこだわる人だと海は思う。

「まあそうですね。俺はうどんより蕎麦派なんで、うどん屋入っても、蕎麦があつたら蕎麦頼んでまいますけどね」

「ほー。そういうもんかな」

「そういうもんですって、あ、来たんちゃいます？」

海が厨房の方からお膳を持ってくる店員を見かけて、声を上げる。案の定店員は、二人の前に天ざるの乗った膳を置いた。

しばらく無言で天ざるを食す。

海はすべて平らげた後で、ごちそうさまでしたとしつけられた通りに手を合わせた。

それを見た私市が慌てたように手を合わせるのがおかしい。

「あの、私市さん」

声をかけると、無言で問い返すように表情を変える。そんな私市に向かって、海はおずおずと口を開いた。

「石井の件ってどうなってます？ 犯人捕まりそうですか」

じつと、私市は海に視線を注いだ。それに耐えるように見返していると、不意に私市の視線が逸れた。

「そうか、君も彼女と面識があつたんだっただね。例の悪戯メールの件で」

海は頷いた。石井睦子の葬儀の数日前に、警察が海の家にも話を

聞きに来ていたのである。私市は当然そのことも知っているだろう。
「はい。犯人って捕まりそうですか」

もう一度聞いてみた。せっかくの機会だ、答えてもらえないかもしれないが、駄目でもともとである。

私市は、自身の頭に手をやって、少し長めの前髪を掴んだ。

「んー。まあ、頑張るよ」

なんとも頼りない返事である。

「メールを送って来る犯人と、石井を殺した犯人で同じなんでしょうか」

海の問いに、掴んでいた前髪を放して、少し崩れた髪型に戻すように撫でてから、私市は口を開く。

「それを今、皆で調べてるところだよ。海君は気にせず、春名君と仲直りすることだね」

海は目を見張った。

「な、何で知ってるんですか？ 俺らが喧嘩してること」

私市は無言で自身の頬を指さした。

「彼の頬が赤くなってたからね。君と二人で出て行って戻った後に」
「はっ……」

笑おうとしたが、できなくて。海は大きく息を吐きだした。

「さすが、よう見てますね」

テーブルの上に置いた手を合わせて、指を組む。そして、強く握りこんだ。

「私市さん。俺、怖いんです」

私市の視線を感じる。海はもう一度、ゆっくりと息を吐き出してから、声を絞り出した。

「俺、人から必要とされてないと怖いんです。あいつは、光は俺のこと必要やないんですよ。そんなんあいつのせいやないのに、俺、あいつに奴あたりしてもうた……」

視界に私市の手が入った。その手は握り締めた海の手の上に乗る。彼の手がゆっくり二度、海の手を優しく叩く。

海は顔を上げた。私市と目が合う。

「後悔してるなら、謝るのが一番だね」

私市は笑顔を浮かべる。

「経験談。それに、君は春名君が必要なんだろう」

海は目を伏せた。

海からの答えはない。

私市は、そろそろ出るかと、海を促して立ち上がった。

海が墓場で手を合わせていたところ、高橋空は笑顔全開で昼食のそ
うめんが入った器の前で手を合わせていた。

「いっただつきまーす」

元気にそう言つて、箸に手を伸ばす。いつもなら、窓を開けて扇
風機をつけながら昼食を食べるのだが、今日はクーラーのついた涼
しい部屋で昼食にありつけている。それもこれも、光さままだ。
つまり、空は数日ぶりに光の家に遊びに来て、ちゃっかり昼食をこ
ちそうになつていたのである。

「悪かつたな。そうめんしかなくて」

珍しく殊勝な物言いしたのは光である。光は、薬味のネギを麵
つゆに入れていいる。そのネギの切り方が歪なのは、空が刻んだから
である。

「いいよ。俺そうめん好きだし。っていうか、ごちそうになつてん
の俺だし」

いつもなら、おいしい手料理をごちそうしてくれる家政婦さんが、
夏バテで急きよ来られなくなったさうなのだ。

出前を取ると言つた光に、勿体ないと台所を物色して、見つけた
そうめんを茹でることを提案したのは空だった。

慣れない手つきで作つた割には、なかなか美味い。そうめんは時
間通りに茹でただけ、つゆは市販のものだから、美味いのは当たり

前かもしれないが。

「でも、意外だったな。おまえん家にそうめんがあつたの」

空がそう言つてそうめんをすする。光はたいして興味を示す風でもなく淡々と口を開けた。

「ああ、たぶんお中元で送られてきたんだと思う」

「なるほど、おまえん家、すっげーいっぱいお中元とかきそうだな」

なんとなく、金持ちの家というのはそんなイメージだ。

その言葉に対し、光は否定も肯定もしない。黙々とそうめんを口に運ぶ。

空は、会話の糸口を探してふと思ったことを声にだした。

「なあ、なんかさー、うやむやになっちゃったよな。メール」

「桜田絵里からの？」

問われて、空は頷く。冷えた麦茶を一口飲み、言葉が続けた。

「この間、葬式行つただろ。あの後、川崎さんに聞いたらさ、石井睦子が死んだ後、ぷつぷつとメール来なくなつたんだって」

「へえ。他の二人も？」

尋ねた光に、空は頷いて見せる。

「らしいよ。あれってさあ。あれかな。桜田絵里の霊が、恨んでた石井睦子を殺して、成仏したからかな」

空は言葉の途中で、身体の前で手をもたげて、幽霊のポーズを取る。

光は呆れたように、鼻で笑った。

「あ、何その態度。ムカツク」

短気な空がさかさず声を上げる。光は、それを抑えるように手を軽く前に出した。

「空の話を前提として聞くけど。どうして桜田絵里は、彼女だけを殺して成仏するんだ？ 絵里を虐めていたのは石井睦子だけじゃないはずだろ。石井睦子だけを殺して、メールが来なくなるのは変じゃないか？」

言われて、確かにそうかも知れないと思ってしまった。なんだか悔しい。

「そもそも、どうして桜田絵里が石井睦子を恨んでいると思うんだ？」

「どうしてって……」

それは、石井睦子が桜田絵里を虐めていたからだ。だが、虐めていたのは他の三人も同じだ。そう気づいて、空は言葉を切った。

メールの内容にもあったように、石井達がしていた虐めは、無視をする程度のものだったようだし、それは由香の証言とも一致している。

由香自身は、絵里が自殺した原因は自分ではないかと思っていたようだが、もしそれが原因なら殺されていたのは由香だったはずだ。空が由香から聞いた限りでは、桜田絵里は前向きで元気な明るい性格という人間像が見える。そんな人が、自殺するというのがどうにも解せないのだ。

「空、人を殺せるのは幽霊じゃなくて、人だよ」

光の声が耳に届き、思考の中に埋もれていた意識が顔を出した。

「お、俺だって本気で幽霊が犯人だとは思ってねーって」

声を上げた空に、光が疑いの眼差しを向けてくる。半分は本気だったことを見抜かれてるんじゃないか、という疑念が湧く。

「いや、嘘じゃねーよ？」

「まあ、どっちでもいいけど」

光は興味無さそうにそう言っ、ゆっくりとテーブルに手をついて立ち上がった。

「とりあえず、皿を洗ってからもう一度、最初から考えてみないか？」

空は、賛成と挙手をして、皿を運ぶために立ち上がった。

第二十一章 犯人像

皿洗いは二人ですればすぐに終わった。二階の光の部屋へ場所を移して、空はテーブルを挟んで光の前に胡坐をかいた。

光は机の上にルーズリーフ用の用紙を置いて、シャーペンを手に空に目を向けた。

「桜田絵里からメールが来たのが事の始まりだな」

「うん。で、海が相談されたんだよな。えっと、君島さんに死人からメールが来るって」

光は紙に、横書きで『君島由香』と書いた。

「君島由香の他にメールが来たのが、伊藤静、川崎杏奈、そしてこの間亡くなった、石井睦子」

光は言いながら、用紙に名前を記入していく。名前を線でつなげると円になるような書き方である。光は、その円の中に、桜田絵里の名前を書いた。名前の下には自殺と記入する。

「この五人は友人関係で、自殺した桜田絵里との仲が拗れていた」

「ん、だな。その辺は、全員がそう言ってた。君島さんが言うには、桜田絵里とは仲直りしかけてたけど、石井さんと川崎さんがその仲直りを邪魔したって話だったな」

空は、公園で聞いた君島由香の言葉を思い出しながら光に説明した。

「ああ、聞いた。僕が聞いた話で推測すると、桜田絵里と四人の関係がこじれたのは、伊藤静の彼氏が、桜田絵里に気持ちを移したのが原因みたいだな」

「マジで？ 別にそんなの桜田絵里は悪くないじゃん。それで無視かよ。女って怖い」

嫌そうに顔を顰めた空に、光は目をやった。

「あくまで推測だよ。で、亡くなった後、二年も経った後に、メールが来るようになった」

無理やり話を戻して、光は桜田絵里と書かれた部分から四人の名前にそれぞれ矢印を引いて、メールと記入する。

「そうそう。君島さんが言うには、一番最初のメールアドレスは桜田絵里のメールアドレスと同じだったって」

「でも、そう証言しているのは君島由香だけだよな」

紙に視線を落としていた空は、顔を上げて光に目をやった。

「そうだけど。何？ 君島さんのこと疑ってんの」

「いや、別に。ただ、嘘である可能性もあるってだけの話だ」

空は納得できないように、うーんと唸っている。

「まあ、それはひとまずおいといて、次行くぞ」

放っておけばいつまでも、唸っていきそうな空に声をかけて、光は眼鏡を人差し指で押し上げた。

「空は、どうして二年も経ってからメールが送られてきたんだと思う？」

「さあ、それは分かんねー。けど」

「けど？」

空が言い淀む気配を見せたので、光はもうひと押しする。

「何か考えがあるなら言ってくれ」

空は拳を口元にあてる。空が何かを考えるとににするお得意のポーズだ。

「あのさあ。よくよく思い出すとさあ。桜田絵里の父親。あの人に桜田絵里の日記が渡ったのが今年みたいなんだよね」

「そうなのか？」

空は頷いた。思い出すように、視線を上に向けて口を開く。

「そう。確か、桜田絵里の母親が先月日記を父親に渡したとかいうようなことを言ってたから。それ思い出してさ」

光は頷いて、空が続きを話すのを待つようにじつと視線を注ぐ。

「もし、もしだよ。父親が犯人なら、今年になってメールが来たのは、今年日記を手に入れた父親が、その日記を読んだからなんじゃないかと思って」

尻すばみになりそうな声を押し出して、空は上目使いで光を見る。彼は大きく息をついた。

また、馬鹿って言われるのかと身構えた空に、光は告げた。

「確かに、それ、良い線いつてるんじゃないか？」

「そうだよな。やつばそんなわけない……って、え？ お前今、良い線いつてるって言った？」

半ば腰を浮かせて、驚きに声を上げる。

「ああ。言っただけ。……なんだよ空。その馬鹿面」

空は呆けた顔で光を見返し、ゆっくりと半分上げていた腰を下ろした。

「いや、また馬鹿にされると思っただからさ。まさかお前が俺を褒めるとは。……ってちよつと待て。お前今、馬鹿面って言った？」

喋っている途中で馬鹿にされたことに気付いた空が声を上げると、光は手を挙げて空を制した。

「そんなことより。こつち。桜田絵里の父親がメールを送ってくる犯人だと仮定するなら、君島由香の言っていた最初のメールアドレスは、絵里の持っている携帯電話のアドレスと同じだったという証言も、嘘ではない可能性が高くなる」

空は首を傾げた。何故、可能性が高くなるのだろうか。絵里の父親が持っていた絵里の携帯電話は使用できなくなっていた。イコール、アドレスも使えなくなっているのではないのか。空はそう、考えたのである。考えをそのまま光に伝えた。

「いや、そうとは言い切れない」

光は机の上に置かれた紙を裏返すと、長方形を二つ並べて書いた。そして右側の長方形の上に、空から見てちゃんと読めるように『旧』と記す。左側の長方形の上には『新』と書いた。

「こつちが、桜田絵里の持っていた携帯電話だとするだろ」

シャーペンで空から見て右側に書かれた長方形を示す。

「携帯電話は解約しても、もちろん使えなくなるけど、機種変更することでも、古い方の携帯は使えなくなるんだ」

「んー？」

要領を得ないと首を傾げる空。

「空、機種変更の意味、分かるよな？」

そう尋ねた光を、空は睨んだ。

「おつまえ、また馬鹿にしてるだろ！ 機種を変えるんだろ？ 新しく」

光は肩をすくめると、先を続けた。

「まあ、そんな感じだな。機種変更って、ケータイを持ってない空には馴染みがないだろうけど。こっちのケータイで使っていたアドレスを、そのままこっちの、新しいケータイでも使えるんだよ」

そう言いながら、右側の長方形から左側の『新』と書かれた長方形に向かって矢印を書きこむ。

空は拳を口元にあて、しばらくその紙を見つめた。少し俯き加減になったおかげで、大きな瞳に影ができる。

「んつと、だから？」

拳を口元にあてたまま、首を傾げたその姿は、妙に可愛いらしく見える。普通の人ならば、その可愛い姿に顔を赤らめそうな程だが、光は平然と、否、少し苛立ったように眉を寄せた。

「少しは考えろよ」

「考えても分かんねーから聞いてんだろ」

口元にあてていた拳をはずして、空は勢いに任せて机を叩いた。

「馬鹿って言うなよ」

言われる前に牽制しておく。

光は大きく息を吐いた。

「はあ。まあ、いいけど。つまり、桜田絵里の父親は、桜田絵里の使っていたケータイの契約を引き続き行っているんじゃないかってことだ」

そう言ったが、まだ要領を得ない顔をしている空に、もう少し分かりやすく伝えることにした。

「だから、そうだな。桜田絵里の父親は絵里のケータイを機種変更

して、使ってるんじゃないかって言いたいんだ。つまり、絵里の使っていたケータイの契約を切った訳ではなく、契約は引き継いだまま、新しいケータイに変えたんだ。その時、メールアドレスは変更せずにそのまま二年間ケータイを使い続けていた」

空は、大きく手を打った。

「あ、そうか。分かった。桜田絵里の父親は、絵里のケータイを機種変更したあと、その電話を自分で使っていたんだ。父親は、自分の携帯電話からメールをしたけど、君島さんから見たら、絵里のケータイからメールが来たように見えたんだ。メール内容も絵里からのように書いてあるし、余計だよな」

空は感心して光を見る。これで、絵里のアドレスからメールがどうやって来たかという謎は解けた。だが、次の疑問が空の頭を過ぎる。

「あ、でも。桜田絵里の父親はどうやって、四人のアドレス知ったんだろ。最初のは、ケータイに入ってたとして。途中で何度もアドレス変えたのに、メールはどんどん来てたって言ってたし」

光はそうだなと呟いた後、おもむろに紙をまた裏返して、先ほど名前を書いた面を表に向けた。

そして、桜田絵里の名の上に父と記し、シャープペンで君島由香他四人の名前を順にさした。

「例えば、この四人の内の誰かが、メールを送った犯人、今は桜田絵里の父親だと仮定して、この父親と繋がっていたとしたら？」

「繋がってたって、共犯で何か？」

驚きの声を上げた空に、光は頷く。

「そう、共犯なのか、脅されてそうしたのか。理由は分からないけど、この中の誰かが、アドレスを犯人に教えていたとしたら、犯人はメールを送り続けることができる」

「そんな、だって。みんな気味悪がってたし、そんなことするなんて思えねーよ」

空はテーブルに付いていた手を、きつく握り締めた。

「ああ、今言ったのは可能性の一つに過ぎない。彼女たち全員のアドレスを知る他の方法もあるかも知れないしな」

でも、それは気休めだと空は思った。

言われてみれば、光が言った可能性が一番高いように思えたからだ。この中に裏切り者がいるかもしれない。そんな風には思いたくないが。

「何で、あんなメール送ろうとしたんだろ」

やるせない気分で、空は呟いた。光は、持っていたシャープペンシルを机の上に置いた。

「桜田絵里はこの四人の中の誰かに殺された。そう思ったからじゃないか」

唐突に言われた言葉に、空は勢いよく顔を上げる。

「え？　なんで？」

「メールに書いてただろ『誰が私を殺したの？』『私を殺したのは誰？』って。日記に、そう思わせるようなことが書いてあったのかも知れないな」

空は目を大きく見開いた。

「それで、犯人は石井睦子を殺したのか？　絵里を殺した犯人だったから」

そう言つと、光は首を横に振った。

「話が飛躍しすぎだ。可能性はあるかもしれないが、そもそも、石井睦子を殺した犯人とメールの犯人が同一人物とは限らないだろ」

「そうだけどー」

空は拗ねたように唇を尖らせた。

「とにかく一度……」

光がそこまで言った時、テーブルの上に置いてあった携帯電話が音を立てた。マナーモードになっていたせいか、バイブ音だけだ。

光はそれを耳にあてた。

どうやらメールではなく電話だったようだ。

光は言葉少なに通話を終えると、空に向き直った。

「出かけるぞ」

それだけ言って立ち上がる。空は訳が分からず光とおなじように、立ち上がって後に続いた。

コーヒーショップの店内に入ると、すぐにこちらに向かって手を上げた人物に気付いた。空は、光と連れだってその人物の座る席まで行く。

「あはっ。高橋君だー。何で二人が一緒に来んの？ あ、二人知り合い？」

明るく声を上げたのは、先ほど光との話の中でも名前の拳がった川崎杏奈だ。その杏奈に、光は頷いた。

「ああ、クラスメイトだ」

空は光とともに杏奈の前の席に座る。

「へえ、同じガッコなんだ。そう言えばどこのガッコ？」

聞かれて答えると、杏奈は驚きの声を上げた。

「ええ？ 清秀高校ってあったま良いガッコじゃん。わお、すごい」

何故か拍手をする杏奈。空は照れて頭を掻いた。

「別にすごくないよ。で、大事な話って？」

余計な話をしたくはないのか、光が相変わらずのポーカーフェイスで割り込んだ。

杏奈は、少し怖気づいたように光に目をやってから口を開く。

「うん……。あの、エリンこと」

「エリって桜田絵里？」

興味をひかれて尋ねた空を見て、笑顔を作ると、杏奈は続けた。

「ん、そう。最初さ、ムッコ、メールのことあんまり気にしてなかったのに。最近急に呪いだとか言い出したからー、おかしいと思ってさ。問い詰めたんだあ」

杏奈はその時のことを思い出しているのか、苦い表情を作る。中身の少なくなつたコーヒーのタンブラーを軽く振ってから、コーヒーを口に運ぶ。

よく、あんな長い爪で物を持てるよな。と、空は、綺麗にネイルが施された杏奈の爪を見て、そんなことを思った。

「ムッコは……」

言い淀んで顔を俯けた杏奈に、先を促すように光が声をかける。

「石井さんは？」

杏奈は顔を上げた。一度大きく息を吸って口を開く。

「ムッコは、エリが死んだ時、その場にいたんだって……」

「え？」

「亡くなつた桜田絵里を発見したのは、大学生だったはずだけど」

光の呟くような声に、杏奈が反応した。

「うん、表向きはそうなってる。だって、ムッコ、屋上から落ちたエリを置き去りにして逃げたって……」

空は軽く息を飲んだ。嫌な気分になつて隣に座る光に視線を送る。その視線に気づいたのか、光は一度こちらに目を向けて嘆息すると、杏奈に視線を戻した。

「何で、それを僕たちに？」

「自分だけで仕舞つておくには、重すぎたから、かなー」

杏奈は口元だけで笑みを作った。空と光は目を見合わせる。

「ムッコが呪いだつて言い出したのは、エリからのメールがどんどん虐めてた頃の内容になつてきて、もしかしたら、メールを送つて来てる犯人が、自分のしたことを知っているんじゃないかって思つて、怖くなつたからなんだと思う」

そこまで言つて、彼女は残っていたコーヒーをすべて飲み干した。「それに、最近。外にいと誰かにあとをつけられてみたいだし。そう言うのも重なつて、ちよつと鬱っぽくなつてたんじゃないかな」

「石井さんも悩んでたんだな」

空は小さく呟いた。石井睦子の印象は、空にとって決していいも

のではなかった。初対面で、挨拶したときに目も合わせなかったり、君島由香につっかかりたり。そんな態度の裏に、睦子もまた、絵里の死に対する罪悪感に苛まれていたのだろうか。その罪悪感から逃れるために、気を張って。あんな態度ばかりとっていたのか。そう考えると、悲しくなってくる。

「桜田さんが屋上から落ちた時、その場にいたのは石井さん一人だった？」

光の尋ねる声が耳に入って、空は知らず下がっていた視線を上げて杏奈を見る。いつも笑っているような杏奈の顔から、表情が消えた。

「春名君はどう思う？」

杏奈の言葉に、光は顔を顰めた。

杏奈は光の表情を気にも留めず、あつと声を上げた。

「そうだ。春名君にお願いがあるんだけど。これ、シズカに渡してくれないかな。次会った時でいいからさ。お願い」

光を拝むように手を合わせた後、杏奈が差し出したのは、可愛らしいパンダのキャラクターが描かれた封筒だった。

光が難色を浮かべた。杏奈は唇を尖らせて、持っていた封筒を光の手に押し付けた。

「もう。それくらいしてくれてもいいでしょー。春名君。シズカのカレシなんだしい」

渋々といった体で封筒を受け取った光に、笑顔を向けた後。杏奈はまたもや声をあげた。

「あ。そろそろ時間だ」

杏奈は左腕につけていたカラフルな腕時計に目をやって、確認するように頷いた。そして、光と空へ笑顔を向ける。

「話し聞いてくれてありがとう。ちよつとすつきりした。アタシこれから人と会う約束してんだ」

「あ、じゃあ」

そう言って、空は椅子から腰を浮かせた。それに合わせて他の二

人も立ち上がる。そのまま、コーヒーショップの外へ出た。入口の脇で立ち止まり、挨拶を交わす。

「最後に二人に会えてよかったよ。アタシ、高橋君の顔超好きなんだー。春名君みたいなキレイな顔も好きだし。なんていうの？両手に花みたいなの？」

杏奈の邪気の無い笑顔に、空もつられて笑顔になる。

「訳わかんねーし。っていうか、最後って。また会おうと思えばいつでも会えるじゃん」

空の言葉に、杏奈はそうだねと返した。そのまま、手を振って空たちは杏奈と別れた。背を向けた杏奈の姿が小さくなっていく。

「あっ」

空は小さく声を上げ、胸を押さえた。

「どうした？」

光に声を掛けられ、空は首を横に振る。

「何でもない」

ほんの一瞬、嫌な予感が空を襲ったのだ。

空は、慌てて頭を振って。その予感を追い払った。

第二十二章 容疑者

海と別れた後、私市はその足で署に戻った。二時間ほど抜けさせてもらっていたのだ。結局、二時間を少し超えてしまったが。

「おう、私市。戻ってたのか。どうだ、進展あったか」

「ないですねー、残念ながら。虻さんの方は？」

入口から顔を覗かせた中年刑事に質問すると、彼は私市を手招きした。

「ちよつと来いや。面白いもんがみつかったぞ」

面白いもんとは、なんぞや。

頭にそう疑問を浮かべながら、私市は虻さんの広い背中を追った。

別室のドアを開けると、二人の刑事が椅子に座って、小さなテレビを見つめていた。

その二人の内の一人、新人の河合が気配を感じたのかこちらを振り返る。

「ああ！ 私市さんっ。勝手にいなくならないでくださいよー。俺迷っちゃったっすよ」

恨みがましい目で見上げられ、私市はふやけた表情を見せた。実は、私市は河合と一緒に聞き込みに出かけたのだが、墓参りへ行くために彼の隙をついて、抜け出したのであった。上司の許可は取っていたが、河合に説明するのが面倒くさかったのだ。

「ははは。君が勝手に迷子になったんだろう。こうやって再会出来たんだから、ま、良しとしようや。で、何見てるんですか？ 梶谷さん」

私市は話を逸らすべく、河合の横に座る梶谷に目を向けた。視界の片隅に、納得いかない顔の河合が映るが、気にしないことにする。

「ああ。石井睦子の家の近くにあるスーパーの監視カメラの映像を借りてきたんだ」

私市の質問に答えた梶谷は、細面の顔に細く鋭い目が印象的な男だ。私市より六つ上と聞いたことがあるので、年齢は三十三歳だろうか。今日は珍しく眼鏡をかけている。

「で、なんか面白いもんでも映ってたんですか？」

私市が二人の後から腰をかがめて、テレビに顔を近づけると、その横で虻さんが頷いた。

「まあ、見ろや。おい、河合のボウズ。ちゃっちゃと回せや」

「ぼ、ボウズって言うのやめてくださいよ、虻さん。巻き戻しっすね。分かりました」

拗ねた顔で河合は小さく唇を尖らせた。声も小さかったのは、虻さんが怖いからだろう。

河合の操作で、巻き戻しされたビデオテープが再生される。

どこかの駐車場が映っていた。その手前にある道も映っている。商品を納品に来た車などを映すために設置されている監視カメラの映像だろうか。

時刻は夜の九時を過ぎている。そうと分かるのは、画面の右下に時刻がしっかりと表示されていたからだ。

暗いが、街灯や店舗に備え付けてあるライトのおかげで、それなりに周りがよく見える。

「人っ子一人通りませんね」

しばらく見て漏らした感想に、虻さんが反応した。

「河合、お前、回しすぎたんじゃねーだろうな」

「だ、大丈夫っすよ。もうすぐ、もうすぐ映りますから」

焦ったように、立ったままの虻さんを見上げて上ずった声をあげる。そんな河合の様子に口元を緩めてから、私市はテレビの画面に視線を戻した。

その時である。画面の左端から女性の姿が現れたのだ。顔立ちや背格好から石井睦子であることに間違いないと思われた。

彼女はどうか、ケータイ電話で通話中のような。特に急ぐ気配も見せず、ゆつくりと画面の中を通過していった。

「こんな人通りの少ない道をわざわざ通らなくても、あの家ならもうちよつと明るくて大きい道があっただろうに」

つい、そう呟いた私市に、梶谷は頷いた。

「おい、来るぞ」

蛇さんが突然声を上げた。私市は、画面から逸れた意識を戻した。
「あ、こいつは……」

私市は画面の中に現れた人物に、見覚えがあった。
数日前に話を聞いた関係者の一人だ。

名前は植田和樹。二十歳の大学生で、石井睦子の元恋人だった。

「何でこんなところに、この時間は確か友人と会っていたんじゃない？」
「そうっすよねー。おかしいっすよね。私市さん」

河合が眉を寄せている。彼も一緒に話を聞きにいっていたのだ。
植田の友人にも事実確認を行っていたのだが。嘘をついていたというのか。

私市はテレビ画面から視線をはずし、眉間を指で揉みながら声を上げた。

「蛇さん、ニンドウしますか？」

「ああ。だな。課長には俺から言っとくから河合と二人で行って来い」

「はい、了解です」

勢いよく立ちあがった河合は、早速ドアへ向かう。私市はゆつくりと腰を上げてその後を追った。

植田和樹の自宅は石井睦子の自宅から五キロほど離れた場所にある。

質素なアパートの二階。二〇一号室が植田の部屋だった。

平日の昼間だが、彼は在宅していた。

部屋から顔を出した植田は、ドアノブを掴んだまま、胡散臭そうな顔で私市たちを見る。

彼は茶色く染めた、少し痛んだ髪に指を突っ込んで、頭を掻きながらあくびをした。

「あー。刑事さん。なんか用ですか」

「ああ。またちよつと聞きたいことがあってね。できれば署までご同行願えないかと思ってね」

「はあ、まあ。いいですけど」

あつさりと植田は頷いた。ちよつと待っててくださいと言い置いて、彼は部屋へ入って行く。ドアが閉じないようにドアノブを掴んでいた私市は、我知らずそれを強く握り締めた。

傍らで、河合が息を飲む音が聞こえる。

二間続きの部屋が彼らの視界に入っていた。半分ほど閉められた襖の向こう。おそらく寝室として使用されている部屋の壁一面に無数の写真が貼ってある。

それは、全て、石井睦子を隠し撮りしたと思われる写真だった。

私市は取調室の椅子に腰かけていた。

机を挟んだ正面に、植田がだらしない格好で座っている。

「だからー。その時間はダチと一緒にだったつたつしよ。あいつ等にも聞いたんじゃないの。けーじさん」

自信満々にそう言った植田に、私市は写真を見せた。それは、監視カメラの映像をデジタルカメラで撮影したものである。荒いが、人の顔が判別できないほどじゃない。

「これは、君だよな」

植田はその写真にちらりと見やって、すぐに目を背けた。

「さー。どうっすかね」

足を組んで、身体を半ば斜めにして座る植田の態度は、決して良いとはいえない。

私市は机の上に置いた写真に手をやると、滑らせるように植田の方へ近づけた。

「もう一度よく見て、これは君だね」

ゆっくりとした口調の中に威圧を込めると、植田は渋々といったていで写真に視線を落とした。

「はあ、まあ。俺っすね」

頷く植田に、間髪入れずに次の質問をする。

「そう。じゃあ、これがどこだ分かる？」

「さあ？ 暗いし良く分かんないっすね」

私市は、机の上に身を乗り出して、笑顔を作った。

「これは、石井睦子さんの家の近くにあるスーパ―の裏道だ」

無言で、植田は私市に視線を向けた。顎を引き、俺は何もしゃべらないぞと言っているかの様だ。私市は写真の一部を指さした。

「日付を見てくれ、小さいけど見えるだろう。これは石井睦子さんが亡くなった日だね」

覗きこむようにして、植田を見るが、彼は返事をしなかった。

私市は嘆息して、話しを続けた。

「この時間、九時二十八分。この時間は君、友達といたということになっているけど。どうして、こんなところを歩いていたんだい？」

植田は口を開かない。

「お友達の姿は見えないようだけど。虚偽の証言をすると、どうなるか知ってる？」

あくまでにこやかに話しをする私市が、薄気味悪く見えたのだろうか。植田は両手で頭を掻くと、その手をテーブルの上につけて私市を正面から見つめた。

「だって、しょーがねーじゃん。アイツ俺のこと振りやがったんだぜ。散々貢いでやったのにさ。アイツは俺のモンなのに。自由にな

りたいとかぬかしやがって」

「ふむ。それで、殺した」

その言葉に、植田は目を見開いた。

「ま、まさか。俺は殺ってねえよ！ だから嫌だったんだ、言うの。俺は、アイツのあとつけてただけだよ。アイツ。電話しても会ってくんねーし。だったら、話す隙狙うしかねーじゃん」

私市はテーブルから身体を離して、背もたれに体重を預けた。腕を組む。

亡くなる数日前から、石井睦子は誰かにあとをつけられていると言って怯えていたと、周囲の人間から証言を得ている。あとをつけていたのは、どうやら彼で間違いなさそうだ。

「で、結局話はできた？」

その問いに、植田は力なく首を横に振った。

「いや、途中で見失っちゃった。アイツん家の近くまで来た時、アイツ急に走りだしちまって、まかれた。アイツも馬鹿だよな！。逃げなきゃ死なずにすんだかしんねーのに」

植田は片手の肘をテーブルに付き、その手の上に額を乗せた。

その姿を図るように見ていた私市の耳に、ノックの音が聞こえてきた。事情聴取に立ち会っていた刑事がそのドアを開ける。私市はその刑事に呼ばれて立ち上がった。

ドアの外へ出ると、相も変わらず厳めしい顔をした虻さんの姿があった。

横に大きい背の低い虻さんを、私市は見下ろす格好になる。

「で、どうだ。やつこさん。なんか吐きそうか？」

「さあ、どうでしょう。まだ分かりませんね」

そう言うつと、ふむと唸って、虻さんが顔を上げた。

「おい、私市ちよつと変われや。俺が話を聞いてみっから。その間に飯食ってこい」

言われて、腕時計に目を落とすと、午後五時三十分を回ったところであった。

定時が五時三十分であるから、今日も残業決定である。

私市は虹さんの言葉に甘えることにし、自分の席へ向かうべく歩きたした。

第二十三章 また……

暗い河川敷を彼女は進んだ。

連れはその後についてきているはずだ。

ポツンポツンとある街灯の光は、ここまでなかなか届きにくい。

しかし、月明かりのおかげでまったくの暗闇ということはない。

夕立があつたせいだろう。ミュールを履いた足に当たる草が濡れている。踏んだ草が少し滑って歩きにくかつた。

足を止めて、連れと会話を交わす。

必ず白状させてやると彼女は思っていた。

許さない、許してやるものか。

自分は知っているのだ。何もかも。

憎かつた、大事な友人を殺した目の前のこの人物が。

警察になど突き出してやらない。

一生、自分に弱みを握られて生きていけばいいのだ。

死ぬまで苦しめてやる。

憎しみをこめて、目の前の人物を睨んだ。

暗い感情に身を投じてしまった彼女の目に、明るい光が入ることはもう、二度となかった。

何をする気も起きず、海は自室のベッドで横になっていた。

午前十一時を少し回ったところである。パジャマを着替える気も起きない。

昨日の私市の言葉が、ずっと頭に残っていた。

『君は、春名君が必要なんだろう』

と、いうその言葉が。

必要だと即答できなかったのは、躊躇いと驚きがあつたから。

海はいつも人と関わる時、一線を引いていた。それは血を分けた兄弟である光も空も同様だった。親しく会話を交わしていても、これ以上好きになつてはいけない、近づいてはいけないとストップをかける自分がいる。

それなのに、私市の言葉で気づいてしまった。

自分が光を必要としていると、気づいてしまった。

だが、必要だと口にしてしまえば、失うのが怖くなる。

光は大事な存在だ。もちろん同じように血のつながった空も。それでも、やはり怖いのだ。

大事な人を失った時のショックは、嫌というほど経験しているから。

大事な人ほど、簡単に海の前からいなくなる。

自分が必要としている人間は、自分のことを自分ほど、必要としていないということを知っているから。

海は寝返りを打った。

その拍子に、ベッドの脇に置いた携帯電話が目に入る。その時、その携帯電話が光を発した。通話ボタンを押すと、突如大きな声が耳を打った。

『かーいー。暇、遊んで』

開口一番それかと、思わず突っ込みたくなる。

『空やな？ 今日家の手伝いする言うてなかったか』

そう尋ねると、少し間を開けて空が答えた。

『んー。実はさあ。お盆休みの忘れててさ。宿題全部終わっちゃまってるしい。親は商店街の皆と温泉旅行に出かけちゃったし。暇なんだよー』

駄々をこねるような言葉に、海の口元に笑みが浮かんだ。暗い気分が少し飛んだ気がする。

「ええよ。どうする？ 昼飯でも食いに行くか？」

その言葉に、元気な返事が返ってきた。

それはもう、思わず携帯電話を耳から遠ざけたほどの大声だった。

駅前のショッピングモールの中で、ラーメンを食べた。ごつてごつてスープと超さっぱりスープが選べる有名なチエーン店だ。そこですっかり満腹になった二人が、店から出ると、海が呼びとめられた。空と二人、その声の方へ振りかえる。空には見覚えのない、同年代の男性二人がこちらに向かって手を振っていた。一人は黒ぶち眼鏡をかけたインテリタイプ。もう一人は爽やかなスポーツマンといった印象を空に与えた。

「おー。柏木と浅川やん。偶然やな」

海はイエーイと二人それぞれとハイタッチを交わす。

空にスポーツマンという印象をもたれた柏木が、にこやかな笑みを空に向けてきた。

「お、何、紫藤の彼女？」

その言葉に、海は慌てたように手を上げたが、空が口を開く方が早かった。

「彼女、だとお。誰が女だこるあ！」

大音声が辺りに響く。

かなり驚いた顔をしている浅川の横で、柏木が平然と、空の方へ手を伸ばした。

「あ、本当だ。胸ないや」

空の胸辺りに手を置いて、柏木が笑顔を作った。それを見ていた海と浅川が、凍りついたように動きを止め、表情を歪める。

空は握った拳を震わせて、柏木の尻を蹴りつけた。

痛いつと大声を上げた柏木に、腹でなかったことをありがたく思えと言いたい。

「うう。痛ってーな。この蹴りはさすがに女じゃ無理だわ」

はははと片手で尻をさすりながら、爽やかに笑う柏木だった。まったく懲りていない。空がまたも拳を震わせている。

空がまた暴力沙汰を起こす前に、海が声を上げた。

「あー、あの。あれや。ホレ、空。こっちの二人は俺の中学ん時のダチでな。浅川と柏木」

空は、不機嫌な顔で柏木と浅川に視線を送る。浅川は苦笑いで少しずれた眼鏡をなおした。その横に立つ柏木は満面の笑みだ。

「で、こっちは高橋。高校の同級生やねん」
「よろしく」

柏木が爽やかさを發揮して、手を差し出したが、空はその手を払って海の背後に隠れた。まるで威嚇するかのように、海の後ろから半分顔を出して柏木を睨む。

柏木は差し出した手を、頭にやった。

「あはは。嫌われちゃったかー」

「あー。あの、せっかくやし。どっかで茶ーでもするか」

海の提案で、ショッピングモール内にあるコーヒーショップでお茶をすることになった。

それぞれに買ってきた飲み物を持って、席に着いた後。海と浅川は、柏木に空へ謝罪させた。熱しやすく冷めやすい空の性格が、こういうときには良い方向へ働く。柏木の謝罪を受けて、空の機嫌が少し直ってきたので、しばらく取りとめの無い話題で話に花を咲かせることができた。

「そう言えばさー。紫藤知ってる？ 中学ん時の同級生の女子が、この間死んだこと」

話題の切れ間、浅川がそんなことを言い出した。

「アー知ってる。石井だろ。俺も聞いた」

柏木が頷く。

「ああ、知っとるわ」

心なし、声のトーンが下がったことに気付いた空は、海にそつと

視線を向ける。表情はいつもと変わらない。

「俺聞いたんだけどさ、犯人。石井の元彼らしいぞ」

浅川が声を潜めてそう言った。空は驚いて、浅川に目を向ける。

「え？ マジかよ。そんなのニュースでやってたっけ」

空の言葉に、浅川は首を横に振って見せた。

「違う。俺の兄貴の友達の従兄の妹が友達の友達に聞いたらしいんだけどさ」

「随分遠回りしてんな」

海は性分なのか、突っ込みを入れる。浅川はあからさまに顔を顰めた。

「いいんだよ。そこは流せっつーの。で、その兄貴の従兄の友達の妹がさ」

「さっきより減ってね？」

今度は柏木が突っ込みを入れた。空も確かにさっきと違うような気がすると思う。話の腰を折られた浅川は、黒ぶち眼鏡の軽く押し上げて、少し不機嫌な声を出した。

「だから、いいんだよ。とにかく、その石井の元彼が警察に連れて行かれる所見たんだってさ」

「へえ」

空は海と顔を見合わせる。

犯人が石井の元彼であるならば、悪戯メールと石井睦子の死は関係がなかったということになる。

「そういえば、二人ってさ、海と同じ中学だったってことは、桜田さんって子のこと知ってるんだよな」

思いつきで、空は二人に話を振ってみた。柏木と浅川は顔を見合わせる。

「あー。あの子もなー。可哀相だったよな。可愛かったのに」

「俺は同じクラスになったことないけど、知ってるぜ」

二人それぞれの答えに頷いて、空は聞いてみることにした。

「その子、自殺したって本当？」

「またも二人は顔を見合わせた。」

「あれ、事故じゃなかったんだっけ？」

「柏木が問えば、浅川が首を横にふった。」

「いや、結局自殺でかたがついたはずだよ。遺書も何もなかったし、事故か自殺か判断難しかったらしいけど」

「浅川はそこまで言っつて、アイスコーヒーを啜った。」

「桜田の親が虐めがあつたんじゃないかって、学校側に問い詰めに来てたーとか、聞いたことある」

「その言葉に、柏木も頷いた。」

「ああ、それは俺も聞いた。実際虐め、あつたらしいし」

「それは知っている。虐めていた本人たちから話を聞いたのだ。だが、そんなことは口にできないので、空はただ頷いた。」

「へー。そうなんだ」

「それにしても、桜田の噂って他校の生徒にまで伝わってんだなあ」
「どこか関心したように、柏木が言った。」

「え、ああ。まあね」

「しどろもどろになる空であつた。思わず助けを求めるように海に目を向けた空は、眉を顰めた。その表情を目にし、柏木や浅川も海に視線を送る。」

「海は心ここにあらずと言ったていで、窓の外に視線を向けていた。こちらの話など耳に入っていないかのような。」

「かーいー。お前人の話聞してる？」

「空が海の肩に手を置いて軽く揺さぶった。」

「我に返ったように、海は瞬きを繰り返して空に顔を向ける。」

「え？　なんか言っただ？」

「その言葉に、浅川が苦笑を洩らす。」

「まただよ。お前クラス会の時もぼーっとしてたよな」

「なんだ、夏バテか？」

「少し心配そうに声をかける柏木に、海はイヤイヤと片手をあげて左右に振った。」

「ちゃうちゃう。ちよつとだけ考え事してただけやから」

「ふーん。何、女の子のことかよ」

からかうような口調で浅川が問う。

「何？ 恋煩いか！ 紫藤。話せよ」

柏木が浅川の話に乗る。慌てて否定している海の様子がおかしくて、空は笑った。

だが、頭の隅で、何かが変だと思っていた。

これから服を見に行くという柏木達と別れた後。空と海は家電製品の置かれたフロアを歩いていた。大きなテレビが並ぶ売り場の横を通っていたとき、海が突然歩くのをやめた。

「なあ、空」

「ん？」

一メートル程先を歩いていた空が、その声に振り向くと、海はどこか思いつめた表情を見せていた。

「俺、お前が好きや」

「……」

空は驚いた表情で、しばらく海を凝視した。

その後、口元に手をやって、一度視線を上に向けた後、海に目を戻す。

「何、恋煩いの相手って俺」

からかうような口調で、自分を指さす空に、海は無然とした顔を向ける。

「あほ」

空は、海との距離を縮めると、彼の目を覗きこんだ。

「ゴメン。俺も好きだよ」

そう言ってニッと笑ってやる。海はあからさまに安堵の表情を浮かべた。

「って、何この会話」

どこか照れくさくて、空はそう言って笑った。だが海の表情はすぐに暗くなる。

「どうした？」

また海の目を覗きこんだが、海の視線は逸れて行く。

「光は……」

「光？」

呟くように言われた言葉を、確認するように繰り返す。

「光はどうなんやる」

「どうって、どういう意味？」

尋ねた空に、海は首を振って見せた。

そして、不意に空に抱きついてくる。

「ちよっ！ これはさすがに周りの視線が痛いつて、海！」

空にしては抑えた声を上げて、周りをうかがいながらも海を引き剥がそうとする。平日の昼間とあって、周りに客が少ないのがせめてもの救いか。二人にあからさまに好奇の視線を向けてくる者もいれば、すぐに視線を逸らしていく者もいる。

空は、いい加減にしろと海の肩を繰り返し叩いた。その動きを止めたのは、海の一言が耳に入ったからだ。

「なんか、もう疲れた」

空の肩に額を乗せて呟かれた言葉。

珍しい海の弱音を聞いて、空は海に視線を向ける。肩に額を乗せられているせいで、空には海の顔が見えない。

俺、もしかして甘えられてる？ そう思っつて、空は片手を海の背にあてて、ばんばんと叩いた。

しばらく周りからの好奇の視線に耐えた後。そろそろ行こうかと告げようとして、ふとテレビから聞こえてきた声に気を取られる。

近所の川の名前が、テレビから聞こえてきたのだ。そちらに目を向けると見覚えのある風景が映っていた。何度か足を向けたこともある、すがわ栖川という名の川だ。

「海、栖川映ってる」

空は海を揺さぶって、テレビの方へ顔を向けさせた。知っている場所がテレビに映っているのは、変な感じがする。

「……未明。川の中で女性の遺体が発見されました」

アナウンサーの声とともに、空と海のよく知る人物の名前が被害者として、テレビ画面に映し出された。

川崎杏奈。

画面に映った名はそれだった。

第二十四章 次のターゲット？

ショッピングモールの電化製品売り場で、ニュースを見た直後。風見から海へ、呼び出しの電話がかかった。

空と二人、風見の家に行くと、そこには彼女の他に由香と静の姿があった。二人とも、意気消沈としている。

海は、由香と目があった。彼女の目にうつすらと涙が溜まる。

「紫藤くん。アンナが、アンナが……」

声を詰まらせた由香に、海が慌てたように走り寄った。

「君島さん」

肩に手をかけようとした海よりも、由香の動きの方が早かった。

由香は縋るように海に抱きつき、声を上げて泣きはじめた。顔を歪めて由香を見た海は、囁くように声をかける。

「うん。辛いよな。ええよ。いっぱい泣いたらええから」

海は、泣きじゃくる由香の頭に手を置いた。

「高橋君ちよつと」

名を呼ばれてそちらを見ると、風見が片手でドアを開けて、空を手招きしている。部屋の外には静の姿も見えた。

空は一度海たちに目をやった後、風見に続いて部屋を出た。

ドアを閉めた風見が、暗い表情で空と静を交互に見る。

「ゴメン。しばらく、二人にしてやってくれないかな」

風見は閉じられたドアに視線を向けた。

「由香、相当まいってるから」

悲しげな声音に、空も胸が締め付けられる。杏奈とは、昨日会ったばかりだったのだ。またいつでも会えるだろうと、別れ際にそう言ったのに。

もう、杏奈に会うことはできない。

あの無邪気な笑顔を見ることは、もうできないのだ。

そう思うと辛かった。

最後に見た彼女の、どこか寂しそうな表情が思い出される。たった二度会っただけの空でさえ、悲しいのだ。中学時代ずっと一緒にいた友達なら、なおさら辛いだろう。

「君島さんって、やっぱり海のこと好きなんだ」

気を紛らわせるために言った空に、風見は少し笑顔を見せた。

「そう。紫藤には内緒ね」

そう言っただけで人差し指を唇にあてる。

そんな風見に、空も微笑み返す。そして、ふと静のことが気になった。彼女もまた、亡くなった石井睦子や川崎杏奈に近い友人だった。そう気付いたのだ。

今日も、静は以前と変わらず大人しい格好をしていた。白いブラウスの上に水色の七分袖のカーディガンを羽織っている。その肩にはお下げにした黒髪がかかっていた。

「あの、伊藤さんは、大丈夫？」

尋ねた空に、悲しげな笑みを見せて、静は口を開いた。

「まだ、実感わかって」

「だよな。俺もまだ信じられない。昨日会ったばかりだし」
そう言つと、風見と静は驚いた顔をした。

「どうして？」

「アンナ。高橋君に何か言ってた？」

二人に詰め寄られて、空は思わず二人を制するように、胸の前に手を上げる。

「いや、あの。俺はオマケっていうか。光が呼ばれて一緒に。光に何か言いたかったみたいなんだけど、結局たいした話はしなかった」

空は、あえて言うこともないだろうと、杏奈が明かした、睦子の話は伏せておく。

「そうなの。春名君に」

「コウって誰？」

そういえば、風見は光と面識がなかった。遅まきながら、そのこ

とに気付く。

空は風見に、光は友人で、メールの件に関わっていることを伝えた。

「なあ。伊藤さんって、光と付き合ってるってホント？」

光に聞いてもろくな答えが返ってこなかったので、この際だと聞いてみることにする。静は一度風見に目を向けた後、少し間を開けて頷いた。

「ええ。私が逆ナンしたの」

小さく呟かれた言葉に、空は目を剥いた。

「マジで！」

「ちょ、高橋君。声大きいから」

慌てたように、風見が空を窘めた。空は風見にゴメンと謝る。その一方で、何故隠しているのだと、光を恨めしく思う。

光の顔を思い浮かべた時。何かがふと頭をかすめた。

封筒。

そうだ。パンダの封筒。

「伊藤さんに、川崎さんが手紙を渡そうとしてた！」

声を上げた空を、驚いた顔で見つめる二人。空は、静に目線を合わせると、もう一度同じことを口にした。

「川崎さんが、伊藤さんに手紙を残してる」

もしかしたら、そこに、杏奈の死の真相が書いてあるのかもしれない。

空はそう思った。

川崎杏奈が死んだ。

光がその事実を知ったのは、伊藤静からのメールだった。自室で携帯電話のニュースを検索すると、そのニュースは確かに存在していた。

嘘であれば良いという願いは、叶わなかった。

その記事には、杏奈の死が事故ではなく、他殺の線が濃厚であると書かれていた。

どうして、人はこんなに呆気なく死んでしまうのだろうか。

そう思うと溜息がでる。

何のために、人は生きて行くのだろうか。こんなに簡単に、命は奪われていくのに。

嫌な思いが、光を支配しそうになる。自殺しようと考えていた頃の気分が、また蘇ってしまいそうだ。

光は開いていた携帯電話を閉じて、目を瞑った。

昨日、杏奈と話していた時。彼女の様子はどうだったのか。何か見落としていることがあるのではないか。昨日の様子を頭の中で反芻する。杏奈は何かを隠していたように思う。光の質問にも答えなかった。

それが、杏奈の死の理由と関係があるだろうか。

そもそも、何故。杏奈は一度しか面識の無い光を呼びだしたのだろうか。

何故、睦子の話を由香や、静ではなく、光に話したのだろうか。

杏奈が何を考えていたのか、よく分らない。

それとも、由香や静には話せなかったのか。もしくは、二人ともその事実を知っているから、話す必要がなかったのか。

否、それは無いだろう。

彼女は、自分一人で仕舞っておくには重すぎたからと言っていたではないか。

光は座っていたベッドから立ち上がると、机に歩み寄ってその上に置かれていた物を手にした。

それは昨日、杏奈から託されたものだ。静にあてた手紙。

別れ際、杏奈は『最後』という言葉を使った。『最後に会えてよかった』と。

杏奈は自分が死ぬと予想していたのかもしれない。

あの言葉に違和感を覚えていたのに、もつとちゃんと話を聞いていれば、今のような事態は避けることができたかもしれない。

後悔が、光の胸に湧きおこる。

とりあえず今は、この手紙を静に渡さなければならぬ。

光は静と連絡を取るべく、携帯電話に手を伸ばした。

光からの電話を受けた静は、風見家にいた全員と、光と待ち合わせした場所へ向かった。場所は近くの公園だ。夕焼けに染まった街の中を、無言で進んだ。日中の暑さは随分と弱まり、少し涼しい風を運んでくる。

「光！」

待ち合わせ場所の公園に着いて、いち早く光の姿を見つけた空が声を上げた。光は遊具場の端に設けてあるベンチに腰かけていた。大人数で来たことに驚いた様子は見せず、ゆっくりと立ち上がる。そんな彼の元へ全員で駆け寄ると、光は静に封筒を差し出した。空は知っている。それが、杏奈から託された封筒だということを。

「これ、川崎さんから預かった」

静は、それを受け取ると、ゆっくりと封を切った。

中には一枚の便箋が入っていた。封筒とお揃いのパンダが描かれた便箋だ。皆が見守る中、便箋に目を落とした静の表情が歪んで、どこか驚いたように光に視線を移した。

「春名君。どういうこと？ これ」

そう言っ、静は便箋を見えるように光につきつけた。

空もその便箋に書かれた内容が見える位置まで動いて、そこに書かれていた文字を目にし、驚いて光を見る。

光は眉間にしわを寄せ、少し困惑したような表情を見せる。

「春名君は全て知ってるって。おい、光。これってどういうことや」
便箋に書かれた内容を声に出して、海が光に詰め寄った。

海の言った通り、便箋には『春名君は全部知っている』それだけしか書かれていなかった。

「そうよ、答えて。春名君は何を知ってるの」

静が声を上げた。便箋を握る手に力がこもり、紙が音を立てる。

注目を集めた光は、ゆっくりと息を吐き出すと、いつもの無表情へ戻った。

「知らない。僕は何も知らない」

「嘘つくなや！ お前はいつもそうや。何で肝心なことを隠すねん！」

海は光の腕を掴んで、怒鳴った。光は冷たい目で海を見る。その視線に、射すくめられたように、海の腕の力が弱まった。それを見逃さず、光は海の手を振り払って、告げた。

「僕は何も知らない。それが事実だよ」

光と海の間で、冷たい視線が交錯する。

「もう、いい加減にしてくれよっ」

二人の間に割って入ったのは空だった。

「今こんなところでいがみ合ったって、何にもなんないだろ」

空の言葉に、光と海は互いの視線を逸らした。空はそんな二人の様子に、唇を噛む。

「ごめんなさい、私のせいなの。私のせい、ムッコもアンナも、私のせいで死んだの」

急に声が上がって、空たちはその声の主に目をやった。

風見の横で、顔を覆うようにして由香が泣きだす。

「由香、何言ってるのよ」

「そうよ、ユカ。ユカは別に悪くないわ」

静が、そう言って由香の肩に手をおく。由香は顔を上げて、静の腕を掴んだ。

「痛っ」

「シズ力は何も知らないからそんなことが言えるのよ！ 本当のと知ったら、シズ力もきつと、私を軽蔑する」

鬼気迫るような由香の迫力に、静も周りの皆も圧倒されていた。

そんな中、一人動いたのは光だった。由香に歩み寄り、静の腕を掴んでいた手ははずさせる。次いで、静の腕を取ると、あるうことが彼女のカーディガンの袖をまくりあげた。

現れた腕を見て、光は静に声をかけた。

「この怪我。どうしたんだ？」

彼女の腕には白い包帯が巻かれていたのだ。由香が静の腕を掴んだ時に痛いと言ったのは、由香が怪我の部分を掴んだためだったらしい。

静は、強張った顔を光に向ける。光が静の腕から手を放すと、彼女は捲くられたカーディガンをもとへ戻した。

「……本当は言いたくなかったんだけど」

静は自身の身体を抱くようにして、身をすくませた。

「昨日の夜、変な男に刃物で切りつけられて」

「えっ」

驚きの声を上げた空に、静が目に向けた。

「でも、見てもらったら分かる通り、大事には至らなかったの。近くを人が通りかかって、犯人は逃げて行ったから」

「それ、警察には言ったんか？」

海の言葉に、静は首を縦に振った。

「一応。でも、捕まるかどうか」

「どうして黙ってたのよ」

風見の言葉に、静はゆっくりと由香に目を移した。

「だって、杏奈がこんなことになって、ただでさえ動揺してるのに、これ以上由香を怖がらせたくなくて」

「シズカ……」

由香はゆっくりと膝を折って、地面に座り込んでしまった。風見がその横に慌ててしゃがみこむのとはほぼ同時に、由香の声が辺りに響いた。

「私たち、殺されるのよ。きつと、殺される。ムッコも、アンナも

死んで。後残ってるのは、私と静だけだもの」

夕暮れの公園に、遊具や木々の長い影ができている。空たちの影もまた長い。その影が闇と同化するの、もう、わずかな時間を残すのみ。

第二十五章 謎の男

女性が倒れているとの一報が入ったのは、作日の朝、七時過ぎだった。

栖川という名の川に身体を半ば沈めた状態で発見されたこの女性は、まだ高校生だった。

駆け付けた捜査員の数名が、彼女の顔と名前を知っていた。

川崎杏奈。

先日亡くなった、石井睦子の友人だった。

聞き込みから戻ってきた私市は、額に浮いた汗を拭くこともせず、荒々しくデスクの椅子に腰かけた。

その横で、新人の河合が荒い声を上げる。

「あの時アイツを帰さなきゃこんなことにはならなかったのに」

河合の言葉を耳に止めたのか、紙コップのコーヒーを飲んでいた虻さんが顔を上げた。

「何だあ河合。おまえ、あの野郎が犯人だとも思ってたのか」

虻さんの言うあの野郎とは、数日前、任意同行した植田のことだろう。私市はデスクに肘をついて、その手に頬を乗せると、河合を見上げた。憤慨した表情が目映る。

「そうすつよ。あいつが犯人に決まってます。石井睦子に気持ち悪いほどの執着を持っていた植田です。彼女に、植田と別れるように勧めたのは川崎杏奈だったらしいです。それを知った植田が逆恨みして……」

興奮した河合の顔は赤くなっている。私市はそんな河合に、声をかけた。

「じゃあ河合は、今回のヤマは連続殺人だっていうのか」

「そうに決まってますよ」

荒々しく頷く河合に、冷静な声を投げかけたのは蛇さんだった。

「おいおい。石井睦子に関しちゃ、まだ殺人と決まった訳じゃねえだろうが」

「じゃあなんで、川崎杏奈は殺されたんです」

むきになって言い募る河合の肩に、私市は立ちあがって手を置いた。

「間違えるな河合。それを調べるのが俺たちの仕事だ。自分の思いこみで、周りを見失うな」

河合の顔を覗きこんで言うと、河合の目から興奮した色が薄らいでいった。

「すみません」

悔しげに、小さく呟く彼の肩から手を放して、また自分の席に腰を下ろした。

私市とて、年若い少女の命が奪われたことに、腹も経てば、悲しみも湧く。もしも、自分たちが犯人の手に踊らされているのだとしたら。そう思うと、いてもたってもいられなくなる気持ちも分かる。だが、冷静に判断しなければならぬのだ。

捜査はまだ、始まったばかりなのだから。

私市は嘆息して、デスクの上に置いてあった写真に手を伸ばした。それには、川崎杏奈の遺体が写っている。全体を撮ったものと、局部的に撮られたものが数枚ある。手の傷を写した写真に目を落とす。ふと違和感を覚えた。

傷にたいしてではない。この傷は、おそらく川原の石か、近くに生えている草の葉か何かでついた傷だろう。

私市が違和感を覚えたのは爪だった。

妙に短い。綺麗にマニキュアの塗られた爪だが、何というかおかしいのだ。

「なあ、河合くん」

「なんつすかー、私市さん。私市さんにクンとかつけられると妙に嫌なんすけど」

先ほどの興奮はどこへやら。河合は沈んだ声で答えた。

「これ、どう思う？」

「どうって、傷つすよね」

私市は、写真を覗きこんでいる河合の額を、人差し指ではじいた。いわゆるデコピンというやつである。

額を隠すと、彼は涙目になって抗議の声を上げた。

「痛っ！ 痛いつすよ。何するんすか」

「何じゃないよ。違うだろ。爪だよ爪」

もう一度河合に写真をつきつけると、河合は唇を少し尖らせながらも、写真に目を向ける。

「爪……。何かこれ、模様が途中で切れてませんか？ すっげえ中途半端な感じ。それに深爪つすよね」

「そうか。やっぱりそう思うか」

私市は写真を自分の前に戻して、頷く。

白で塗られた爪の下部にはストーンで花の模様が作られている。

その爪をよく見ると、上部が数ミリほどピンク色になっているのが分かるのだ。数ミリだけピンクにするのはかなり難しいだろう。これを塗った時には爪が長かったと仮定するほうが自然だ。

「普通は、こういう。何て言うんだっけ」

爪を指さしながら河合を見ると、河合は簡単に答えた。

「ネイルつすか？」

「そう。それをしている時は、つけたまま爪を切るのが普通なのかな」

「いやー、普通はとってからじゃないつすか？ 切りにくそうじゃないつすか。つか、ネイルとかやってる子だったら、普通はこんなに短く切らないつすよ」

河合の意見に頷き、私市は呟いた。

「じゃあ、何で彼女の爪はこんなに短いんだろうな」

河合は半ば呆れたような調子で声を上げた。

「私市さんって、いつも妙なところに目をむけますよね。その爪で事件の真相に迫れるんすか？」

私市は肩をすくめた。

「いや、たんに気になっただけだ」

私市の言葉に、河合は、あ、そうっすかと、気の抜けた声をだした。

だから嫌だったのだ。

由香は、足早に人通りの少ない夜道を通っていた。

間隔をあけて設置された街灯に、小さな虫が寄り集まって飛んでいる。羽音が耳触りな音をたてていた。

家から一步も出たくなかったのに。

母親の使いで、醤油を買いに行かされた帰りだった。

自分は狙われているのに。行きたくないと言ったのに、母親は相手にしてはくれなかった。

由香は先ほど届いたメールの内容を思い出していた。

『ムッコも死んだ。アンナも死んだ。次はユカ。あなたかもしれない……』

由香は手にしたスーパーの袋を握り締めた。近所のスーパーがお盆休みで、少し遠くのスーパーへ足を延ばさねばならなかったのだ。

由香はさらに足を速めた。

次に狙われているのは自分だ。

由香はそう確信していた。

そうでなければ、あんなメールは来ないはずだ。まるで、由香をあざ笑うかのようなあの文面。

由香は顔を顰めた。

民家の間の細い路地。夕飯時も過ぎたせい、人通りがほとんど

ない。

怖い。

何度か、後ろから誰かにつけられているような気がして振り向いた。

だが、誰もいない。

気のせいだ。気のせい。少しナーバスになっているだけなのだ。

由香は自分に言い聞かせた。

その時だった。

またも、足音を聞いた気がして、由香は足をとめた。振り向くと、やはり人の姿は無い。

「気の、せいよ、ね」

声にだして自分を励まし、また前を向いて歩きだす。

だが、歩くたびに、ゆっくりとした足音が聞こえてくるのだ。

後ろを振り向くと、人の気配を感じた。背筋が一気に冷え、鳥肌が立つ。

さらに足を速めた。後の足音の間隔も早くなる。

嫌、嫌、嫌！

まだ死にたくない。

誰か助けて。

由香は必死に走った。持っていたスーパーの袋が大きく揺れて、身体にぶつかり、跳ね上がる。静かな路地に響き渡る足音。由香はスカートのポケットから携帯電話を取り出して、電話をかける。

耳にあてた携帯電話から、コール音が響く。

お願い、出て。

だが、電話はつながらない。後ろを振り返る。人影が見えた。顔立ちまでは分からないが、きつと男性だ。

由香は電話を切ると、前を向いて走った。

暗い路地の先に明るい光が見える。

ここを抜ければ大通りに出る。そこにさえたどり着ければ、自分はおもう大丈夫だ。

明るい光が由香の胸に希望を見出した。

由香は走った。懸命に。

そして、大通りに走り出た。

「危ない！」

どこからか聞こえた叫び声。

その声に驚いて立ち止った瞬間。

由香は白い光に包まれた。

食事を終えて、部屋に來ると置き忘れていた携帯電話が光を点滅させていることに気付いた。電話を手にとると折り畳み式のそれを開いて中を確認する。

着信アリという表示に、着信履歴を見れば、一時間前に君島由香から着信があったと知れた。

電話をかけなおしたがつながらない。

何かあったのだろうか。

不安が海を支配した。二度、三度、電話をかけなおすがつながらない。焦りが募る。

四度目に電話をかけなおそうとした時だった。

ディスプレイに現れた『風見』の文字に、通話ボタンを押した。

「もしもし、風見？」

『紫藤、どうしよう。由香が、由香が』

焦った声音が海の耳に届く。

「風見、どうしたんや。とにかく落ち着けて」

『由香が、車に撥ねられたって……』

海は服の胸元を掴んで、息をのみ込んだ。

「嘘やろ、それで、君島さんは無事なんか？」

『分からないの。由香に連絡取ろうと思って、ケータイでないから、家に電話して。そしたら、おばあさんが出て、由香が車に轢か

れたって教えてくれて』

海は言葉が出てこなかった。一時間前に由香からきた電話。あの電話に出ることができれば、由香が車に轢かれる事態を避けることができたのではないか。

そんな思いが海の胸を掠めた。

『はつきりしたこと分かったら、また教えてくれるっておばあさんが。ねえ。紫藤。由香死んだりしないよね』

風見の声に涙が滲んだように思えた。海は答えようとして口を開くが、声が出てこなかった。不安が広がる。悪い想像が頭の中を占拠していく。

海は首を大きく横に振って、想像を追い払おうとした。

「大丈夫や。風見。信じて待とうや。きっと君島さんは大丈夫やから」

海は自身にも言い聞かせるように、その言葉を口にしていた。

通話を終えて、海は持っていた携帯電話をベッドの上に放り投げた。

片手で額を押さえて、顔を歪める。

「信じて待とうって、嘘ばかり」

海は自嘲気味に口の端を上げる。

信じて待とう、言った自分が信じられないでいる。

海は知っていた。

信じていたって、運命は簡単に海を裏切る。

人は簡単に、海の前からいなくなるのだから。

第二十六章 邂逅

朝の病院は、診察待ちの患者が多いものだが、休診日とあって人影はなかった。時折医師と思われる白衣を着た人物や、看護師が行き来する姿が見られるのみだ。

ナースステーションで病室の番号を聞き、海は風見と連れだって二五号室へ向かった。

海の手には見舞の花束がある。

風見が、二五号室のドアを見つけ、ノックしようとしたときだった。

ドアが内側に開く。

驚いて、風見が道を譲るようにドアの前から身体をよけると、ドアを潜って病室から男性が二人出てきた。

男性の内の一人、眼鏡をかけたスーツ姿の男が軽く会釈して風見と海の前を通り過ぎて行く。

開いたままのドアに手をかけ、海は軽くノックをすると、返事が返って来る前に部屋に入った。

「あ、紫藤君」

狭い部屋の中、ベッドの上で半身を起していた少女が目を見開いた。

「やつほー。由香。来ちゃった」

ひらひらと手を振って見せた風見は、ベッドの脇にある丸椅子に腰かけた。

他に椅子はなさそうなので、その風見の横に海は立つ。

昨日、車に撥ねられた由香は、足を骨折したものの、それに比べれば大した怪我もなかったという。由香とぶつかった車が、法定速度を守っていたことが幸いしたらしい。

その連絡が入ったのは、今日の早朝で、それまで心配で眠れなかった二人は寝不足気味だ。

「ごめんね、わざわざ。今、お母さん着替え取りに行つて、お茶も出せないんだけど」

由香の頬には大きなガーゼがテープで止めてあった。

「由香。もう、本当に生きた心地がしなかったんだから。車に撥ねられるなんて、ボウっとしすぎよ」

目を細め、風見は少し頬を膨らませた。

「ゴメン。でも、あの時は本当に焦つてて……」

言葉の途中で、由香は唇を閉ざした。

海は続きを促す。

「何で、焦つてたん？」

海の声に、由香は顔を上げた。頬に手をやったのは、大きなガーゼを張った顔が気になったからだろうか。

「誰かに、つけられたの。それに、メールがきてて」

「メールつて？」

尋ねた海に、彼女は目を伏せて答えた。

「ムッコモアンナも死んだ。次は私かもって内容で。怖くて。さっき来た刑事さんに全部言っただけで、タベお使いに行かされた帰りに、男の人が後ろからつけてきて、走って道路に飛び出しちゃったの」

由香の言葉に、何やってんのよと言った後、風見は嘆息した。

「さっきの、男の人たちって刑事だったんだ」

風見がドアの方を振り返る。

「すれ違つたの？ 刑事さんと。私、刑事さんって怖い人だと思つてたけど、そんなこと無かった。私のこと、守ってくれるって」

どこか安堵したように、由香は言った。海はそんな由香から視線をはずして、俯きがちに声を発する。

「ゴメンな、君島さん。電話かけてくれたのに、出れなくて」

「え、いいよそんな。私が一方的にかけただけだし」

慌てたように声を上げた由香を遮るように、抑えた声音が部屋を通る。

「でも、俺を頼ってくれたんやろ？ それなのに……」

言葉を詰まらせた海に、由香は呼びかける。

「紫藤君。気にしないで。紫藤君にまで嫌な思いさせてごめんなさい」

顔を曇らせた由香に、海は慌てた。

「嫌な思いやなんて、そんな。俺が電話出てたら、君島さん、こんなことにならずに済んだんや無いかって、思っただけやから」

その言葉に、風見は溜息をついて海を見上げた。彼の背に平手で鋭い一発をお見舞いする。痛みを上げた海に、据わった目を向けた。

「何殊勝なことやってんの、紫藤らしくないわね。あんたがいつまでも過ぎたことをウジウジ悩んでたら、由香だって悩まなきゃならないでしょうが。ね、由香」

「う、うん」

風見の勢いに押されて、由香が頷く。海は困った顔で下を向いて、思い出したように手にしていた花束を由香に差し出した。

「ゴメン、忘れとった。これ、お見舞い」

「ありがとう」

とても嬉しそうに、受け取った花を抱き締める由香を見て、海も自然と笑顔になる。

「んー。アタシやっぱお邪魔だったかなあ」

頬を人差し指で掻きながら、声を上げた風見に、海は不思議そうな顔を見せた。

「何でやねん」

「これだよ。由香、これだよ？」

風見が海を指さして見せる。由香はうんと頷くのみだ。

海は久しぶりに、落ち着いた笑顔を見せる由香を見つめながら思った。刑事の言った、守ってあげるとい言葉が、由香を安心させたのだろうか。そして、自分は彼女を何一つ安心させてやれなかったという事実を思い知った。

顔に笑顔を張りつかせながら、海の気分は沈み行く一方だった。

日差しが容赦なく降り注いでいる。道にできた影は小さい。昼を少し過ぎたばかりだからだろう。

海は風見と別れた後、寄り道をした。場所は由香の家へ行く通りにある公園だ。

海はこの暑いのに元気に遊んでいる子供の姿を目の端に捉えながら、ゆつくりとした足取りで、木陰の下になっっているベンチを選んで座った。

この公園は、海が今の名字になる前に良く遊びに来ていた公園だった。

今から、八年前。

海はこの辺りに住んでいたのだ。

最初に、海を引き取ってくれた両親が死ぬまでは。

父親が殉職したのは、梅雨がもうすぐ開ける頃だったように記憶している。

葬式の日。

降り続ける雨のように、母親はいつまでも涙を流し続けていた。

あまり家にはいない父だったが、仕事へ向かう大きな背中が、海に憧れを抱かせた。

明るくて、いつも快活な笑顔を海に向けていたお父さん。

そんなお父さんが、なぜだか目を覚まさなくて。海はお母さんに聞いたのだ。

『お父さんはどうして目を開けないの?』と。

『お父さんはもう起きないの。死んじゃったの。海はお母さんを置

いていかないで』

そう言いながら、強い力で抱きしめられたのを憶えている。
今から思えば、もうあの頃から母親は少しずつおかしくなっていたのだろう。

父親の死から一カ月がたった頃。母親は何も手に付かないのか、いつもどこか遠くを見つめてぼうつとしていることが多かった。そうかと思えば、突然大声で海を呼んだ。海が姿を見せるとほっとしたように抱きしめる。

小さな海にも、母親の不安が伝わってきて、いつも母親の背を抱きしめ返した。

『大丈夫だよ。ボクはどこにも行かないよ』

まるで決まりごとのように、いつもその言葉を母親にかける。そうすると、お母さんが笑顔になることを知っていたからだ。

暑い、暑い日だった。

その日、海は友達に誘われて遊びに出掛けようとした。そんな海をお母さんは引きとめた。

『お母さんを一人にしないで』

心細そうな目をして、母はそう言った。

このところ、母親とずっと一緒に、少し鬱屈していた海は、外へ遊びに行くことを選んだ。

『大丈夫だよ、すぐに帰るから。ちょっと遊びに行ってくるだけ。ちゃんと帰って来る。約束だよ』

そう言ってお母さんに手を振って、海は家を出た。

今でもこの時のことを思い出すと、海の胸は締め付けられる。

何故、あの時外へ遊びに行くことを選んだのか。

どうして、すぐに帰らなかったのか。

母との会話は、あれが最後だった。

夕方まで遊んでしまった海が家に帰った時。

母は家で首を吊っていた。

母親が死んだ後。

海の家にはたくさんの大人がやってきた。お父さんの時と同じように、お葬式をやった。

お葬式の後。黒い服を着た大人たちは、海の家で海をのけものにして話し合っていた。自分のことを話しているのは分かったけれど、皆険しい顔で、海のことなど目には入っていないようだった。

自分の家なのに居場所がなくて、海は一人外へ出た。

そのまま、いつも遊んでいる公園にやってきた。

ベンチに座ると、地面に足がつかなくなる。ぶらぶらと足を揺らして、風に揺れる木々をただ眺めていた。暑くて仕方がなかったけれど、家にいるよりはましだった。

そんな時、海に話しかけてくる人がいた。

『斎藤。こんなところで何してるんだ』

そんな感じに話しかけられたと思う。目を上げると、大きな身体の男の人がいた。小学校の担任の先生だった。

『家にいたくなかったんだもん』

唇を尖らせてそんな風に答えた。先生は海の頭に手をやって笑った。

『頭が熱くなってるぞ。ほら、あそこのベンチに移ろう。木で影になってるから、ここよりは涼しいぞ』

先生に手を握られて、海は木陰の下にあるベンチに移った。

先生に缶ジュースを貰って、海はそれを一気に飲んだ。気付かぬうちに喉が渴いていたらしい。

『どうして、家にいたくなかったんだ？』

先生に聞かれて、海は隣に座る先生を見上げた。

『だって、ボクは邪魔なんだもん。みんなボクはいらないんだって。ボクはお父さんとお母さんの本当の子じゃないから、気持ち悪いん

だつて』

聞いていた話を総合すれば、たぶんそういうことだ。先生が何か言おうとして、口を開いたが、結局そのまま口を閉ざしてしまった。何も、言葉が出なかったのかもしれない。

『お母さんも、ボクのこといらなくなつたのかな』

『斎藤……』

『ボクが、早く帰るよっていったのに、遅く帰ってきたから。ボクのこと怒って、ボクをおいていったのかな』

海は地面を見つめて、地に付かない足を振った。

『だから、待っていてくれなかったのかな。ボクも連れてつてくれたら良かったのに』

大きな手が、海の頭を撫でた。

海は地面から先生に目を移す。先生は笑顔を見せた。笑顔なのに、悲しそうな目をしていた。

『先生は、おまえのお母さんが、おまえを連れて行かなくて良かったと思つてるよ』

『なんで？』

『先生は、おまえが死んだら悲しいし、辛い』

黙って先生を見つめる。蝉の鳴き声が聞こえてきた。風が木々を揺らし、蝉の鳴き声に交じって葉擦れの音を響かせる。

『おまえだって、お母さんが死んで悲しいだろ』

聞かれて頷いた。先生は満足そうに頷いたあと、もう一度海の頭を撫でた。

『おまえのお母さんが死んだのは、おまえのせいじゃないよ』

海は首を横に振った。少しだけ、涙に滲んだ目を上げる。

『でも、ボクは早く帰るってお母さんと約束したのに、約束破っちゃつたんだ』

だから。お母さんは居なくなつたんだ。

だから、お母さんはボクのこと、いらなくなつたんだ。

『後悔しているなら、もう後悔しないように生きればいい』

海の目をじっと見つめて先生は言った。海はただ、真面目な表情をした先生の顔を見つめる。

『約束を破ったのを悪かったと思っているなら、もう、約束を破らなければいい。過去を振り返ってばかりでは何も変わらない。おまえのお母さんは、きつとそれに気付かなかったんだろっな』

海はからになった缶を両手で強く握った。音を立てて缶が小さくへこむ。先生の声が頭の上からふってくる。

『だから、おまえは、お母さんの分まで、前を向いて生きなさい。天国で見ているお父さんとお母さんが笑って過ごせるように、安心させてあげられるように。生きて行きなさい。おまえはお母さんの二の舞は踏むな』

顔を上げて、海は小さく首を傾げた。

『なんか、よく、分かんない』

難しい単語が入っていて、その時の海には全て理解はできなかった。ただ、先生が励ましてくれていることは分かった。先生が、海に生きていてほしいとそう思っていることは伝わった。

海は先生を見上げてほほ笑んだ。

『ありがとう』という、言葉とともに。

子どもの泣き声が聞こえた気がして、海は遊具場に目を向けた。

小さな子どもが、どうやら転んだようだ。母親らしき人物が子どもを宥めた後、手を引いて公園を出て行った。

育ての親が死んだあと、自分を気にかけてくれる大人は先生くらいのものだった。

何の因果だろう。八年前。この公園で自分を慰めてくれた先生の子どもが、亡くなっていた。

自殺だと言われて、先生はどう思ったのだろうか。自分と同じように、暗い気分にならされているのだろうか。

「なあ、先生。先生は自分で言ったこと、憶えてる？」
ここには居ない先生に向かって、海は呟いた。
顔を上げると、木漏れ日が海の顔に降り注いだ。

第二十七章 次は

海から知らせを受けた空は、光とともに由香が入院する病院へ見舞いにやってきた。海と同行しなかったのは、光と海が互いに嫌がったからだ。

病室へ入ると、今までになく由香は穏やかな表情をしていた。

「来てくれてありがとう。シズカは、一緒じゃないんだね」

光の顔を見て由香は言った。光は相変わらずの無表情で、軽く頷いた。

「ごめんな。こいつ無愛想で」

空は用意された椅子に腰かけて、由香に笑顔を向ける。彼女もまた笑顔になった。頬に貼られた大きなガーゼは痛々しいが、前よりも元氣そうに見える。

「大変だったな」

空が言うと、少し表情に影が落ちる。

彼女は、事故に遭ったいきさつを語った。海たちに話したのと同じ内容だ。

「そのあとをつけてきた男って、犯人だったのかな。だったら、これだけの怪我で済んでよかったかも……あ、ゴメン」

空は言い終わる前に、自分が無神経なことを口走っていることに気づいて謝った。由香は慌てて首を横に振り、ベッド脇に置かれた棚に目を向ける。そこには小ぶりの箱が置いてあった。

「ううん。あ、お菓子もありがとう」

お見舞いとして持ってきたのは、可愛い箱に入ったクッキーだった。空の住む商店街の中にある洋菓子店の品だ。話を逸らそうとしてくれたのだろう。由香は思いついたように声をあげた。

「あの、朝は、紫藤くんも来てくれたのよ」

どこか嬉しそうに報告してくれる由香に頷いた時。抑揚の無い声が、空の横から聞こえてきた。

「君島さんに、聞きたいことがあるんだ」

「なあに？」

小さく首を傾げた彼女に、光は言った。

「本当のことを知ったら、シズカは私を軽蔑する。公園で、君はそう言っただけだ。あれはどういう意味？」

由香の表情が凍りついたように、空には見えた。震える手で口元を覆った彼女は、光の顔から視線を外した。何も言わない。しばらく、沈黙が三人を支配した。

「君が、メールの犯人と繋がっていることをさしているのか？」
「なっ」

何を言い出すんだと言おうとした。だが、その言葉を空は途中で飲みこむ。口を開いた空に、光がここは病院だと指摘したからだ。

思わず口元を押さえた空の横で、彼は淡々と言葉を続けた。

「君は、犯人に石井さんたちのメールアドレスを教えたね」

由香は目を見開いた。胸元へ持ってきた手で、服を強く握る。

そんなはずはないと、空は思った。彼女は人一倍あのメールに怯えていた。そんな彼女が犯人と繋がっているなんて、考えられない。あれが演技だったとしても言うのか。

由香はゆっくりと光に顔を向けた。

「アンナが言ったの？ アンナの手紙、春名君が全部知ってるって、こういうことだったの？」

光は黙したまま、由香を見つめた。そうすることで、肯定を表しているように見える。

せわしなく視線を動かした後、彼女は意を決したように口を開いた。

「私、怖かったの。エリからメールが来て怖かった。エリが死んだのは私のせいだから、エリが私に復讐しに戻ってきたんだと思った」
胸元を掴んでいた手を放して、由香は頬に手を当てた。

「そんなことあるわけないって、心の中で否定しても、怖くて怖くて仕方なかった。三人のアドレスを教えてって言われたから、教え

た。ユカは友達だよねって、そう言われたら教えないわけにはいかなかった」

由香の目から涙がこぼれた。

「だって、こんなことになるなんて思わなかった。ムッコたちが死んじゃうって分かってたら、あんなことしなかったのに」

声を上げた由香に、光はハンカチを差し出した。彼女は驚いた表情で光を見る。

「君がメールアドレスを教えたから、石井さんたちが死んだわけじゃないよ」

由香は恐る恐るといったように、光からハンカチを受け取った。

「俺もそう思う。でも、ちゃんと謝るべきだとも思うよ。俺は」

空はそう言って立ちあがった。

「ごめんな。俺、帰るわ。光、行くぞ」

空は、そのまま背を向けて、病室を後にした。

病院を出ると、とたんに熱い空気に包まれる。流れてくる汗をぬぐうこともせず、空は歩き続けた。

しばらく歩いたとき、後ろから光が空を呼ぶ声が聞こえた。

振りかえると、数メートル先で、光が壁に手をつけて前かがみになっている姿が目映る。空は、慌てて走り寄った。

光は荒い息を繰り返している。

光の足が悪いことを失念していた。

速足で歩いていたら空を追いかけようとして、無理をしすぎたのかもしれない。

「おまえ、速いよ」

「ごめん」

上目づかいで謝ると、光が嘆息した。

「空、怒ってるだろ」

その言葉で、眉間に皺が寄った。ぐっと拳を握る。

「怒ってるよ！ 当たり前だろ」

あのまま病室にいたら、空は絶対に由香を怒鳴りつけていた。彼

女はずっと友達を裏切り続けていた。そうしていることで、自分も傷ついているくせに。

だが、空が彼女に対して怒るのは違う気がした。彼女を怒る権利があるのは、死んだ二人や、静であって空じゃない。

だから、病室を出た。

「あの子は、自分の友達を裏切ってたんだ。ずっと。でも、可哀相だとも思うよ」

光は軽く、口の端を上げた。

「空らしいよ」

「何だそれ」

「言葉のまんまだろ。ほら、手、貸せよ」

光が空に手を向けた。空は、顔を顰める。

「え？ 嫌だよ、暑いのに。杖は？」

「持つてきてない」

「何で持つてきてないんだよ」

「煩いな」

都合が悪くなるとすぐそれだ。空は頬を膨らませながらも、光に肩を貸して歩き出す。

二人の言いあいはいしばらく続いた。

光は途中でタクシーを拾って帰宅した。

自室で、家政婦の坂内さんが持つてきてくれたオレンジジュースを飲んで一息つく。テーブルを挟んだ向かい側には空がいる。一緒にタクシーでここへ来ていた。

「なあ、光。どう思う？ 二人を殺したのは、メールを送ってきた犯人かな」

ストローでオレンジジュースをかきまわしながら言われた言葉に、光は答えた。

「正直、分からないな。でも、全ては桜田絵里の死からはじまった。そんな気がする」

空は頷いた。そもそも、桜田絵里の死がなければ、メールが送られてくることは無かった。

「そういえば、本当に何も聞いてないの？ 川崎さんから」

川崎杏奈の静に宛てた手紙。

『春名君は全部知ってる』

あの手紙は何を意味していたのだろうか。

「聞いてない。おまえが信じる信じないは勝手だけど」

「すぐそういうこと言う。信じるよ。決まってんじゃない」

怒った口調の空に、光は珍しく、ゴメンと謝った。空はそれに頷いた後、腑に落ちないことがあることに気付いた。

「ちよつと待てよ。じゃあ、何で君島さんがメールをしてきた犯人と繋がってたって分かったんだ？」

あの時は、てつきり、杏奈から聞いたのだと思ったのに。

「公園で本人が言ってたじゃないか」

「え？ そんなこと言ってたっけ」

考えてみるが、思い当たらない。空は何かを考えるときの癖で、口元に拳をあてた。

「シズ力は何も知らないからそんなことが言えるのよ。本当のこと知ったら、シズ力もきつと、私を軽蔑する。……彼女はそう言ったんだ」

光は由香の言った言葉を正確になぞって見せた。はっきりと記憶していない空には、そのセリフの正確さは分からなかったが。

「だから？」

要領を得ないという顔で、空が問う。

「君島さんは、伊藤さんに軽蔑されるようなことをしていたということになる。静もということは、複数の人間から軽蔑されるようなこと」

空は、頷いた。そこまでは分かる。だが、どうして、それが犯人

にアドレスを教えていたことにつながるのだろう。

「彼女はこうも言った。ムッコとアンナが死んだのは自分のせいだと。それを合わせて考えると、君島さんは自分が犯人の利益になることをしたんじゃないか。少なくとも、彼女はそう思ってるんだろうと考えたんだ」

光は、そう言って息をついた。

「前に話しただろう。メールを送って来る犯人には協力者がいるんじゃないかって。それと結びつけて、君島さんに鎌をかけてみた」

「え？ 鎌をかけてみたってことは」

空の問いかけに、光は頷いた。

「ああ、半信半疑だったんだ。決定的な証拠なんて一つもなかったからな」

空は驚き呆れて、しばらく言葉にならなかった。光がそんな大胆なことをするなんて思っていなかったからだ。

「結果的に、彼女は認めたわけだから僕の推論は正しかったということだ」

「まあ、確かにな」

同意はしたが、どうにもすつきりしない。空の表情を目にした光が、自嘲気味に呟いた。

「だからと言って、犯人が誰かも、どうして二人が死ななければならなかったのかも分からないけどな」

それでも、一つの謎は解決したのだから、これは大きな一歩だ。

空は前向きにそう思うことにした。

「君島さんのあとをつけてたのは、やっぱり川崎さんを殺した犯人だと思う？」

「どうか。まあ、それを考えるのは警察の仕事だろ。警察がそのうち解決してくれるさ。ここ最近メールでの嫌がらせも無くなってた訳だし。もういいんじゃないか？」

空は一瞬耳を疑った。もういいんじゃないか？ とは、どういう意味だ。もう、この件に関わるなということか。二人も死んで、残

りの二人も襲われているのに。まだ、犯人は残りの二人を殺そうと狙っているかも知れないというのに。見捨てるということか？

「何で、そんなこと言うんだよ。二人のこと、心配じゃないのかよ」
「それとこれとは、話が違う」

眼鏡の奥の瞳が、冷たく見える。声さえも冷ややかに聞こえて、空の頭に血が上った。

「だから、おまえは何でそう、冷たいわけ？ 考えてやるくらいしたっていいじゃん。これだけ係わっておいて、後は警察の仕事だつって、投げ出すのかよ」

テーブルが音を立てて揺れた。空が、言葉の後半でテーブルを叩いたのだ。光はそんな様子を眼鏡の奥から冷ややかに見ていた。

「別に、投げ出してるわけじゃない。事実を言ってるんだ。これ以上僕たちにはどうしようもないだろう」

それが、正論なのかもしれない。光の言いたいことも分かる。だが、空にはどうしても納得できないのだ。

メールを送ってきた犯人も結局のところ分かっていない。睦子と杏奈の死の真相も。何一つ分かってはいないのに。悔しいという感情が光にはないのか。何一つ解決できていないこの現状で、どうしてよしと言えるのか。

空には分からない。

「どうしようもないって、簡単に言うな。どうにかしようってどうして思わないんだ？ 警察がそのうち解決してくれるって？ 解決するのをただじつと指をくわえて待ってるってのかよ。川崎さんは、光に、何かを伝えたくてあの手紙残したんじゃないの？ 何かあるからおまえに会いに来たんじゃねーのかよ。おまえが言ってるのは、それ全部無視するってことだよ」

睨みつけてくる空を、平然と見返して、光は嘆息する。

「結果的にそうなくても仕方がない。僕は自分が間違ってるとは思わない」

空の頭に血が上った。自覚した瞬間、怒鳴っていた。

「どうして、分かんねーの。おまえは」

「分かってないのは空の方だろ。正義感だけで、何もかも解決できるなら警察なんていらない。おまえらは他人に同情しすぎなんだよ」
なぜ、こんなに分かり合えないのだろう。怒りを通り越して、悲しくなってくる。

「もったい。俺、帰るわ」

そう言つて、空は立ちあがると光に背を向けた。ドアノブに手をかけて、部屋を出ようとした時。その背に声がかかった。

「海とおまえは良く似てるよ」

抑揚のないその声に、空は振り返らずに答えた。

「おまえは全然似て無いな。兄弟だったのが不思議なくらいだよ」
そう言い捨てて、空は部屋を出ると思い切り強くドアを閉めた。

第二十八章 別れ

あーあ。やっちまった。

空は自分の部屋に入り、扇風機をつけて畳の上に寝転がった。先ほどの怒りがまだ残っているせいか、少々荒っぽい動作である。外を歩いて火照った身体には、肌に当たる畳の温度が心地よい。

扇風機の風が涼を運び、汗をかいた身体から熱を少しずつ奪っていく。そのせいというわけではないだろうが、沸騰していた頭もだんだんと冷めていった。冷めてしまうと、胸に後悔が湧きあがって来る。

光と喧嘩してしまった。

ただでさえ、光と海の仲がぎくしゃくしているのに、自分まで喧嘩してしまつては誰が仲裁するのか。

空は溜息をついてしまった後で、口を手で押さえた。しまった。

これでまた一つ幸せが逃げてしまった。

「やっぱ怒鳴ったのはまずかったかなー。でも、あれは光も悪いし。謝るのもしかたよな」

独白した空は、腹筋を使って半身を起こす。背中に扇風機の風が当たった。

どうすればいいか、どうしようか。そんな言葉が頭の中を占拠する。

しばらくぼうつと座り込んでいた耳に、玄関のチャイムの音が入ってきた。

面倒くささを顔に表した空だったが、立ちあがると扇風機を止めて、商店街の裏手に当たる玄関まで下りて行った。

誰かを確かめもせずドアを開けた空の前に姿を現したのは、海だった。

「空、何でそんな怖い顔してるん？」

尋ねられて、空は思わず顔に手をやった。

「え？ 怖い顔してる？ 俺」

「うん。めっちゃ」

簡潔に頷く海に、空は罰の悪い表情を作った。

「さっき光と喧嘩しちゃってさ」

海が少し目を見開いた。

「いつもしとるやん」

「いつものとちよつと違うんだよ」

少しむきになった空に、海が微笑した。

「ああそうか。いつもはじゃれとるだけやもんな」

空は、ふんつとそっぽを向く。

「なあ、空」

海の呼びかけに、顔を向けた。そして、あっと思う。いつまでも海を玄関先に立たせておくのもどうかと思ったのだ。

「悪い、海。とりあえず上げれば」

空の誘いに、海は首を横に振った。

「いや、あの、ちよつと付き合ってもらいたい所があんねんけど」

「どこ」

短い問いに、海はどことなく暗い表情で空に目を向けた。

「先生んどこ」

「先生？」

「あ、えつと。あれや。桜田絵里の父親」

その言葉で、先生という名詞に覚えた疑問が得心に変わった。桜田絵里の父親が海の小学校時代の担任だったと聞いたことを思い出したのだ。

「はつきりさせたいねん。先生がメールを送った犯人やったんか。犯人やったら、ちゃんと君島さんらに謝ってほしいねん」

空はしばらく海の顔を見つめた。海の顔が余りにも辛そうに見えるからだ。学校では笑顔ばかりが目についていたが、最近、海は暗い表情をしていることが多い。こんなことが立て続けに起これば、それは当たり前のことなのかもしれない。だが、それだけではない

ような気が、空はしている。

「分かった。行こうか」

思いを振り切るように声を出して、空はたたきに降りて靴を履いた。

伊藤静から光の元へ連絡が来たのは、空が怒って部屋を出て行つてから三十分が過ぎた頃だった。

かかってきた電話に出た光の耳に、すでに聞きなれてしまった少女の声が入ってきた。

『春名くん。私、どうしていいか分からなくて』

どこか怯えたような声。嫌な予感を覚えて、光は声を絞り出した。

「何かあった？」

『電話が来たの。相手は、ムッコとアンナを殺した犯人だって名乗ってる』

光は息を飲んだ。それに気付いたのかどうか、静は先を続けた。

『事件の真相が知りたければ、警察には告げずに会いに来て』

…男の人の声だった

思考回路が停止したかのように、光は言葉が出てこなかった。犯人の言うとおりにするのは危険すぎる。

「警察に、いった方がいい」

光が声を押し出すと、少しの沈黙の後、静の言葉が耳に届く。

『やっぱり、駄目よ。私、会いに行こうと思う。警察に言ったら、もう犯人は私と接触をしてくれないかもしれない。このままうやむやになるなんて嫌。いつ殺されるかって怯えてる由香のためにも、私自身のためにも。このままじゃいけない気がするの』

「危険すぎる」

仮に電話をかけてきた犯人が本当に、二人を殺していたのだとし

たら。罨に飛び込んだ静は高い確率で命を落とすだろう。そんなこと、させられるはずもない。

だが、静はどんなに光が説得しても自分の考えを曲げなかった。どうして、光の周りはこんなに、感情だけで動く人間が多いのだろう。静はもつと、賢い人間だと思っていたのに。舌打ちしたい気分だ。

「なら、僕も行くよ」

説得するのに疲れた光は、とうとう折れた。電話の向こうで、静はためらうような気配をみせる。

『でも、危険よ』

「君ほどじゃない」

淡々とした口調の光に、苦笑した響きの声が聞こえてくる。

『ありがとう。春名くんは優しいね』

光は一瞬、言葉に詰まった。何の冗談だと思う。優しくないと言われ続けている人間に向かって優しいなどと。優しいという言葉が貰っていいのは、空や海のような人間であって自分ではない。

「場所は？」

気持ちを切り替えるつもりで、努めて事務的に尋ねた光の耳に、犯人との待ち合わせ場所の住所が届いた。

かつて、工業地帯と呼ばれていたこの場所は、たくさんの工場が立ち並んでいた。だが、この数年の間に、不況のあおりを受けていくつもの工場が閉鎖を余儀なくされていた。つぶされた工場跡地にはいくつもの住居が立ち並び、新興のベッドタウンへとその姿を変え始めている。

その中にあっても、買い手がつかなかったのか、閉鎖された工場がそのまま残る土地もあった。

その一つに、光は足を運んだ。光の家から電車で二駅。駅から歩

いて十五分のこの場所は、閉鎖されて随分と立つのか、荒れが目立った。

立ち入り禁止と書かれた板がはりつけられた門を横切り、フェンスで囲まれた敷地の中に建つ工場を目にする。黒っぽい壁の大きな建物だ。少し歩くと、フェンスに大きな破れ目があった。そこから、工場の敷地内に入る。コンクリートの道が割れて、そこから雑草が生えていた。

かつて、工場だった建物は、壁の塗装が所々剥げ、はめ込まれた高い位置にある窓ガラスは割れている。

「とりあえず、中を見てくるから。伊藤さんはこの辺りに隠れて待っててくれ」

光は門の近くの茂みに目をやり、自身の後に隠れるようにしてついてきていた少女に話しかけた。

振りかえった光の目に、怯えたような顔の静が映る。

「でも……」

言い淀む静に、光は少しだけ笑みを見せた。

「大丈夫だよ。中を覗くだけだから。でも、僕が十分以上戻らなかつたら、君は帰って警察へ連絡してくれ」

いいね、と念を押せば、静は頷いた。

光は、できるだけ足音を立てないように、建物に近づいていく。近づくにつれて、工場へと続く扉が少し開いていることに気付いた。心臓の鼓動が、弥が上にも早まる。

扉まで来ると、光はそつと中を覗こうとした。

刹那。

背後に人の気配を感じた。

光は驚きとともに、振り返る。

だが、振りかえった先にあるものを、光は目にする事ができなかった。

頭に強い衝撃を感じた瞬間。

目の前が闇に包まれ、その闇に意識をも飲みこまれてしまう。

倒れた光の横で誰かが笑った。
光の耳に、その笑い声が届くことは、
もうない。

第二十九章 焦燥

チャイムを鳴らしたが、家人はどうやら留守のようだった。

空と海は困ったように顔を見合わせる。

以前来たことのある、岸谷の部屋の前に二人は立っていた。このアパートへ来るまでに、前回同様、三十分ほど迷ったのはご愛敬だ。「どうする。出直すか？」

空は小首を傾げて海に尋ねる。海は逡巡した。このままここで待っていても、いつ帰って来るか分からない。自分一人ならまだしも、空もいる。かといって、日を改めるといふ選択肢は、海の中になかった。

確かめなければならぬのだ。

海は、先生がメールを送った犯人だと思っている。メールの内容を知りえた人物。その中で、一番犯人に近いのは誰かと考えれば、絵里の父親である先生しか思い浮かばない。

勘違いならそれでいいのだ。むしろその方が望ましい。海が一番辛い時に、一緒にいてくれた大人は先生だけだった。そんな先生が、彼女たちに嫌がらせをしていたとは思いたくない。

信じたくない。

このまま、もやもやとした気分を抱え続けるならいっそ、先生に嫌われても、本人にぶつからなければならぬ。海はそう考えたのだ。

「海ってば」

しびれを切らした空が、海の腕を掴んだ。我に返った海が、口を開こうとしたとき。

携帯電話の着信音が、海の言葉を遮った。反射的に尻ポケットに手をやって、海は携帯電話の通話ボタンを押すと、それを耳にあてた。

「もしもし」

『紫藤くん。どうしよう、春名くんが帰ってこない』

切迫した少女の声。風見の声ではない。由香は病院だ。

海は考えて、浮かんだ名を口にする。

「伊藤さん、やな？」

確認したが、その声は電話の相手には届かなかったようだ。相変わらず焦った調子の声が耳に届く。

『もう、十五分も経ったのに。どうしよう。春名くん、帰ってこない。殺されてるかもしれない』

殺されてるかもしれない。

その言葉に、背筋が凍った。

何故、急にそんな話になるのか分からなかった。

言葉を失った海の横で、空が訝しむように海を見つめている。電話の声が漏れ聞こえているのだろう。

業を煮やしたように、空は海の手から携帯電話をひったくった。

「伊藤さんだよな。どうした？ 何があった？」

空は、所々頷きながら静との通話を終えた。

茫然自失とした海の肩を掴んで、携帯電話を彼の前につきつけた。

「海、ぼうつとしてんな！ 伊藤さんに場所聞いたから、早く行こう」

そう言って、無理やり海に携帯電話を持たせると、アパートの階段を駆け足で下り始め、階段の半ばで足をとめた。

海の名を呼ぶ。

海は、先ほどと変わらぬ位置で立ち尽くしていた。反応がない。

「海、行くぞ。早く！」

急き立てる空に、海は虚ろな目を向けた。

「怖い……」

呟くようなその声が、空の耳に届く。

「何？」

空は、意味がつかめず問い返した。

「怖い。どないしよう。俺、また失くすんか……」

抑揚の無い声音。表情の無い顔。

空は、下りた階段をまた上り、海のもとへ走り寄る。

「何で、みんな、俺の前からいなくなるんや」

そこまで聞いて、空は動いた。

乾いた音が鳴った。空が、少し強めに海の頬を両手で挟んだのだ。じんと掌に痛みが伝わってくる。海の頬も痛いだろう。

「海！ いいかげんにしろよ。居なくなるとか訳わかんねーこと言ってんなっ！ 光が居なくなるわけねーだろ。バカ」

焦点の合わないようだった海の瞳に、空が映る。

「ぐだぐだ言ってねーでさっさと動け。時間が勿体ねー。分かったか」

強い口調で確認されて、海は思わず首を縦に振った。

「わ、分かった」

その答えに満足したのか、空は頷いて海を急かした。

「よし、じゃあ行くぞ」

海に背を向けて駆けだす空。海はその背を追いかけた。

もう一度、任意同行を求めるつもりで、植田和樹の住むアパートを訪ねたが、空振りに終わった。

私市は新人刑事の河合とともに、植田の実家まで足を伸ばした。だが、そこにも植田の姿はなかった。

こちらが来ることを感づかれたか。そう考えたが、自身でそれを否定した。

警察内部でも、まだ彼は参考人の域をでてはいない。重要参考人ですらないのだ。

そんな彼が、姿をくります理由はないはずだ。犯人でもない限り。そう考えて、私市は苦笑した。どうやら、河合の植田に対する疑いが、自分にも移ったらしい。

「私市さん。何、笑ってんですか」

訝しげな表情の河合に、私市は笑みを深くした。

「聞きたいか？」

どこか含みのある声に、河合は顔をひきつらせた。

「や、いいつす。何か怖いんで」

失礼な話だが、そうなるようにみせたのは私市だ。河合の反応に満足して、一度署に戻ろうと提案しようとしたときだった。

胸ポケットが震えて、思わず手で押さえた。携帯電話を入れていたことを失念していたのだ。胸ポケットから携帯電話を取り出すと、表示を目にしてから通話ボタンを押した。

親しみのある声で電話に出た私市の声が強張ったのは、ほんの数分後のことだった。

空と海は、何度か静と連絡をとりつつ、目的の廃工場にたどりついた。

静に言われた通りに破れたフェンスを潜って敷地内に入る。すると、小さな声で空たちを呼ぶ声が聞こえた。

門の付近に佇む静の姿が目に入る。つい先ほどまで、その近くの茂みに隠れていたと静は言った。

「光は、まだ？」

空が尋ねると、静は頷いた。空たちの不安がさらに募る。静が電話をよこした時点で、光が廃工場の中に入って十五分。空たちが駆け付けたのはそれから二十分は経過している。これはもう、何かがあったとしか考えられない。

空の横にいた海が走り出した。工場の扉へ向かっていると気付いた空は、静にここにいるように言い残し、海を追う。

工場の内部は、雑多な物でいっぱいだった。いくつもの段ボールが積み重なり、迷路の様相を呈している。段ボールだけではない。

汚い布のかけられた、何かの機械らしきものもある。

「光！」

海が大声を上げた。追いついた空は、犯人がいたらどうするんだと思う。

だが、もうやけくそだ。空も自慢の大声で光の名を呼んだ。

しばらく待つが、返事がない。

返事がないどころか、人のいる気配すら感じない。一体、光はどこへ行ってしまったのか。

言い知れぬ不安が空を襲った。積まれた段ボールをよけながら、空と海は手分けして工場内を探す。

空は、突き当りに行きつき、何となく左右を見回した。右横を見ると、壁の前に、何も積まれていない台車が置いてあった。そして、台車の手前に扉があると気付く。

海を大声で呼んで、扉を示す。

「開けるぞ」

十分に警戒しながらも、空は扉を開いた。

狭い部屋だった。デスクが置いてある。事務所として使っていたスペースかもしれない。埃のたまった部屋へ足を踏み入れた。足元で埃がたつ。ここにも人の気配はない。

「おらんな」

「ああ、もうどこ行っちゃったんだよ。光」

不安で不安で仕方がなくて、空の口から泣きごとが漏れる。

もしもこのまま、二度と会えなかったら。つい数時間前、一緒にいたのに。喧嘩別れしているのに。このまま会えなければ、仲直りすることもできない。

空は、どうしても浮かんでくる嫌な想像を振り払おうと頭を振った。顔を俯けると、汚れたコンクリートが目に入る。その時、視界の隅に何かが映った。机の影に何かが落ちている。気になって空は動いた。机の影になっていた部分が見える位置まで来て、空は動きを止めた。

息を飲む。目に映った光景に、身体が震えた。

「海……」

掠れるように、名を呼んだ。

今まさに、部屋を出ようとしていた海が、空の様子に訝しむ視線を送る。

空のもとまで来た海が声を上げた。

「光！」

空が机の影に落ちていたと思った物は、光の指だった。倒れた光の指が、机の影からほんの少し覗いていたのだ。

海は、立ちつくしている空の横をすり抜け、光の横に膝をついて、彼の半身を抱き起こした。

「光、しっかりしろや。光！」

海は必死の形相で、光の血色の無い顔を軽く叩く。

光はピクリとも動かない。いつもかけている眼鏡が見当たらなかった。意識の無い素顔の光は、まるで人形めいて見えた。

「嫌や、光。頼むから、目え開けてくれや」

海の声が震えた。抱いている腕を動かし、光を揺さぶる。

「まだ、謝ってないねん。おまえにまだ、謝ってないんや。なあ、光……」

呼びかけるが、光の反応はない。

空は、動けないまま、必死に呼びかける海と、動かない光をただじつと見つめていることしかできなかった。

「俺が悪かった。なあ、お願いやから、目え開けてくれや……」

海は動かない光を抱きしめた。光の顔が海の胸元へ引き寄せられる。

「死んだらあかん。死んだらあかんねん。死んだらあかん……」

空は見ていられなくて、視線を下ろした。その目に、投げ出された光の手が見える。

指が、微かに動いた気がした。

「光？」

空が眩く。

空は、膝をコンクリートの床につけ、光の手を掴んだ。
もう一度、光の名を呼ぶ。

「光！」

空の手の中で、確かに光の指が動いた。

「海、光が……」

空の上げた声に、海はゆっくりと胸に引き寄せた光を離す。

その視線の先で、光の眉が動いた。

小さなうめき声とともに、瞼が震える。

「光」

空と海の声が重なった。長い睫が持ち上がり、光の少し茶色みがかった瞳があらわになる。

数度瞬きを繰り返し、光は空と海の顔を視認したようだった。

「何で、二人がここに」

言いながら、光は自ら起き上がろうとした。それを制して、海が光をまた胸元へ抱き寄せる。

「良かった。光、もう、死んでもうたかと思った」

心底安堵したように、海は声を上げる。空も同様の気分だ。

「人を勝手に殺すな」

これだけ心配をかけたにも関わらず、海の胸元で光がいつもの調子で毒づく。

「それと、海。痛い」

言われて、海は慌てたように力を緩めた。光はそんな海の肩を握って、半身を起こす。

自力で座った光は、もう一度空と海を眺めて、先ほどと同じ質問を繰り返した。

「何でここにいるんだ」

「それはこっちのセリフだっつーの。おまえ、警察に任せとけとか言っというて、何でこんなとききて、倒れてるんだよ」

安心したら、怒りに火が付いてしまった空は、声を荒げた。光は、

少し目を眇めて空を見る。

「伊藤さんがどうしてもって聞かなかったからな。仕方ないだろう。でもまさか、いきなり殴られるとは思わなかった。それに、殴られたのは工場の外だったんだけど」

「え？ そうなの？ じゃあ、犯人はわざわざ工場の中に光を運んだってこと」

空が驚きの声を上げると、光が頷く。

「……ああ。たぶん」

肯定して、光は自身の後頭部に手をやった。傷に触れたのか、顔を顰める。

「おまえが、無事でよかった」

囁くような声が海の唇から洩れた。

空と光は海に視線を送る。

「おまえを失ったんやと思ったら、ほんまに、怖くて怖くて仕方なかった」

「海、あの……」

光が、海に声をかける。どこか弱気なのは、海と仲たがいをしていたことを思い出したからだろうか。

「ゴメンな。光。ほんまゴメン」

海は言うなり光に抱きついた。抱きつかれた光は驚いたように目を見開く。

「俺、ずっとおまえに八つ当たりしとったんや。おまえが、俺のことどうでもええって思ってるんが分かって、拗ねて、勝手に腹立て、おまえのこと殴って。俺、めっちゃ最低やんな」

海は光に回した腕に力を込める。

「人の気持ちは、自分ではどうにもならへんって分かつたはずやのに。ゴメンな。光。大嫌いやって言うてゴメン。例えおまえが俺のこと嫌いでも、俺はずっとおまえのこと好きやから」

光の震える息が、海の肩にかかった。

「海は間違ってる」

光の言葉に、海は抱きしめていた腕の力を緩め、光を身体から離れた。光と視線が交錯する。空はただ、そんな二人を眺めた。
「嫌いだって言ったのは、海であって僕じゃない。僕は、海のことをどうでもいいなんて思ったことは一度もない」

きっぱりと告げられた言葉。海は驚いたように目を見張る。

「それ、ほんまか？」

光は頷く。

「おまえ、俺のこと好きか？」

ストレートな問いに、光はもう一度頷いた。

「当たり前だろ」

海の顔に、笑顔が広がる。

光は顔を俯け、大きく息を吐き出した。

倒れていたのだ。急に気分が悪くなったのかもしれない。空と海が身構えた時、光は顔を上げて、心底嬉しそうにほほ笑んだのだ。

「よかった。嫌われてなくて」

空と海は呆然と、光に視線を向けた。

目と口を大きく開けたその表情に、光は訝しむ。

「あ、何だよ。もう終わり」

「光、もう一回」

海が人差し指を一本立てて、光に乞う。

何をもう一回なのか、分からない。

光が首を傾げると、空と海は互いに目を合わせて笑顔を作った。

「いよっしゃー」

二人は、片手をあげて、ハイタッチする。

「何なんだ？」

その行動の意味を掴めず問う光に、海が顔に笑みを乗せたまま口を開く。

「おまえが笑った」

「は？」

「そうぞ。俺たち、光が心底嬉しそうに笑う顔見たいって言ってた

んだよな」

空と海はまた目を合わせて笑いあう。光は何故だかいたたまれない気持ちに陥り、顔を伏せた。

「あ、そう言えば、伊藤さんは？」

光の言葉に、空と海の表情が引き締まる。

「やべつ。忘れてた」

「早くここ出て病院行こうや。頭打ってるんやし」

海が、光に手を貸して立ち上がった直後。

女性の悲鳴が工場内に響いた。

「伊藤さん？」

空たちは顔を見合わせ、慌てて部屋を出た。高く積まれた段ボールの一部が崩れている。

静がこちらに向かって走ってくる姿があった。

「伊藤さん」

光が声を張り上げた。こちらに気付いた静は驚いたように一度足をとめた。だが、彼女の背後から音がしたのを機に、慌てて走り出す。彼女を追うように、崩れた段ボールを蹴散らして来る男性の姿が見えた。

「先生……」

海の呟きの通り、静を追っていたのは、桜田絵里の父。岸谷だった。

第三十章 願い

走ってきた静の身体を受け止めた光は、震える彼女の肩に手を置いたまま、彼女を追ってきた男を見つめた。隣に立つ空に小声で問う。

「誰だ？」

「岸谷さん。桜田絵里の父親で、海の小学校の時の先生だつてさ」
小声で返した空から、光は海に視線を移す。海は岸谷に向かって声を上げた。

「先生、何でこんなところに」

岸谷が海に目を向けて、口を開こうとしたとき。静が、彼より先に声を上げた。

「あの人が犯人よ！ 由香が事故にあつたのもあの人のせいよ」
数メートルの距離をあけて、立ち止った岸谷を静は指さす。

「先生、ほんまですか？ 君島さんのあとをつけてたの、先生なんですか！」

海が半ば怒鳴るように問う。

岸谷は、どこか憂う表情で、海に目をやった。

「斎藤……」

海の以前の姓を呼んで、言葉を詰まらせたように口を閉ざした。

「ほんまに、先生なんですか？ 君島さんらに絵里さんの名を語ってメールを送ったんも、先生なんでしょう」

海が勢いの余り足を一步前へ踏み出した。

岸谷は海とは対照的に、静穏とした口調で答える。

「ああ。すべて俺のせいだ」

海は明らかに傷ついた表情で、岸谷に視線を注ぐ。

光は軽く背中を引っ張られたような気がして肩越しに後を見ると、海が光の服を掴んでいた。

光は嘆息し、中年の男に目を向ける。

「すべて俺のせいとは、どういう意味ですか？」

光の問いに、彼に目を向けた岸谷は訝しむ表情をつくった。

「君は？」

光は、岸谷に向かって軽く頭を下げた。

「はじめまして、春名です。海の友人です」

こんな時だというのに、生真面目に挨拶をする光。兄弟だと名乗らなかったのは、話をややこしくしそうな気がしたからだろうか。

岸谷は、そうかと呟いただけだった。

「岸谷さん。あなたが言っているのは、メールの件だけですか？
すべてとはどこまで含まれるんです？」

一度聞いただけの名をすぐに覚えたのだろう。岸谷に呼びかけた光は、じつと男の顔を見つめた。眼鏡をかけていないせいも、少し目を細めている。

「全部に決まってるわ！ 何もかも、この人のせいよ。この人さえ、
メールなんて送ってこなければ、きっとみんな死ななかった」

光に肩を抱かれていたままだった静が、突然声を荒げた。静は一歩足を踏み出した。光が彼女の肩から手を離す。

「メールが来るようになってから、私たちはおかしくなっていたわ。特にムツコはものすごく気に病んでた。ムツコを追い詰めたのは、あなたよ。ムツコはあなたに追い詰められたせいで死んだのよ。ユカだってそう。あなたがエリの名を騙ってメールなんてしなければ、怯えて車道に飛び出したりしなかった。そうでしょ」

大きく肩を揺らして、静は言い終えた。荒い息遣いが聞こえてくる。空は、岸谷に視線を注いだ。その前で、彼はゆっくりと首を縦に振った。

「その通りだ。俺が、メールなんて送らなければこんなことにはならなかったんだろう。俺はただ、本当のことが知りたかったんだ。娘の死がどうしても自殺だとは思えなかったから」

「だからって、あんなメール送る必要ないだろ」

思わず、空は声を上げていた。だってそうだろう。絵里の死が自

殺だとは思えなかったなら、静達を問い詰めたかったのなら、どうして、メールなんてまわりくどいことをしたのだ。直接、会って聞けばよかったではないか。そんなもの、正当な理由になんてならない。

「ああ、まったくその通りだよ。俺は少し、おかしくなっていたのかもしれない」

岸谷は、嘆息して視線を落とした。空たちの見守る中、岸谷は話を続ける。

「絵里の日記を見たんだよ。あの子の日記には、克明に自分がされた虐めのことが書かれていた」

静が軽く息を飲んだ。

「それでも、それに懸命に耐えて、いつかきつと仲直りできると信じているあの子の姿が見えた。日記は決して後ろ向きな気持ちでは書かれていなかったんだ」

岸谷は片手で顔を覆って大きく息を吐き出した。

「そんなあの子が何故、自殺しなきゃならない？　自殺するわけがないんだ」

辛そうに歪められた男の顔から苦悩が見て取れるようで、空の胸も痛む。

「絵里が亡くなる前日の日記で、あの子は友達の一人と仲直りできたと書いていた。その子と次の日一緒に買い物をする。なのにあの子は死んだ。あんな場所に一人で！」

男の声は叫びに近かった。娘の死が、彼にどれほどの傷を与えたのか。空には量り知ることできない。それでも、彼の大きな悲しみは、伝わってくる。

「なぜ、あの子は一人で死んだ？　会うはずだった友達はどうした？　そんなことを考えているうちに、ふと思いついたんだよ。あの子は自殺じゃない、誰かに殺されたんじゃないかと。日記の中に頻繁に出てくる名前。ムッコ、アンナ、シズカ、そしてユカ。この中の誰かが、絵里を……」

岸谷は、片方の顔を覆っていた手を離して狂気じみた目を静に向けた。

「殺されただなんて。エリは自殺よ。警察だってそう判断したわ！」
「例え絵里が自殺だとしても、君たちに、何の責もないとは言わせない。学校はいじめを認めはしなかったが、あの子は君たちがしたことを虐めだと思っていたんだ」

「いい加減にして」

声を上げた静の肩を後から光が叩いた。光は一步足を前へ動かし、静の横に並ぶ。

「あなたは日記にあるあだ名を、絵里さんのケータイの電話帳で見つけたんですね」

岸谷は、光の言葉に頷いた。

「ああ、その通りだ。悩んだ末にメールをしてみることにした」「どうして？」

空が尋ねると、岸谷は自嘲気味に口の端を上げた。

「春になり、真新しい制服を着ている女子高生を見て、絵里も生きていれば高校生だと思つとやり切れなかった。あの子を虐めた子たちは、のうのうと学校へ通っているのに……俺は、絵里を虐めていた彼女たちに、絵里を思い出してほしかった。そして、絵里の死の真相を知っているなら教えてほしかった」

だから、メールをしたと、岸谷は言つた。

「私たちは何も知らない。絵里のことを忘れたことなんてなかったわ。だから、私たちはあなたが送ってきたメールに怯えたのよ。ムツコも、アンナも、ユカも私も」

静は息をついて、呼吸を整えるように息を吸った後大きく吐き出した。

「追い詰めたのはあなた。ムツコもアンナもあなたが殺したのよ」

岸谷を指さし、叫んだ静。

その直後、第三者の声が廃工場に響いた。

「やっぱり、おまえが睦子を殺したのか」

積まれた段ボール箱の陰から男性が姿を現した。

急に現れた男の姿に、啞然と皆が目を向ける。空には見覚えの無い若い男。この男の名を知っているのは、本人以外、この場には一人しかいなかった。

「植田さん？」

呼びかけると言うよりは、囁くような声が静から洩れる。

静の横に立つ光が、静に目を向ける。

「何？ あの人を知ってるのか」

光の問いに、静は頷いた。視線は前方にいる岸谷と男を捉えたまままだ。

「植田さん、ムツコの元彼」

驚いて男に視線を向けた面々に、男の狂気に満ちた顔が映る。

「君は、一体」

岸谷の声が聞こえているだろうに、男は答えず、咆哮を上げた。ジーンズのポケットから光るものを取り出す。それをナイフだと認識する間もなく、男は岸谷に向かって走った。

「危ない！」

その声は誰のものだったか。ほぼ逃げることもかなわないまま、

岸谷は男とぶつかった。

小さなうめき声が岸谷の口から洩れる。

「先生！」

海が叫んで岸谷へ駆け寄ろうとする。空も海の声で我に返り、そちらに向かつて走った。

屑折れた岸谷の前で、呆然と立ち尽くす植田の手には、赤く染まったナイフが握られていた。彼は一步二歩と後退して、二メートルほど岸谷と距離をあけて立ち止った。

「は、はは、はははは。やった。やったぞ、睦子。やった。やった」

植田は狂ったように、歪んだ顔で笑い続けた。ナイフをきつく握った手は小刻みに震えている。

「先生！」

海が倒れた岸谷の横で膝をついて、上半身を抱き起した。

「斎藤……」

岸谷の顔から血の気が失せている。汗と震えが身体に伝わり、海は言葉を失った。

「海、これでとにかく傷口押えてろ」

光の声が近くで聞こえたと思った直後、海の前に白いハンカチが差し出される。

「え？ 傷」

そう言つて、海は無意識に避けていた岸谷の赤く染まった腹の辺りに目を向けた。血が、岸谷の服を染めている。

海は流れ続ける血の辺りにハンカチを当てて抑えた。

空と光は、狂ったように、笑い続けている植田と倒れた岸谷の間に立った。

「先生、頑張つて。死んだらあかん」

海は岸谷の頭を自身の太腿に乗せ、声をかける。

「もう、先生じゃない。絵里を失った時、俺は教師で、あることを捨てた」

切れ切れに、そんなことを言う。海は大きく首を横に振る。

「絵里を、虐めた、子たちを、恨んでた……でも、一番恨んだのは、自分自身だ。あの子の悩みを何故、気付いてやれなかったんだろうと」

岸谷は、そこまで言つて、大きくうめいた。

海が先生と岸谷呼ぶ。岸谷は、大儀そうに腕を持ち上げ、傷口を押さえている海の腕を掴んだ。

「もう、いい。斎藤。これは、報いだ」

海は唇をかみしめた。

もういいって何だ。

報いって何だ。

確かに、岸谷のしたことは簡単に許されることではないだろう。

だが、苦しんで追い詰められたのは、死んだ睦子や杏奈だけではない。岸谷自身もだ。海は知っている。大切な人を亡くした人の気持ち。なぜ、どうしてと、考えても考えても抜け出すことのできない思いも。後悔も、苦痛も。

それでも、前に進めと言ったのは誰だ？

海は、岸谷を泣きだす寸前のような、濡れた目で睨みつけた。

「もういいって、先生が言うな！ 俺に、言うたん、あんたやないか……。あんたが前に進めって言うたんやないか。過去にとらわれるなって言うたんはあんたや！」

大声で怒鳴りつけた海を、目を見開いて岸谷は見つめた。

「斎藤……」

「俺は忘れてないで、先生。先生が俺に言ったことちゃんと覚えてる。こんな先生の姿、絵里さんが見たら悲しむで。亡くなった絵里さんに、安心して見てもらえるように、生きなあかんねやる？」

岸谷が目を瞑った。はっとした海の目に、岸谷の目元から涙が伝うさまが映った。

「俺は、先生が死んだら、悲しいし辛いよ」

かつて、海が岸谷に言われた言葉。それをそのまま海は口にした。本心だった。このまま岸谷に、生きることをあきらめてほしくなかった。少しでも、生きたいと思っていてほしかった。

どうか先生を助けてと、祈る海の耳に、サイレンの音が聞こえた。救急車のサイレンではない。パトカーのサイレンの音だ。

「私市さんが来た」

空が、声を上げた。ここへ来る直前に連絡しておいたのだ。

空たちの正面で笑っていた植田の耳にも、音が届いたのだろう。苦み走った顔を入口に向けた。植田が走り出そうとしたとき、空はその前に回り込む。逃がしてたまるか。そんな思いで植田を睨みつけた時。警官が足音も荒く踏み込んできた。それを目にした瞬間、岸谷は咆哮を上げると、空に突進する。

「空！」

光が声を上げた。海がその声に顔を上げて息を飲む。

植田が、空の左手首を掴んだ。人質にでもしようというのか。光よりも、空の方が弱いと踏んだのかもしれない。植田は掴んだ空の手を引き寄せようとした。植田の顔に笑みが浮かんだのは、空が大入しく人質になると踏んだからなのか。

しかし、植田の予想はずれた。

空は、素早い動作で植田の手を振りほどくと、逆に植田の右手を掴んだのである。そのまま回転するように動き、植田の右手を引き上げると、植田の身体を投げつけた。かなり素早い動作に、投げられた植田はもちろん。それを目撃していた光も海も、何が起こったのか分からなかった。

空は植田の右手を掴んだまま、仰向けにした彼の左手首を思い切り踏み抑えた。

植田の動きを封じた空は、入口で驚いたように立ち止っていた警官に目を向ける。

「ちよつと、ぼつとしてないで、助けるよ」

このままでは動けないと訴えると、呆然としていた警官は我に返ったのだらう。慌てて空のもとに駆け付け、植田の身柄を拘束した。

私市がいつの間にか姿を現し、負傷した岸谷を病院へと運んで行った。この辺りの道路は、一方通行が多い上に狭く入り組んでいるため、救急車を呼ぶよりも速いと踏んだのだらう。そこに海も同乗することになった。

頭を殴られていた光も、別の車で病院へと運ばれることになり、そちらの車には空が便乗した。

若い刑事の運転する車の後部座席で、窓の外を見ていた空に、光が尋ねた。

「空、柔道でもやってたのか？」

空は窓の外から、光に視線を移す。

「いや、柔道じゃなくて、合気道みたいな。えっと、護身術？」

「何で疑問形なんだ」

光が突っ込むと、空は情けない表情を作った。

「いや、実は近所の道場にガキン頃通ってたんだけどさ。なんかこの道場、いろんなものをこつちやに教えてるところでさあ。結局なにならってるか分かんなかったんだよな。正式名称憶えてねえし」

あははと笑ってごまかす空に、光は息をついて見せた。

「まったく、空らしいよ」

光の苦笑が車中にもれた。

第三十一章 嘆き

ひんやりとした、病院の中。待合室にある長椅子に腰かけていた海は、両膝に肘をおき、拳を作った手に額を乗せた。

日はもうすっかりと沈んでいる。診療時間を終えた病院内は、申し訳程度の照明しかついておらず薄暗い。

岸谷は今集中治療室へ入っている。手術は成功したものの、予断を許さないと医師は言った。

怖くて、怖くて仕方なかった。

大切な人ばかりが、海の前から消えて行く。なぜ、どうしても思っても、答えなど出ないことを知っているのに。どうしても考えずにはいられない。

海が大きく息を吐き出した時、近づいてくる複数の足音が耳に届いた。

「あ、海いた」

空の声だ。そう思って、ゆっくりと顔を上げた海の目に、やはり思った通りの人物がいた。その後に、もう一人が続く。

「海、大丈夫か」

抑揚の無い声でそう声をかけたのは、光だった。頭には包帯が巻かれている。

「それは、こっちのセリフやる。おまえは大丈夫なんか？」

海が自身の前に立った光を見やる。

「僕は大了したことない。たんこぶができてるけど」

光は、自分のことではないように淡々と答えた。

「なあ、帰ろうぜ」

もう疲れたよと、空が海に声をかける。

海は、大きく溜息をついて、先ほどと同じように手に額をつけた。空と光は戸惑ったように顔を見合わせる。

「ほんまに、先生なんやろうか」

「え？ 何」

囁くような声音だったせいだろう。聞き取れなかったのか、空が問い返す。

「ほんまに先生が、石井や川崎を殺したんやろうか」

「でも、本人が認めてたじゃん」

空は、悲しげに顔を伏せた。海の様子に、胸を痛めたのである。海は頭を横に振った。

「でも、俺、やっぱり信じられへんねん。先生は、俺がすっごい落ち込んでる時に、俺を励ましてくれてん。俺に前を向いて生きろって言った先生が、石井達を殺すとは思えへん。石井達の親が、自分と同じ気持ちを抱えるって分かってて、先生がそんなことするやろうか……」

最後の方は自身に問いかけるように、海は囁いた。

人の姿の见えないこのフロアでは、その囁きも二人の耳に届いた。空は一人座る海を見下ろした。顔を俯けているせいで、海の様子は分からない。

海は相当岸谷のことを信頼していたのだろうか。先生がそんなことするわけない。そう、思ったがっているように見える。

実際に、岸谷は絵里の名を騙ったメールを石井たちに送っていた。そう認めたのだ。それだって、彼女たちが苦しむかもしれないと分かっているってやっていたのだらうと、空は思う。それなら、岸谷が石井たちを殺していたというのもおかしいことではないはずだ。

「海、でも……」

空が、海に呼びかけた時。光に肩を軽く掴まれて、空は口を閉ざした。光は、少し黙ってるというように、空を見る。

彼は足をかばいながら、ゆっくりと海の横に座った。

「海、僕もそう思うよ」

本当にそう思っているのかと問いたくなるような、淡々とした口調。海は訝しむように光に顔を向ける。

「何？」

「僕も、石井さんや川崎さんを殺したのが、あの人だとは思えない」
空は、その言葉にえっと声を上げた。海も驚いたように目を見開く。

「何で驚くんだ」

気分を害したように、光が眉を寄せる。

「いや、だってさ。認めてたじゃん。伊藤さんが、あんたが殺したんだって言った時にさ、岸谷さん認めてただろ？ 聞いてたよな。光」

空の脳裏に、全ては俺のせいだと言っていた岸谷の顔がよみがえる。

光は空を見上げた。

「確かに彼は、すべて俺のせいだと言った。でも、彼は一言も自分が殺したとは言わなかった」

その言葉に空はあつと声をあげそうになった。そう言われれば、確かにそうだと思ったのだ。光が、岸谷に、すべてとはどこまでをさすのだと聞いていたのを思い出した。

海がじつと光に視線を注いでいる。光の次の言葉を待つように。

「彼がはつきりと認めたのは、メールの件だけだった。でも、たぶん。君島さんのあとをつけたのもあの人だと思う」

「そんな……」

そんなことないと言おうとしたのだろう海に、黙るようにと口元で指を一本立てて見せた光は、そのまま言葉を続けた。

「海が君島さんのあとをつけたのは先生かと聞いた後、彼は全ての通りだと言っただろ。それはたぶん言葉のまんまだと思う。ただ、僕たちが思っていた意味ではなかったのかもしれない」

僕たちが思っていた意味ではない。それはつまり、君島さんを害そうとして、彼女の後をつけた訳ではないと、そういう意味か。空が考えている横で、光はなおも言葉を続ける。

「君島さんに、メールを見せてもらったんだ」

「え？ メールって悪戯メールか？」

空の問いに、光は曖昧な言葉を呟いた。

「いや、悪戯のようで、悪戯でないような」

「意味分からね」

光は不機嫌そうに漏れた海言葉に苦笑した。

「ムツコも死んだ。アンナも死んだ。次はユカかも知れない。気を付けて」

「聞き覚えあるな」

そう漏らした海の横に立っていた空は、首を捻った。

「俺知らねー。何それ」

「君島由香が事故に遭う前にきたメールの内容だよ。空が怒って病室を出た後、直接見せてもらってから、僕はおまえのあとを追ったんだ」

空はああ、あの時ねと、呟いた。

「君島さんはあのメールを見て、怖くなったと言っていたが、あのメールはそのままの意味だったんじゃないだろうか」

「そのままの意味？」

空が首を傾げて尋ねると、光は頷いた。

「そうだ。メールを送っていた石井さんと川崎さんが相次いで亡くなったことを知って、君島さんの身を案じて送ったものかもしれない。君島さんには脅しのように映ったようだけど」

海は目を見開いた。空も同様に驚きの表情を作る。

「それで言うたら、先生が君島さんのあとをつけたのは、君島さんの身を案じたから？」

海の言葉に、光は頷いた。

「その可能性が高いと思う。結果的には、逆効果になってしまったようだけど」

「そういや、君島さんが事故に会う前、危ないって男の声が聞こえたって言うってたけど、あれ、先生やったんかな」

海は大きく息を吐き出した。片膝に肘をつけて、その手に顔をうずめる。

「海？」

光が声をかけた。

「先生は、後悔しとったんやろうな、俺みたいに。……俺、先生のこと信じたいつて思っとな。でも、先生のこと、信じ切れなかった。ほんま、何やってんねやろ」

海の声が少し震えているような気がして、空は海を見下ろす。今にも泣きだすのではないかと思ったのだ。

「君島さんが事故った時も、あの時、俺に電話くれてたのに。俺、電話でれんくて。先生とも、もっと早く話したら、こんなことにはならなかったかもしれん。俺、ほんまに、なんでこんなに何もできへんのかな」

辛そうに吐き出された海の言葉。その言葉を聞いて、海の横に座る光が動いた。

海を抱きしめるように、横から手を伸ばしたのだ。

「光？」

驚いたように身じろいだ海の耳元で、光の声が響く。

「おまえにも、できることはあるだろう」

海に回した腕に力を込めて、光は続ける。

「少なくとも僕は、おまえと空に救われたよ。海と空がいてくれたから、僕は今ここにいるんだ」

小さな声だったが、その言葉は海と、そして傍らに立つ空の耳にも届いた。

海はゆっくりと片腕を光の背に回して抱き返すように力を入れた。

「ありがとう」

囁くように海は呟いた。

その横で、ずっと立っていた空がぐつと拳を握った。

「あー。もう無理だー」

いきなり大声を上げた空にびっくりして、光と海は身体を離して空に目を向けた。薄暗い照明の下、空の顔を見た二人は交互に声を上げる。

「空？」

「何で泣いてんねん」

海が突っ込んだ通り、空は大粒の涙をこぼしていた。嗚咽を漏らしながら、空は腕で流れてくる涙をぬぐった。

「だって、か、海はなんかずっと辛そうだしさ、光は、なんかいいこと言うしさ。やつと、仲直りできたんだっ、とか、色々思ったら、我慢してたのに、もう、無理だー」

あまり要領を得ない言葉だったが、とにかく二人を見ていたら泣けてきたとそういうことだろうか。海と光はそう考えて、顔を見合わせ苦笑した。

「なんや、悪かったな。空」

「僕も、ごめん」

謝罪の言葉を口にした二人に向かい、空は悪態をつくようにホントだよと言って口元に笑みを乗せた。涙を腕でぐいっとぬぐうと、晴々とした笑顔で二人に告げる。

「よしっ、じゃあ、海の先生の容疑を俺たちで晴らそう！ 先生がこのまま殺人犯にされちゃたまんねーもんな」

つい先ほどまで大泣きしていた空の明るい声に、呆氣にとられていた二人は顔を見合わせた。

光は気を取り直すように一つ咳払いすると、空と海を交互に見た。
「僕に一つ考えがある」

空と海は話を聞くべく、光に身を寄せたのだった。

第三十二章 本当は

暑い日差しを覆う雲は、どんよりとした空気をまよわせ上空に漂っていた。日差しが遮られるものの、周りの気温は高く、湿気が多い分、蒸し暑さを感じる。

光は、以前待ち合わせたのと同じ、駅前の噴水広場で、静を待っていた。

静の方から話があると電話があったのだ。光の方にも静と話しておきたいことがあったので、昼の二時半に待ち合わせをすることになった。

現在の時刻は二時二十八分。あと、二分で待ち合わせの時間になる。

「ごめん、春名君待った？」

すっかりと聞きおぼえてしまった静の声に振り向けば、静は初めて見るパンツ姿だった。丈の短い、クロップドパンツという名称だったか。その白いパンツの上に、ピンク色のフリルとリボンの付いたブラウスを着ている。決してボーイッシュではなく、清楚系を崩してはいない。そんなことを考えている光の前で立ち止り、静は笑顔を見せてくる。

「待つてないよ。今日はパンツなんだね。似合うよ」

にこりともせず告げたが、静の頬はほんのりと赤く染まった。

「あの、春名君。今日呼びだしたのは、お願いがあつて」

言い淀み、下を向いた静を、光は見下ろした。

「私と、付きあつてほしいの。ムッコやアンナに言つたみたいに、嘘じゃなく、本当に付き合ってくれないかな」

光の眉間に皺が寄った。静が潤んだ瞳で、光を見上げる。光は軽く息を飲んで、そんな静を見つめた。

静はゆっくりと動く。周りに人が居ることなど気に留めていないのかもしれない。光の首に腕をかけると、背伸びして光に顔を近づ

けた。唇と唇が触れそうになる。

反射的な行動だった。光は掌で静の唇を受け止める。その感触に気付いたのだろう。静は目をあげ、しばし、光と見つめ合った。

彼女はゆっくりと手を離すと、苦笑いを浮かべる。

「やっぱり駄目か」

「僕は、君のことが良く分らないな」

少し呆れたような声が光の口から洩れた。静は、首を傾げる。

「大人しいかと思ったら、大胆だし。人見知りするタイプかと思ったら、そうでもないし」

「何が言いたいのか？」

静が穏やかに尋ねた。光は口元だけで笑んで、静の耳元に唇を寄せた。

「でも、僕は知ってるよ」

静は慌てて、耳に手をやって光から距離を取った。行き交う人々から見れば、恋人同士がじゃれ合っているように見えるかもしれない。だが、二人の間にはそんな空気は微塵もなかった。

「な、何」

「君がやったこと」

静の顔から表情が消えた。耳にやった手を下して、光を見つめる。彼は口元の笑みをより一層深めた。

「川崎さんの手紙に書いてあっただろう？ 春名君は全て知ってるって。あの時は周りに人がいたから惚けたけど」

静の光を見る目に鋭さが生まれた。

「……じゃあ聞くけど、何を知ってるっていうの？」

静が強い視線はそのままに、笑顔を作って見せた。

「川崎さんが知っていたことは全部、かな」

光の顔には冷笑が浮かんでいる。綺麗な顔立ちの彼にはとても似合う表情だ。

静はじつと彼を見詰めた。

「人目に付かない場所に移動しようか」

光が、小声で告げた。静が聞き返す。

「え？」

「人には聞かれたくないだろ」

静は否定も肯定もせず、光に背を向けて歩き出した。光はその後をゆっくりとついて行った。

この建物は以前病院だった。

夜この建物に入ると神隠しに遭うだの、四階の五一の病室には少女の霊が出るだのという噂はこの辺りに住む人々にとっては周知である。実際に、建物を壊そうとしたことは数度あったのだが、そのたびに事故が起き、持ち主が壊すのを諦めたという。壊すのにも費用はかかるのだ。

そんな廃墟に、静は光を伴ってやってきた。

所々破損した壁や床。割れたガラスやゴミが床に落ちている。長い廊下を進み、クモの巣を避けて、静の後を追いながら、光は屋上へ出た。灰色の雲が光を出迎える。

光は額の汗をぬぐって、静と対峙した。

「ここ、知ってる？」

静が、にこやかに問いかけた。光は頷く。

「ああ、桜田さんが亡くなった場所、だろう」

静は笑みを深くした。

「ご名答」

ふざけた様に、拍手する。光は眉を潜めて見せた。

「あら、ご機嫌そこねちゃった？」

そう言う静はやけに機嫌が良いように見えた。

「ここは、私にとって、落ち着く場所なの」

弾むような口調で静が続けた。光は理解できない思いを胸に抱く。

「ここは、君の友達が亡くなった場所だろう？」

それが、なぜ落ち着く場所になるのか。

静は、光に背を向け、錆の浮いた柵に手をかけた。作の向こうには灰色の空が広がっている。

「あんなの、友達じゃないわ」

静がこちらを振り向いた。その顔から笑みが消えていた。

「さあ、教えて？ 春名君は何を知ってるの？」

探るような眼。光はその視線を受け止め、口を開く。

「君は、二年前。桜田さんがここから落ちた時、この場所に居た」

「それだけ？」

即座に問い返されて、思わず言葉に詰まる。

「私とムッコが、エリをここから突き落としたことは聞いてないの？」

光は目を見開いた。嫌な汗が頬を伝う。

やはり、そうだったのか。

光が、杏奈から話を聞いていたというのは嘘だ。本当は空と一緒に杏奈と話したことが全てで、杏奈から詳しいことは何も聞いていない。

なぜ、静は自ら口にしたのか。光は疑問を振り払うように頭を一度振って、息を吐いた。

「ああ。でも、そんなところだろうとは思ってたよ」

「そうなの。せつかくだから教えてあげる。どうして、エリが死んじゃったか」

静は手すりに背を預けて、光をまっすぐ見つめる。

二年前。由香が待ち合わせ場所に来ないことを告げ、睦子と静は絵里をこの場所へ呼び出した。

ここで、絵里をいたぶることが目的だったらしい。

「でも、あの子ったら、自分がしたことは柵に上げて、私たちに食ってかかってきたわ。本当に、身の程を知らないバカだったの。エリって子は。あの子、ムッコに掴みかかってきてね。ムッコとエリ

はここで揉み合ったの」

そう言いながら、静は手すりを二度叩く。

「そう、ちょうどこの辺り。いい加減うずくなってきた、私、ムツコに手を貸したの。ちょうどムツコもエリを付き飛ばそうとしたときだったから、二人の力が加わって、エリはここから、下に落ちちゃった。あれは事故、いいえ、正当防衛とでもいうのかしら。私がムツコに手を貸さなきゃ、エリはムツコをここから下に突き落としていたでしょうね」

静の口調は軽かった。その上、最後に小さく笑う。

光は気味の悪いものを見ているような気分になって、静から目を逸らした。

「君たちは、落ちた桜田さんをそのまま放置して逃げたんだな」

「ええ。それはアンナに聞いたの？」

その問いには答えず、光は逸らした視線を無理やり戻した。

「石井さんは、随分と呵責の念を抱いていたようだけど、君はそうは見えないな」

風が吹いた。一際強い風が、この廃病院の周りに植えられた木々を揺らし、大きな音になる。静はたなびく髪を手で押さえて、それをやり過ごした。

その時、光の携帯電話が着信を知らせるメロディーを奏でた。尻ポケットに手をやった光を見やって、静は可愛らしく首をかしげて見せた。

「出れば？」

光は無言で、携帯電話を耳にあてた。二言三言相槌を打って、携帯電話を閉じる。

「誰から？」

静の問いに、今度は答えた。

「海から、桜田絵里の父親が死んだそうだ」

少なからず驚いた後、静の顔に嬉しそうな表情が浮かぶ。その表情を見た光の顔とは対照的だ。

「当然の報いよね。私にあんな嫌がらせして」

「随分、嬉しそうだな」

光の顔に、珍しくはつきりと、嫌悪の念が現れる。静は表情を変えず、頷いた。

「当然でしょう？」

「当然、ね。まあ、確かに。全ての罪を彼にかぶせて、これで君は安泰だもんな」

どういう意味？ と、彼女は尋ねた。

光は、ゆつくりと、申し訳程度につけられた柵に向かって歩いた。じつと立っているのに疲れたのだ。

「君は石井さんと川崎さんを殺したのが、さも桜田絵里の父親……岸谷さんのように言っていたけど、僕は二人を殺したのは君だと思っている」

静は、凭れていた柵から背を離し、光と相對して腕を組んだ。

「どうして私なの？ あの人が全て自分のせいだって言ってたじゃないの」

「そうだな。でも、あの人が認めたのはメールの件と、君島さんを事故に追い込んだことだけだよ」

「そんなこと……」

ないと続けようとしたのだろうが、光はその言葉を遮って続けた。「君は、桜田絵里の父親にこう言った。あの人が犯人よ。由香が事故にあったのもあの人のせいよ。あとは……何もかも、この人のせいで。この人さえ、メールなんて送ってこなければ、きっとみんな死ななかった」

静は目を細め、前にかかった髪を肩の後ろに払った。

「それがどうしたの？」

「この時に、彼は認めるセリフを吐いた。君は彼にそのセリフを吐かせるために、敢えてこう言ったんだろう。ムツコはこの人に追い詰められたせいで死んだ。この人がエリの名を騙ってメールなんてしなければ、怯えて車道に飛び出したりしなかった。と」

静は光を黙って見つめた。口を開こうとはしない。

「この時、君は川崎さんが殺されたことは省いていた。忘れていたんじゃない。君は敢えて川崎さんのことは言わなかったんだ。彼が否定するのを恐れて。君が石井さんと川崎さんを殺したのはあなただと、言った時。石井さんの元彼が現れたのは偶然じゃなかったんだろ。君は、彼がああのタイミングで出てくるのが分かっていた……」

「そんなのあなたの勝手な妄想でしょう？ それに、もし、仮によあの人が犯人じゃないなら、私よりも怪しい人がいるじゃない」「誰？」

光は簡潔に尋ねた。静は考えるように顎に手をやった。

「ムツコの元彼。ムツコの元彼はすごく嫉妬深くて、執念深い人だったの。ムツコは一方的に別れを告げたけど、彼はそれが許せなかった」

「だから殺したっていいいたいのか？」

「ええ。それに、アンナも。アンナはムツコに彼と別れることを勧めていたから。それを逆恨みしたんじゃないかしら」

自信に満ちた静の口調。光は一度階段へと続くドアへ目を向けて、すぐに逸らすと静に視線を戻した。

「なるほど。でも、その話は少しおかしい」

静が不機嫌をあらわにした。光は気にした様子もなく、言葉を続ける。

「なら、なぜ。彼は岸谷さんを刺したんだ？ あの時彼はこう言った。やっぱりおまえが睦子を殺したのかと」

静の反応をうかがったが、彼女が表情を動かすことはなかった。光は息をつく。

「その言葉から、彼は少なくとも石井睦子を殺してはいない。そうでないと、岸谷さんを刺す意味がないからだ」

「二人を殺した罪を、エリの父親になすりつけるためだったのかもよ。私たちにそう印象づけるために、エリの父親を刺した」

静の反論に、光は首を横に振った。

「罪を逃れようとする人間が、わざわざ人前で、人を刺さないだろう。それなら、人気の無い場所で、遺書でも用意して、それこそ自殺に見せかけて殺せばいい。あんな場所でわざわざ刺す必要はない」
静がふと口元で笑んだ。少し顔を俯けたせいで、彼女の瞳は前髪に隠れた。

「なら、教えて？ エリの父親でもない、植田さんでもない。私が犯人だと思ふ理由を」

静はゆっくりと顔を上げ、挑戦的な目を光に向けた。光は頷き口を開いた。

第三十二章 本当は（後書き）

ここまでご覧いただきありがとうございました。

いかがでしたでしょうか。

今回から解決編になります。これがまただらだらと長い（自分で言うか）ですが、さいごまでお付き合いいただければ幸いです。

じつはですね。ちょこちょこ書き直しをしていたら、一つの章がえらく長くなってしまったので、その章を二つに分けました。ということと。

残りがまだ四話になります。

プロログとエピソードを含め、全三十七話になります。

次回の投稿は、三十日の土曜日を予定しております。（何時に投稿するかはまだ決めていません）

もしかすると、三十一日の日曜日になるかもしれませんが。一応土曜日とお考えいただければと思います。

それでは、また。

お会いできることを願って。

愛田美月でした。

第三十三章 その理由

葉擦れの音が耳に届く。湿った風が強く、廃墟の屋上に立つ二人の間を吹き抜ける。雲の流れが心なし、速くなつたように思われた。「この事件は、二年前の桜田絵里の自殺騒動から端を発している」

静は頷くにとどめた。これは当たり前のことだろう。光は先を続ける。

「君と、石井さんは桜田さんの死の真相を知りながら、それを黙って生活を続けていた。そして、桜田さんの名を騙ったメールが届く。そのメールを見て、石井さんは怯えた」

「ええ、そうね。でも、一番怯えていたのはユカだったわ」

「ああ、彼女も怯えてはいた。それは彼女に負い目があったから。石井さんにも、負い目があったわけだ」

静は頷いた。

「さっき私が話した内容ね」

静と睦子は絵里を揉み合いの末この屋上から突き落としてしまった。それを石井睦子は気に病んでいた。故意ではないにしろ、桜田絵里を殺してしまったのだから。

「石井さんが亡くなつたあの日。君は、石井さんが警察へ行くと云つたあと電話が切れたと言つていた」

「その通りよ。ムツコから、あとをつけられてるから、警察へ行くつていう電話の途中で切れたのよ。それがおかしなことなの？」

尋ねられて、光は無表情に応じた。

「ああ。おかしいというよりは、違和感だな。彼女は亡くなる前、僕たちの前で、警察なんていけるわけないと怒鳴つたのを君も覚えてるだろう？　なのになぜ、死ぬ前の電話では警察へ行くと言つたのか」

「追いかけて怖かつたからじゃないの？」

静の答えはもつとも聞こえる。だが、光は首を横に振つた。

「僕は彼女が覚悟を決めたからじゃないかと思っている」

静が眉を寄せた。訝しい表情で、光に疑問をぶつける。

「覚悟？ 意味が分からないんだけど」

「なぜ、彼女は警察なんていけるわけないと言ったのか。彼女は警察に、痛い腹を探られたくなかったんだ。桜田絵里の件で嫌がらせのメールが来ている。その犯人から彼女はつけられていると思っていた。警察に行けば、桜田絵里のことについて話さなければならなくなる」

「そんなの、いくらでもごまかせるのに」

彼女の言葉に、光は溜息をついた。

「石井さんには出来なかったんだろう。でも、何度もあとをつけられている内に、恐怖はピークに達した。桜田さんのことを話してでも、この恐怖から逃れたい。そんな風に思っただんじじゃないか」

「あり得ないことはないわね。でも、それでどうして私が犯人になるの？」

「君は、警察に知られたくなかったから。というよりは、世間に公表されなくなかったから、かな」

静が目を細めた。眉間に皺が寄る。だがそれもつかの間で、すぐに微笑みを浮かべた。

「そんなことないわ。私、さっきあなたに話したばかりじゃない」

静の言葉をあえて光は無視した。

「君は石井さんの精神状態を間近で見てきた。彼女がもう限界なのは分かっていたはずだ。だから、彼女が邪魔になった。君は、あの日。電話をもらって、彼女を殺す決意をした。いや、その前から殺そうと思って、彼女の家の近くに居たのかもしれないな」

静は彼の言葉を聞いて、笑った。

「すごい妄想力ね」

口元に拳をやり、また笑う。

「君は彼女を人気の無い、あの廃ビルまで呼び出し、彼女を突き落とすとした」

「ありえないわ。私、あそこに入ったことないって言ったじゃない。あなたと二人でムツコを探しに入った時が初めてなのよ」

静が言い終わった後、光は少し俯き、ずれてきた黒ぶち眼鏡を人差し指で押し上げた。

「本当に初めて？」

「ええ」

静の頷きに、光はわざとらしく首をかしげて見せた。

「それはおかしいな。なら、なぜあの時。君は僕に注意することができたんだ？」

静は何のことか分からなかったのだろう。不思議そうな顔をする。「憶えてるだろ？ 二人で廃ビルに入って、階段を上っている時。

君は僕に言った。危ない、大きな穴があいてるって。まさか、聡明な君が、忘れたなんて言わないよね」

光の言葉に、静が苦虫をかみつぶした顔になる。

「あの時、僕はおかしいと思った。あそこは暗くて、ケータイの僅かな灯りが頼りだった。足元の、ひかりなんてほとんど届かないあの場所の穴を、どうして君が気づけたんだろうとね」

静は答えなかった。右手で左肘辺りを掴み、光から目を逸らす。

「君はあの穴の存在に行く前から知っていたんだ。先に石井さんと一緒に上ったから。その時、二人の内どちらかが躓きでもしたのかな」

片腕を掴んでいた手に力がこもり、関節の骨が白く浮き上がって見えた。静は一度息を付くと、光を見やった。

「その時からずっと、私のこと疑ってたの？ 春名くん」

じっと見つめてくる静を、光は無表情で見返した。

「いや、その前から」

静が首を傾げる。

「その前？」

「君が、キーホルダーを見つけた時から、違和感があった。僕は、君に誘われるように、あのビルに入った。そして、ビルの中に落ち

ていた鞆。まるで僕らにビルの中を捜せと、誘導しようとしているような気がしたんだ」

「そんなの気のせいよ。きっと、犯人ともみ合って、鞆投げつけたりしたんじゃないの」

投げやりな口調で静が髪に手をやる。

光は息をついてから、静に言った。

「それなら、鞆の中身が飛び出していないのは変だ。それに、あの場所に争った形跡はなかった」

静が皮肉げに、口元を歪めた。

「そう、まあそういうことにしておいてあげるわ。じゃあ、春名君は私がキーホルダーを見つけた時点で、私に疑いを持っていたってことでいいのよね」

「まあ、その時点では微かにだけど。でも、動機が分からなかった。あの時まで」

「あの時？」

静の声に、光は頷いた。

「川崎さんが僕に話があると言って、僕を呼びだして聞かせてくれた。石井さんが、桜田絵里が死んだ時に、その場にいたと。彼女はそれしか言わなかった。桜田さんが落ちた時に、石井さんは一人だったのかという僕の問いに対し、彼女は、春名君はどう思うのと、尋ね返してきた」

そこで一旦言葉を切って、光は先を続けた。

「その時僕は、石井さんは一人ではなかったと確信した。石井さんが川崎さんに、その話をしたということから、川崎さんは除外される。君島さんは、自分が約束の場所へ行かなかったから、桜田さんが死んだと思い込んでいた。と、言うことは、一緒に居たのは、君以外考えられない」

「実際にその通りだったわけね」

静の声は落ち着いていた。少しも追い詰められたような感じはない。

「ああ。川崎さんは、石井さんから、君と石井さんが桜田さんを突き落としたことを聞いていた。それを石井さんが警察に話そうとしていることも。石井さんが死んだ時、彼女は、真っ先に君を疑ったんだ。だから、あんな手紙を書いた」

「春名君は全部知ってる」

静の呟きに、光は首を縦に振った。

「そう。それだ。なぜ、川崎さんはあんな手紙を書いたのか。それは、あの手紙を見た君が、疑心暗鬼に陥るのが分かっていたからだ。それはつまり、君には知られたくない秘密があるということ。あれは一種の脅しだった。彼女は、自分が殺されることを薄々感じていたんだろ。だが、みすみす殺されてやる気はなかった。死んだ後も、君を苦しめるつもりであの手紙を書いたんだ。手紙に書いた名が僕だったのは、単に君と僕がつきあっていると彼女が思っていたからだと思う。彼氏である僕が、君の罪を知っている。そう思っ君が戦々恐々とするさまを思い描いていたのかもしれない」

杏奈は光に手紙を渡した後、別れ際に言った。最後に二人に会えてよかったと。最後に。その言葉が引っかかった時、どうして呼びとめ、彼女から全て聞きださなかったのか。そんな後悔が彼の中にあつた。

あの手紙を書いた杏奈が、意図していたのかは分からないが、光にとつては静が犯人だと示す告発文に相当していた。

ふと、静の笑い声が耳に届いた。知らず俯けていた顔を上げる。いつの間にか、静がすぐ目の前に立っていた。静が光の顔を覗きこむ。

「ふーん。おっしいなあ。頭が良くて、顔も良くて、ついでお金持ち。理想の彼氏になれるっていうのに、死んでもらわなきゃならないなんて」

楽しげな口調で、さらりと告げて。静は満面の笑みを浮かべた。

第三十四章 何が幸せ？

光が静と待ち合わせるよりも前の時間。

岸谷の入院先の病院から出てきた二人は、その足で、私市が勤めていないはずの警察署に足を運んだ。

署内に入って、探す間もなく二人は私市に呼びとめられた。

「やあ、海君と、高橋君」

海を呼んだあとに空の名を呼ぶのが少し遅れたのは、きっと空の名字を思い出すのに時間を要したからだろう。

二人に近づいてきた私市は、眠そうな目をさらに細めて、二人を見下ろした。別にえらそうにしている訳ではなく、たんに私市の背が二人より高いからである。

「あの、私市さん。これから少し時間ももらえませんか？」

「いいよ。ちょうど今から一度家に戻るところだったからね」

そう言って、私市は話があるなら外へ行こうと二人を促すように背を押した。

駅から少し歩いた場所にある喫茶店に、私市は二人を案内した。

四人掛けの椅子に腰かけた私市に、細い目をしたマスターが氷水の入ったコップを置いた。

「私市、おまえまさか、援交じゃないだろうな」

声を落としてはいたが、マスターの言った一言は空と海の耳に届く。

驚いた顔を私市に向けた二人に、私市は慌てた風もなく笑顔を向けると、横に立つマスターに仏頂面を向けた。

「人聞きの悪い。俺は立派な公僕ですよ」

私市は言いながら、胸に手を当てる。純粹であるというアピールのつもりだろうか。

「どうだか」

そう毒づいて、細い目を空たちに向け、マスターは冗談だからと

言って席を離れた。

「友達ですか？」

海がカウンターの奥へと戻る背を見つめながら尋ねると、私市はああと頷いた。

「学生のころからの腐れ縁だよ。で、話って？」

私市は二人の顔を交互に見る。空は胡散臭そうに私市を見ていたが、表情を改めて口を開いた。

「教えてほしいことがあるんです」

私市は空に目を向け、顔にはほ笑みを浮かべた。その時、席に着く前に私市が勝手に頼んだ、アイスコーヒーが三つ運ばれてきた。それが全て机の上におかれ、店員が持ち場へ戻ったのを見届ける。

「教えてもらいたいのは、川崎杏奈さんが死んだ時の状況です」

「例えば」

教えないと言われなかっただけましか。そう思っただけを見ると、

彼は頷いて空の言葉の続きを引き取った。

「例えば、爪。可笑しいことになってへんかったですか？」

私市はストローに口をつけたまま、変な顔をした。二口程コーヒーを飲むと、ストローから口を離れた。

「なんで、そんな風に思っただけ？」

「ほらドラマとかで、ようあるやないですか。被害者が、犯人ともみ合って、爪に犯人の皮膚が残ってるーとか」

私市は、テレビの見すぎだと言って笑った。だが、その瞳は笑っていないように、空には見えた。

「川崎さんの爪、切られてたんじゃないですか？」

空の問いに少なからず驚いた表情を見せた私市は、ゆっくりと口角を上げて口元だけの笑みを見せる。

「その通り、爪は切られていた。どうして分かった？」

私市に聞かれ、空と海は顔を見合わせた。

「光が、言ってたんです。手は、水に浸かってたか、爪が切られていたかしたんじゃないかって」

代表して空が答える。私市は、光君かと、何かを考えるように呟いた。

「犯人は、川崎さんに傷を負わされた可能性がある。とかなんとか言うてたんですよ。で、川の水で川崎の手を洗ったか、爪を切ったかしたんちゃうかって」

ふむ。と、私市は顎に手を当てた。

「あんがい、揉み合った時に引つ搔かれたから、爪を切ったってことも考えられるな。少量の血痕も見つかったし」

私市の言葉を聞いて空が声を上げた。

「え？ それって犯人の？」

「こらこら、声が大きいよ」

私市が苦笑とともに、空を窘めた。

「そんなん、俺らに言うていいんですか？」

思わず聞いた海の横で、空は、砕けた敬語だと関西弁入るんだと関係の無いことを考えてしまっていた。

「ああ、まあ。どうだろうね」

空は、そんなんでもいいのかと突っ込みたくなった。だが、せっかく話してくれたのだからと思いとどまる。

海は、目の前に置かれたアイスコーヒーを啜ってから口を開いた。「血痕が残ったってことは、調べれば誰の血か分かるんですよ」

私市は訝しい表情を作った。

「それは、まあ。そうだが。君たちはその血の主に心当たりでもあるのか」

身を乗り出した私市に、空と海は昨夜、光と話した内容について語ったのだった。

「ねえ、春名君。私のために死んでよ」

光は一步後退った。ここに来て、すぐに、自分が絵里をここから突き落としたのだと、静が告白した時から思っていたのだ。

「最初から、僕を殺すつもりで呼びだしたんだね」

静は一步一步と光との間合いを詰める。

「そう、だから今日はスカートやめたの」

静の口調は楽しげだ。

カンと音が鳴った。ベルトが、背後にあつた柵にぶつかった音だ。光はいつの間にか隅に追い詰められていたのである。

「あなたも、可哀相よね。アンナがあの手紙なんて残さなければ、殺されずに済んだのに」

光は我知らず唾を飲み込んだ。

「死ぬ前に聞かせてくれ、君は本当に石井さんと川崎さんを殺したのか」

静は光の目の前に立ち、顔を近づけ、満面の笑みを浮かべた。

「ええ。殺したわ。だって、邪魔だったの。あの子たち」

「邪魔？」

光の口から洩れた声は、少し掠れて聞こえた。

「そう。邪魔だったの。ムッコつてば、あんなにここで言い含めたのに。エリが落ちたのは自業自得、ムッコのせいじゃないよって。

あんな奴のことは忘れて、楽しく生きましょって。なのに、あのメールのせいで、すっかりおびえて。エリを突き落としたことを警察で言うなんて言い出すから」

「あの廃ビルで彼女を突き落とした」

光の確認に、彼女は素直に頷いた。風に揺れた長い髪が彼女の顔を覆い、それを手ではねのける。

「そうよ。あなたの言うとおり、あの日、私はムッコと話し合うつもりでムッコの家に向かった。そして、電話をもらったのよ。警察へ行くってね。だから、途中で捕まえて、あの屋上へ行った。せっかく一年も黙ってきたのに、今さらあの話を蒸し返すなんてどうかしてるわ。黙っていれば誰にも分からない。それなのに。あの子

はエリの父親の嫌がらせに屈して、私との約束を破ろうとした。ずっと黙ってるって約束したのに」

静は睦子に裏切られたような気がしていたのだろうか。ふと、光はそう思った。

静は、口元を歪めて声をだした。

「私はこれから、もっともっと幸せにならなきゃならないの。エリやムツコに私の幸せを奪う権利なんてない」

「それを言うなら、君にだって彼女たちの命を奪う権利はないだろう」

光の言葉に、静は冷笑を浮かべた。

「権利？ そんなのどうでもいいわ。私は、前に立ちほだかる邪魔な虫を退治しただけ。あなただって、蚊が腕に止まったら叩くでしよう？」

当たり前のことのように紡がれる静の言葉。矛盾していると気づかないのか。

静の言葉がどれも本気だと察して、光の背に嫌な汗が伝う。

「君にとっては、川崎さんも邪魔な虫だったってわけか」

「ええ。あの子、私を呼びだして何て言ったと思う？ 友達を殺すなんて許せない。一生苦しめてやるって言ったのよ。馬鹿な子。何が友達よ。自分が私より勝ってるでも思ってたのかしら。あれも死んで当然よ」

光は、柵に背を押しつけた。静から少しでも距離を置きたかったのだ。

「あの子ってば無防備に私に背を向けるんだもの。一生苦しめてやるって言うっておきながら。私に歯向かったらどうなるか教えてあげたの。頭を押さえて、川にね、顔を抑えつけてあげたの。そしたら思ったよりあっさり死んだわ」

そんな惨いことをよくやれたものだ。当たり前のことのように喋る目の前の少女が、光は恐ろしくなった。

「君たちは友達だったんだろう」

「友達？ ばかばかしい。さっきも言ったけど、ムツコもアンナも友達なんかじゃないわ。しいて言うなら、私の下僕。お金を出せばついてくる卑しい奴らよ」

光は眉を寄せた。静の顔にはいまだ笑みが張り付いている。

「君は、そうやっていつも人を見下してるのか」

「私に見合う相手がいらないんだもの、しょうがないわよ。あなたは私に見合うかと思ってたんだけど、思い違いだったみたいね」

静の雰囲気が一変に変わった気がして、光は声を上げた。

「あの時！ あの時も君は、僕を殺すつもりだったのか？」

光の声は若干上ずって聞こえた。光にしては珍しく内心の動揺が表に出たのかもしれない。静は訝しむような表情を見せたあと、答えた。

「ああ、廃工場でのことね。そう。確かにあの時、あなたには死んでもらいたかったのよね。アンナの手紙、あなたは何のことか分からないって言ったけど、ほら、用心にこしたことはないじゃない」

彼女はふふっと笑い声を上げた。

「君はあの日、僕に犯人から呼び出しがあったと嘘の電話をよこして僕をおびき出した。でも、君が呼び出したのは僕だけじゃなかった」

光の言葉に、静は口を挟む様子を見せずじつと耳を傾けている。

「桜田さんの父親、岸谷さんと、石井さんの元彼、植田も君は呼び出したんだ」

「ん。正解」

静は言葉とともに手を叩いて見せた。

岸谷が刺されたあの日。植田が何故あの場所へ現れたのか。それが不思議だった。石井睦子と別れていた彼は、睦子が悪戯メールに悩まされていたことを知っていたとは思えない。

誰かが、彼に教えない限り。

悪戯メールのことを知らなければ、岸谷が睦子を殺した犯人だと思ひ込むことはなかったはずである。

では、それを彼に教えたのは誰か。そう考えれば、静しかない。そう、光は思ったのである。

「岸谷さんには、桜田さんの死の真相を教えてあげるとでも言ったのかな。植田には……」

「ムツコを殺した犯人を突き止めたって話したの。あと、ムツコをたぶらかした男も呼びだしたって言ったのよ」

その言葉で、光は悟った。

「僕を殴ったのは、植田だったのか……」

静は、出来のいい生徒を見る先生のように目を細め、光を褒める言葉を吐いた。

「そうよ、よくできました。あの男にはがっかりだったわ。死んだと思ってたあなたが、普通に立って私の前に現れるだもん。びっくりしちゃった。死体になったあなたの発見を遅らせようと思って、あんなとこまで運んだってのに全部無駄。まあ、全てが上手くいくとは思ってなかったけど。私にとっても大きな賭けだったし」

あの時。廃工場で岸谷に追われるようにして入ってきた静は、光を目にした時、確かに驚いた表情をしていた。あれは、死んだと思っていた光が生きていたことへの驚きだったのか。

「あなたを殺して貰って、ゼーんぶの罪をエリの父親に被せて、絵里の父親の口を封じれば、それで終わりだったのに。植田の奴」

最後は憎々しげに、吐き捨てた。だが、ふと気を取り直したように、俯きがちになっていた顔を上げた。

「でもまあ、絵里の父親を殺してくれたのはお手柄だったかな」

静は光の表情を見て、眉を顰めた。光は、嫌悪の念を隠さず顔に出していた。

「嫌な顔。そんな顔しないでよ。……少し喋りすぎちゃった。さ、もう死ぬ時間ね」

そう言うや否や、静は腰をかがめた。不意な動きに、光は虚をつかれた。

静は光の片足を取るとそれを高く持ち上げたのである。

光の身体のバランスが崩れた。
体が傾いで、視界に灰色の雲が広がった。

第三十五章 後悔はないのか

後に大きく傾ぐ身体。

背にした柵を越えそうになる。

光が小さく悲鳴を上げた時だった。それに被せるように、第三者の声が屋上に響き渡った。

「そこまでだ。伊藤静！」

聞き覚えのある声が聞こえたと思った瞬間。光は腕を掴まれ、後に傾いだ身体を引き戻された。

「空」

「おつす。お待たせ」

「大丈夫か？ 光」

心配げな声を上げたのは、静を羽交い絞めに行っている海だった。

「出てくるのが遅いよ。おまえら」

光は空に腕を掴まれたまま、その場に座りこむ。情けないが、力が抜けたのである。

「いやー、さすがに二人は若いだけあるな。おじさんは君たちの瞬間力にはかなわないよ」

と、この場にそぐわないのんきな声をあげて、後から姿をあらわしたのは、私市刑事であった。

「私市さんはまだ若いやないですか」

私市に合わせて、海がのんきな声を上げた。

「ちよつと、なんなのよ、離してよ！ 逃げも隠れもしないから暴れ出す静をもてあまし、海は私市を見やる。私市は頷いた。

海は静をゆつくりと離す。

「本当に乱暴ね。嫌になっちゃう」

服をはらいながら、そんなことを言う。

「乱暴なんはおまえやないか。光を殺そうとしやがって」

「そつだそつだ。おまえおかしいよ」

空が光を立ち上がらせながら、海という言葉に追従する。

「別に殺そうとなんてしてないわ。ちよつとじゃれあってただけじゃない」

静の言葉に、海と空は啞然とした。光は、仏頂面をつくり、私市は顎に手をやり面白いものを眺めるように静を見つめた。

「ようそんなこと言えるな。俺たちは全部聞いててんぞ」

「そつだよ。石井さんも川崎さんも桜田さんまで殺したのがおまえだつたつてことをな！」

大声を上げた空を、嫌そうに見て、静は口を開いた。

「あなたたち、入口の付近にかくれていたんでしょう？ あ的位置まで声が聞こえるわけじゃないじゃない。それに、私が殺したつていう証拠がどこにあるつていうのよ！」

『ええ。殺したわ。だつて、邪魔だつたの。あの子たち』

不意に上がった声に、皆の視線が集中した。その視線の先にいたのは光だつた。彼の手には何かが握られている。それに付いているボタンを押すと、そこから聞こえていた声が途切れた。

「ボイスレコーダーだよ。君と僕との会話は全てここに入っている」

光はそれを彼女が見えやすいように持ち上げた。

静が歯噛みする。

「それから、これや」

そう言つて海が自身の携帯電話を持ち上げた。

「光に俺から電話かかってきたん憶えてるよな。あんどき、光は電話を切るふりして、本当は通話状態のままおいてたんや。だから、俺らにもお前の話は筒抜けや」

静は冷ややかな目を海に向けた後、かすかに口の端を上げた。

「嘘よ。私が言ったのは全て嘘。ちよつとした悪ふざけよ。春名くんの推理が余りにも的外れで面白かったから、それに乗っただけ。」

あなたたちも御苦勞なことね。こんな悪ふざけのために、隠れて聞いてたなんて」

「往生際が悪いな」

空が声を上げた。静はそんな空に挑戦的な目を向ける。

「なら、証拠はあるの？ 私がムツコとエリを殺した証拠が。証拠もないのに私を犯人扱いして……」

「伊藤さん。君、キーホルダー持ってる？」

突然、光がそう尋ねた。

「何言って……」

「ほら、中学の修学旅行の時にお揃いで買ったキーホルダーだよ。いつも持ち歩いてるって言ってたろ」

空は黙って光の言葉の続きを待った。いつもなら、何言っているのかと問いただしていたところであるが、空は光に事前に聞いて知っている。光の真意を。

海も私市も口を挟まないつもりだろう。しずかに事の成り行きを見守っている。

「あのキーホルダー、爪切りになってたよね。亡くなった川崎さんの爪は片方の手だけ、切られていたんだ」

静の眉間に皺が寄る。

「ちょうど君の腕にある傷と同じ、左側の手の爪だけがね」

「それがなんだっていうの。この傷は男に襲われたときにナイフでついた傷よ！ そう言っただでしょう」

「なら、見せてくれないか？ その傷を」

静の言葉を途中で遮ったのは、私市だった。

「君のその腕の傷をみせてくれ」

もう一度同じ内容の言葉を口にした私市は、自身の腕を使って傷のある場所を示した。

「まだ、傷はふさがっていないだろう？ その傷がナイフで切られてできたものなのか、それとも爪で引っかかれてできたものなのか。見ればすぐにわかるはずだよ」

静が自身の腕に触れた。ちょうど、以前会った時に、包帯を巻いていた場所だ。

「見せる必要なんてないわ」

「ナイフで切られた傷だつてんなら、隠す必要なんてないじゃん。見せれば、疑いも晴れるぜ」

空が静に挑発的な表情を向ける。静の顔が歪んだ。

そんな彼女の様子に、私市は苦笑いを浮かべると口を開いた。

「もう一つ言っておく。川崎杏奈が亡くなった現場に、被害者のものではない血痕が残っていた。調べればすぐに分かるよ」

静が驚きの表情を私市に向ける。

「それから、岸谷さんは生きてるよ」

その言葉に、静が反射的に光に視線を向けた。大きな目をさらに見開く。

「意識を取り戻したんだ。岸谷さんはあの日、あんたに呼び出されたって証言したよ」

空が、不機嫌を滲ませた声で告げた。

「あいつが嘘ついてるのよ。私は電話なんてしてない」

静が声を上げる。光はいつもの無表情に戻って、静を見つめた。

「伊藤さん。君の負けだ。君は喋りすぎた。ニュースでは、川崎さんの死因を詳しくは報道されていないんだ。でも、君は死因が溺死であると知っていた。警察以外には知らない情報を知っていたんだ。事細かに殺害方法まで喋ってみせたんだよ」

「何よそれ。じゃあなんで、あなたは知ってたのよ。アンナが溺死で、爪が切られていたってこと。あなたも犯人しか知らない情報を知っていたってことでしょう。そうよ。あなたが犯人なんじゃないの？ 私を陥れようとしてこんな話……」

大きな溜息が辺りに響いた。その溜息を吐いた人物は、髪を無造作にかきながら、静に寝むような目を向けた。

「残念だけど。光君にあの子が溺死だったと話したのは俺だよ。まあ、爪に関しては、最初から切られていたと、分かっていたようだ

けど？」

そう言って、光に視線を向ける。光はその視線を気にも留めていないように、静を見つめている。

「ほら、やっぱり。やっぱりあなたが犯人なんじゃないの？ 爪が切られていたって知っていたのはおかしいじゃない」

余裕を取り戻したかのような静の笑顔。

「ふむ。それは俺も聞きたいね」

空は、私市の言葉に内心、どっちの味方だよと思う。

光は一度大きく息を吐いた。

「僕は知っていたんじゃない。推測しただけだ。君の腕に傷があるのを知った時にね。もし君が犯人で、その傷は川崎さんを殺害したときについた傷だったら。君一人の犯行なら、殺害場所はあの川だろう。君一人で、誰にも見られずあの場所へ遺体を捨てたとは考えにくい。もし、殺害しようとしたときにもみ合って手に傷を負ったとしたら、爪で引つかかれた可能性が高い。もし、そうなら、君はその痕跡を消そうとするはずだ。君は、爪切りとしても使えるキーホルダーを常に持っていると言っていた。それを信じるならば、それで爪を切ったか、川の水で手を洗ったかしたんじゃないかってね。あくまで、推測の一つにすぎない。だから、空たちに確認してもらったんだ、私市さんに。可能性を一つ一つ潰す目的で」

静は額に手をやって口を開いた。

「は、もう、ヤダ。もう否定するのも面倒くさくなっちゃった。血も残ってたなんて。すぐに抑えたつもりだったのに……当たり前よ。全部春名くんの推測どおりよ」

静は大きな溜息をついた。

「はあ。しょうがないか。刑事さん、私自首します」

あっさりと、静は告げた。先ほどまでの粘りが嘘のようだ。

呆気にとられた一同をしり目に、静は私市に歩み寄る。

「私が、ムッコとアンナを殺しました」

「あ、そう。でも何で急に？」

それは空も聞きたい。先ほどまで、あれほど否定していた人物とは思えないほど、あっさりと罪を認めた彼女の真意が分からなかったからだ。

「自首した方が、罪、軽くなるんでしょう」

「はあ。そういうこと」

間の抜けた声を上げた私市は、一度頭を搔くと、静の背を押して警察署へ行くよう促した。

「伊藤」

海はドアを潜ろうとしていた静の背に、呼びかけた。

「おまえ、悪いとは思わへんのか？ 三人に」

静は足を止め、少し振り向くと、海に向かって口角を上げた。

「悪い？ そんなの思っわけないじゃない。私は、ただ、邪魔な虫を排除しただけ。私の幸せを守るためには仕方なかったのよ」

静はまた、ドアの方へ身体を向けると私市とともに歩き出した。

「そんななおかしいやろ。友達殺して、幸せになんかなれるわけないやんか。絶対、絶対、後悔するで、いつか絶対後悔するからな！」

「分からない人ね。あれは友達じゃないって言ったでしょ」

「でも、石井さんも川崎さんも、君のこと友達だと言っていたよ。嫌な奴ならお金積まれても一緒にいないって、そう言っていた。少なくとも彼女たちは、君のこと友達だと思っていたよ」

「そんなの、嘘よ」

「おまえら、中学んときからずっと一緒におったんちゃうんか。嘘かどうかわからない、ほんまは分かるやろ」

海の言葉に、静は背を向けて、小馬鹿にしたように肩をすくめてみせた。そのまま、静達の姿は見えなくなる。

海は、両脇に下ろした拳をきつくにぎり締めた。腕が震える程、強く。

「なんでや。友達を邪魔ってなんやねん。命はそんな簡単なもんっちゃやろ？ それが、何で分からへんねん」

海の弱々しく響いた言葉は、灰色の空へ吸い込まれて消えた。

エピソード

青空に白い雲が浮かんでいる。明るい日差しの下。凧いだ海面が太陽の光を反射させ、きらめいていた。吹き抜ける風には潮の匂いが混じっている。

この辺りに住む人々には『海の公園』と呼ばれるこの場所は、海岸線に沿うように縦に長く作られた公園である。

海と陸の境目にある柵に、半ば体当たりするように走り寄った空は、大きく息を吸い込んだ。

「おー、海だー！」

と、当たり前前のことを大声で叫んでご満悦である。

夏休みも残り少なくなったこの日。

空と海、そして光は『宿題早く終わらせて遊びまろう計画』のその一。海へ行こうを実行していたのだった。

当初の予定では海水浴へ行くことになっていたのだが、海と光の喧嘩に、事件が重なって、結局行く機会を逃してしまった。今はもう、クラゲだらけでとても泳げる状態ではない。

そこで泳ぐのは諦めて、空たちの住む町から一番近い、海の見える場所へ来たのである。

「気持ちええなあー」

海が空の横で、伸びをしている。

「ほんとだったら泳げたのになあ。おまえらが喧嘩するからあ」

空が恨めしげに海に目をやる。

「あ、はっはっは」

何故か笑いながら、海は後ろ歩きで空から離れた。

空は、肩をすくめて彼から視線を離し、眼前に広がる大きな海にまた目を向けた。

光はそんな二人の背後に設けてあるベンチに座っていた。

「おまえも、もうちょいはいしゃいだらええのに。空みたいにな」

海が光に気付いて走り寄ると、隣に腰かけてそんなことを言った。光は、拭いていた眼鏡をかけ直す。以前のノンフレームの眼鏡ではなく、予備の黒ぶち眼鏡のままだった。頭を殴られたときに、眼鏡を失くしてから、結局見つからずじまいだったのだ。

「あんな馬鹿みないたことできないよ」

「それ、空に言ったらまた拗ねるからやめてや」

そう言っ、背もたれに身体を持たせかけた。上を向き、大きく息を吐きだす。

「どうした？」

光が、海の様子が気になったのか、そんな風に尋ねた。

あの事件に関わる少し前あたりから、海の様子がおかしかったことには、光も気づいていたのだ。ただ、どうしていいか分からず、こじれてしまった。今はもう、仲直りできたけれども。

「なんかさ、色々あったやん。石井さんも川崎さんも、それから桜田さんも。十数年しか生きてへんのに、簡単に命奪われてさ。まだまだやりたいこととか、一杯あったやろうに。そんなん考えてるとさ。人は、何のために生まれてくるんやろうとか、考えてもうてな」

伊藤静の起こした事件が明るみに出た時。マスコミはこぞってこの事件を取り上げた。だが、数日たった今では別に起こった大きな事故が連日報道されている。あの事件が人々の記憶から忘れ去られるのも、時間の問題なのかもしれない。

そんなやるせない思いを、海は抱えていた。

「らしくなく感傷的だな。……人は何のために生まれてくるのか、か。僕も、前に考えたことがあるよ。結局答えは出なかったけど」

光の言葉に、海は彼に顔を向け力なく笑って見せた。

「何や。おまえでも無理か」

光は難しいよと、肩をすくめた。

「何だよ。そんなことで悩んでんの？」

二人に背を向け、海を眺めていたはずの空が、不意に声を上げて振り向いた。二人の会話がよく聞こえたものだ。光と海がそろって

空に視線を向ける中、空は朗らかに笑って言葉を紡ぐ。

「何のために生まれてくるのかって？ そんなの決まってるじゃん。人は、生きるために生まれてくるんだよ」

強く風が吹き、空の髪が大きくなびいた。彼の背後にある青い海が、太陽の光に照らされて、きらきらと輝いて見える。

「どんなに短くてもさ、一生懸命生きるために生まれてくるんだろ」
光と海は、二度三度瞬きを繰り返した後、ゆっくりと顔を見合わせた。

そして、同時に嘖き出した。

光は口元を押さえて控え目に笑い、その横で海は大笑いしている。

「え、な、何で笑ってんだよ！」

空は、失礼なと頬を膨らませる。

「俺、間違っただけだろ。他に何かあるってのかよ！」

どうにか笑いを納めた海が、手を横に振った。

「いや、間違っただけじゃないねんけどな。空らしいなーって思ってさ」

「答えなら他にもあるだろ。子孫繁栄のため、とか？」

光がそう言くと、海が横で、身を引いた。

「うわっ。光ちゃんが言くとエッチ臭いわー」

「はあ？」

光が不機嫌に眉を寄せる。

「どこがだよ。っていつか光ちゃんはやめろ」

「うわっ。冷たいー。海子悲しい」

よよよと、泣きまねをする海を見て、空は声を上げて笑い、光は微笑みを向ける。

空は、二人の座るベンチへ駆け寄ると、海の背を思い切り叩く。
につと口の端を上げ、彼の顔を覗きこんだ。

「おまえはやっぱ、そうやってボケてるのが一番いいよ」

そう言っ、空は海をおいて歩き出す。その横で、光が立ち上がった。

「そっだな、おまえはそうやって馬鹿やってるのが一番らしいよ」

光もその言葉を残して、空を追った。

一人残された海は、呆然と、ゆっくり遠ざかっていく二人の背をしばらく見つめ、我に返って立ち上がった。

「こら、光！ 誰が馬鹿やねん。俺はアホでも馬鹿やないで！」

大きな声で、そう言っ。海は走り出す。

この二人に、まだ、言えない過去がある。

だが、それを二人に話せるようになるのは、きっとそう遠くない未来だろう。

青い空。光る海。

明るく清々しいこの場所で、二人の背を追いながら。

海の胸にそんな予感が芽生えていた。

エピローグ（後書き）

ここまでご覧いただき、本当にありがとうございました。

今回の第三十七話にあたるエピローグにて、この作品は最終話を迎えました。

いかがでしたでしょうか。

この作品は、『三兄弟の事件簿』の続編という形で描かせてもらったものになります。もともと、続編を書くつもりはなかった作品ではありましたが、読んでくださった皆様から、ありがたいことに、また読みたいというお言葉をいただいて書かせてもらいました。自身の中でも、この三兄弟はまだまだ息づいており、もうしばらく付き合っていきたいなと思っております。

前作同様、今作も、まだまだ拙く、色々と突込みどころも多かったのではないでしょうか。自身の中でも、ここはもうちょっとどうにかならなかったのかと、色々と反省しております。

ミステリというジャンルには、あまり向いていないのは自覚しているものの、やっぱり好きなんですよね。こういうジャンルも。私の書いているミステリはなんちゃっての域をでませんけども（汗）

前作でも指摘の多かった部分もまだまだ改善できていませんし（泣）やっぱり、すぐに犯人が分かってしまうんでしょうね。きつと今回も早い段階で、あ、もうこの時点で犯人分かる人には丸わかりだなと、思っちゃったり。。。まあ、でも、こいつが犯人だ。やっぱりなあ。そうだと思っただよ。なんて、いうのも楽しかったりするので（自分が読んでいるとき）それもありかななんて思っています。

す。もつと、こつた推理ものとか書いてみたいんですけども、まだまだ遠いですなあ。

三兄弟の続編をどうするか、一応お一方から読みたいとお声をいただいたので書いてみたいと思っておりますが、もしまた続きを読みたいと思ってくださった方がいらしたら、執筆する上での励みになると思いますので、ちょこつと教えていただければ嬉しいです。

感想、評価もお待ちしております。厳しい評価もちろん歓迎しております。皆様が、この長い作品にお付き合いいただき、どう感じてくださったのか。作者としてはとても気になるところなのですね。

今作は4月の13日に連載を開始しましたので、最初の方から読んでくださった方（いらつしやるかは分かりませんが）もう7カ月近くお付き合いくださったということですよ。すごいなあ。本当に、本当にありがとうございます。

読んでくださる皆様がいることで、連載も続けてこられましたし、勇気づけられました。本当に、何でも言いますが、ありがとうございます。

キャラクター投票なんてことも、初めてやってみましたし。一応、当初の予定通り、2010年11月23日までは投票できるようにしておりますので、それ以降に、ブログの方で、結果発表をしたいと思います。それまでにも、完結記念で、色々三兄弟を使って遊べたらと思っております。

最後になりましたが、この長い作品に、お付き合いくださり本当にありがとうございます。

名残惜しいですがこの辺で。

それではまた。いつか、どこかでお会いできることを願って。

愛田美月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8738k/>

三兄弟の事件簿2 ～あの世からのメール～

2010年11月9日18時40分発行